

# 和歌山市内遺跡発掘調査概報

－ 平成17年度 －

太田・黒田遺跡第57次試掘調査

鳴神Ⅴ遺跡第9次発掘調査

西庄遺跡第4次確認調査

木ノ本Ⅰ遺跡第2次試掘調査

平の下遺跡第2次確認調査

2007

和歌山市教育委員会

## 序 文

和歌山市は、紀伊山地を源に西流して紀伊水道に達する紀ノ川が形成した肥沃な和歌山平野の河口部に位置しています。

紀ノ川を中心として古代より文化の栄えた場所であり、全国的にも著名な太田・黒田遺跡や岩橋千塚古墳群をはじめとして、およそ 400 ヶ所にもものぼる遺跡が確認されています。

それらの遺跡は、私達の祖先の残した貴重な文化遺産ですが、近年は遺跡内での開発行為が盛んになり、遺跡が壊滅の危機にさらされることも少なくありません。

そうした開発に対処するため、平成 7 年度から国庫補助金・県費補助金を得て、主に個人による開発を対象にした市内遺跡の発掘調査等の事業を実施してまいりました。

本書には、平成 17 年度に実施した 5 ヶ所の発掘調査の成果を収めています。ここに報告する調査概要が活用され、地域の歴史解明に少しでも寄与されれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にあたりご指導・ご協力いただきました関係者各位及び土地所有者の皆様に深く感謝いたします。

平成 19 年 3 月 31 日

和歌山市教育委員会

教育長 空 光 昭



# 例 言

- 1 本書は、平成 17 年度国庫補助事業として計画し、財団法人和歌山市文化体育振興事業団に事業の委託を行い実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。本書の作成について、財団法人和歌山市文化体育振興事業団から埋蔵文化財業務を引き継いだ財団法人和歌山市都市整備公社が編集を行ったものである。
- 2 調査対象経費の総額は 520 万円であり、国1/2、県1/8、市 3 / 8 の補助率である。
- 3 本年度の調査対象は下記のとおりである。

事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当
太田・黒田遺跡第57次試掘調査	和歌山市黒田字桑ノ木255-1・5・6番地内	平成17年 6 月 8 日～平成17年 6 月17日	40.8㎡	北野隆亮
鳴神 V 遺跡第9次発掘調査	和歌山市秋月字中瀬176-9番地内	平成17年 6 月10日～平成17年 7 月 7 日	68.0㎡	奥村 薫
西庄遺跡第4次確認調査	和歌山市本脇43-1番地他	平成17年 9 月12日～平成17年 9 月29日	82.6㎡	井馬好英 藤藪勝則
木ノ本 I 遺跡第2次試掘調査	和歌山市西庄字宮下27・28・29番地内	平成17年10月 6 日～平成17年10月26日	134.0㎡	奥村 薫
平の下遺跡第2次確認調査	和歌山市西庄479-2,480-1・5,481-3番地内	平成17年12月 6 日～平成17年12月20日	223.0㎡	井馬好英 藤藪勝則
平成17年度出土遺物整理事業		平成17年12月12日～平成18年 1 月 6 日		奥村 薫

- 4 埋蔵文化財発掘調査及び報告書作成を行った担当者は以下の通りである。

埋蔵文化財発掘調査担当（平成 17 年度）

【和歌山市教育委員会】

学芸員 益田雅司

【財団法人和歌山市文化体育振興事業団】

学芸員 北野隆亮

学芸員 井馬好英

学芸員 奥村 薫

学芸員 藤藪勝則

報告書作成担当（平成 18 年度）

【和歌山市教育委員会】

学芸員 益田雅司

【財団法人和歌山市都市整備公社】

学芸員 北野隆亮

学芸員 井馬好英

学芸員 奥村 薫

学芸員 藤藪勝則

- 5 本書のうち発掘調査の概要部分についてはそれぞれの調査担当者が執筆した。また本書の編集について北野隆亮が行い、全体の構成については益田雅司が行った。
- 6 写真図版の遺物に付した数字番号は実測図番号に対応する。
- 7 出土遺物整理事業については、西庄遺跡第 4 次調査及び太田・黒田遺跡第 56 次調査の出土遺物のうち、未整理分の遺物コンテナ 52 箱分を対象として実施した。
- 8 本書の作成にあたり、関係機関等の方々に有益なご教示・ご指導を賜ったことに感謝の意を表します。

# 本文目次

## 太田・黒田遺跡 第 57 次試掘調査

1. 調査の契機と経過	1
2. 位置と環境	2
3. 調査の方法と経過	4
(1) 調査の方法	4
(2) 調査の概要	4
4. 遺構	5
5. 遺物	5
6. まとめ	6

## 鳴神Ⅴ遺跡第 9 次発掘調査

1. 調査の契機と経過	7
2. 位置と環境	8
3. 調査の方法と経過	9
(1) 調査の方法	9
(2) 調査の概要	10
4. 遺構	11
5. 遺物	13
6. まとめ	15

## 西庄遺跡 第 4 次確認調査

1. 調査の契機と経過	17
2. 位置と環境	18
3. 調査の方法と経過	20
(1) 調査の方法	20
(2) 調査の概要	21
4. 遺構	23
(1) 第 1 区検出の遺構	23
(2) 第 2 区検出の遺構	27
5. 遺物	29
(1) 遺構出土土器	29
(2) 遺物包含層出土土器	30
6. まとめ	41

## 木ノ本Ⅰ遺跡 第 2 次試掘調査

1. 調査の契機と経過	43
2. 位置と環境	44

3. 調査の方法と経過	45
(1) 調査の方法	45
(2) 調査の概要	46
4. 遺構	47
5. 遺物	49
6. まとめ	50

#### 平の下遺跡 第2次確認調査

1. 調査の契機と経過	51
2. 位置と環境	52
3. 調査の方法と経過	53
(1) 調査の方法	53
(2) 調査の概要	54
4. 遺構	56
5. 遺物	56
6. まとめ	58
報告書抄録	59



# 図版目次

- 図版 1 太田・黒田遺跡第 57 次試掘調査 調査前の状況(南から)、調査区全景(南から)
- 図版 2 太田・黒田遺跡第 57 次試掘調査 調査区全景(北から)、サブトレンチ3(南から)
- 図版 3 太田・黒田遺跡第 57 次試掘調査 北壁土層堆積状況(南から)、東壁土層堆積状況(西から)
- 図版 4 鳴神Ⅴ遺跡第9次発掘調査 調査前の状況(南東から)、調査地全景(北から)
- 図版 5 鳴神Ⅴ遺跡第9次発掘調査 調査地全景(南から)、S X-1 土層堆積状況(南から)
- 図版 6 鳴神Ⅴ遺跡第9次発掘調査 S X-2 検出状況(西から)、S X-2 検出状況(東から)
- 図版 7 鳴神Ⅴ遺跡第9次発掘調査 S X-2 土層堆積状況(西から)、S X-2 土層堆積状況(東から)
- 図版 8 鳴神Ⅴ遺跡第9次発掘調査 ピット群(南から)、調査地全景(近世～近代)(北西から)
- 図版 9 鳴神Ⅴ遺跡第9次発掘調査 出土遺物
- 図版 10 西庄遺跡第4次確認調査 調査前の状況(南西から)、調査区近景(北西から)
- 図版 11 西庄遺跡第4次確認調査 1-1区 全景(南から)、1-2区 全景(南から)
- 図版 12 西庄遺跡第4次確認調査 1-3区 全景(南から)、1-4区 全景(東から)
- 図版 13 西庄遺跡第4次確認調査 1-5区 全景(南から)、  
1-5区 北壁及びS K-1 土層堆積状況(南から)
- 図版 14 西庄遺跡第4次確認調査 1-6区 全景(西から)、1-6区 S K-3 須恵器出土状況(北から)
- 図版 15 西庄遺跡第4次確認調査 1-7区 全景(西から)、  
1-7区 東壁及びS D-1 土層堆積状況(西から)
- 図版 16 西庄遺跡第4次確認調査 1-8区 全景(北から)、  
1-8区 東壁及びS X-4 土層堆積状況(西から)
- 図版 17 西庄遺跡第4次確認調査 1-9区 全景(北から)、  
1-9区 東壁及びS X-5・6 土層堆積状況(西から)
- 図版 18 西庄遺跡第4次確認調査 1-10区 全景(西から)、  
1-10区 東壁及びS X-7・8 土層堆積状況(西から)
- 図版 19 西庄遺跡第4次確認調査 1-11区 全景(北から)、  
1-11区 東壁及びS X-9 土層堆積状況(西から)
- 図版 20 西庄遺跡第4次確認調査 1-12区 全景(南から)、  
1-12区 北壁及びS X-1・2 土層堆積状況(南から)
- 図版 21 西庄遺跡第4次確認調査 2-1区 全景(西から)、2-2区 全景(西から)
- 図版 22 西庄遺跡第4次確認調査 2-3区 全景(西から)、2-4区 全景(南から)
- 図版 23 西庄遺跡第4次確認調査 2-5区 全景(西から)、2-6区 全景(北から)
- 図版 24 西庄遺跡第4次確認調査 1-1区 東壁土層堆積状況(西から)、  
1-4区 北壁土層堆積状況(南から)
- 図版 25 西庄遺跡第4次確認調査 2-1区 東壁土層堆積状況(西から)、  
2-5区 北壁土層堆積状況(南から)
- 図版 26 西庄遺跡第4次確認調査 出土遺物
- 図版 27 西庄遺跡第4次確認調査 出土遺物
- 図版 28 西庄遺跡第4次確認調査 出土遺物



- 図版 29 西庄遺跡第4次確認調査 出土遺物
- 図版 30 西庄遺跡第4次確認調査 出土遺物
- 図版 31 西庄遺跡第4次確認調査 出土遺物
- 図版 32 西庄遺跡第4次確認調査 出土遺物
- 図版 33 西庄遺跡第4次確認調査 出土遺物
- 図版 34 木ノ本Ⅰ遺跡第2次試掘調査 調査前の状況(北から)、調査前の状況(南から)
- 図版 35 木ノ本Ⅰ遺跡第2次試掘調査 グリッド1全景(南から)、グリッド1土層堆積状況(南から)
- 図版 36 木ノ本Ⅰ遺跡第2次試掘調査 グリッド2全景(南から)、グリッド2土層堆積状況(東から)
- 図版 37 木ノ本Ⅰ遺跡第2次試掘調査 トレンチ全景(北から)、トレンチ全景(南から)
- 図版 38 木ノ本Ⅰ遺跡第2次試掘調査 トレンチS 2m付近第5層上面検出遺構(西から)、  
トレンチS 15 m付近第5層上面検出遺構(西から)
- 図版 39 木ノ本Ⅰ遺跡第2次試掘調査 トレンチS 40 m付近第5層上面検出遺構(西から)、  
トレンチS 60 m付近第5層上面検出遺構(西から)
- 図版 40 木ノ本Ⅰ遺跡第2次試掘調査 SK-1(南から)、SK-1(東から)
- 図版 41 木ノ本Ⅰ遺跡第2次試掘調査 サブトレンチ1(西から)、サブトレンチ2(西から)
- 図版 42 木ノ本Ⅰ遺跡第2次試掘調査 サブトレンチ3(西から)、サブトレンチ4(西から)
- 図版 43 平の下遺跡第2次確認調査 調査前の状況(北西から)、調査前の状況(南東から)
- 図版 44 平の下遺跡第2次確認調査 第1区全景(北から)、第2区全景(南から)、第3区全景(南から)、  
第4区全景(北から)
- 図版 45 平の下遺跡第2次確認調査 第5区全景(南から)、第6区全景(南から)、第7区全景(南から)、  
第8区全景(北から)
- 図版 46 平の下遺跡第2次確認調査 第1区SK-1(東から)、  
第1区東端部東壁SK-1土層堆積状況(西から)
- 図版 47 平の下遺跡第2次確認調査 第4区SK-2(東から)、  
第4区北壁SK-2土層堆積状況(南から)
- 図版 48 平の下遺跡第2次確認調査 第1区石垣付近東壁土層堆積状況(西から)、  
第2区南端部東壁土層堆積状況(西から)
- 図版 49 平の下遺跡第2次確認調査 第4区石垣付近東壁土層堆積状況(西から)、  
第6区北端部東壁土層堆積状況(西から)
- 図版 50 平の下遺跡第2次確認調査 第7区南端部東壁土層堆積状況(西から)、出土遺物

# 太田・黒田遺跡 第57次試掘調査

## 1. 調査の契機と経過

太田・黒田遺跡(遺跡番号327)は、紀ノ川下流南岸の和歌山平野のほぼ中央部に位置し、平野部でも微高地にあたる地点に所在する。遺跡は南北約900m、東西約550mの範囲をもつ弥生時代から江戸時代にかけての大規模な複合遺跡である。

今回の調査は、遺跡範囲北端部の範囲外隣接地である和歌山市黒田字桑ノ木255-1・5・6番地内においてマンション建設工事が行われることになり、遺跡範囲の近接地であることから、工事に先立ち試掘調査を実施することになった(第1図)。調査は、和歌山市教育委員会が国庫補助金を得て、財団法人和歌山市文化体育振興事業団が同教育委員会の指導のもと委託を受けて実施した。

今回の調査地周辺における過去の調査では、調査地の南約200m地点で第24次調査を行い、弥生時代中期の遺構面を2面確認し、土坑、溝、土器棺などを検出した。更に南に100m地点では1970年の工事の際に銅鐸が出土している。調査地の南西約200mには、第36・42・43次調査地、更に南西に約100m地点では第23・51次調査地がある。これらの調査のうち第42次調査は和歌山市教育委員会、その他は財団法人和歌山市文化体育振興事業団が調査を行ったものである。第36次調査では鎌倉時代と江戸時代の土坑や溝、第42次調査では弥生時代中期の大溝などを検出した。第43次調査では弥生時代中期から古墳時代と鎌倉時代までの2面の遺構面を確認し、弥生時代中期の竪穴住居跡、土坑、土器棺などを検出した。第23次調査は小規模な調査であったが、弥生時代中期の土坑、古墳時代後期の溝など、第51次調査では弥生時代前期の環濠、弥生時代中期の土坑、古墳時代前期の竪穴住居などを検出した。

現地調査は、平成17年6月8日から同年6月17日までの期間で行った。



第1図 調査位置図



## 2. 位置と環境

和歌山市は和歌山県の北西端に位置し、北は和泉山脈を境に大阪府泉南郡岬町及び阪南市に、東は和歌山県岩出市及び紀の川市に、南は海南市に接し、西は紀伊水道に面している。奈良県の大台ヶ原を源とする紀ノ川は、本市のほぼ中央を西流して紀伊水道に注いでおり、度重なる流路方向の変化により運ばれた土砂によって河口部に和歌山平野が形成されている。

太田・黒田遺跡（1）は、この和歌山平野の紀ノ川南岸平野部に立地する弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。当遺跡が所在する和歌山市太田及び黒田周辺から秋月・鳴神地域にかけては、平野部のなかでも標高4 m前後を測る微高地にあたる（第2図）。

周辺の遺跡について概観する。縄文時代の遺跡では東方約2 kmの岩橋山塊丘陵裾部に鳴神貝塚（7）がある。鳴神貝塚は近畿地方で最初に発見された貝塚として国の史跡に指定されている。縄文時代中期から晩期の土器のほか弥生時代前期の土器も出土し、縄文時代晩期の土坑墓からは、猿の焼骨を用いた耳栓などの装身具とともに、上下の門歯を抜歯したシャーマンと考えられる若い女性の伸展葬人骨が見つっている。また、近年の調査でも縄文時代晩期の土坑墓を3基検出した。これらの遺構からは8体以上の埋葬人骨が出土し、特にそのうちの1基からは3体を合葬した状態であった。

次に弥生時代の遺跡としては、太田・黒田遺跡やその東側平野部の微高地を中心に立地する秋月遺跡（5）において弥生時代前期から中期の遺構が確認されている。太田・黒田遺跡は、弥生時代中期を中心とする集落遺跡であるが、近年の調査では弥生時代前期末の二重の環濠とその内側に井戸や土坑などを検出し、前期環濠集落の様相も明らかにされ始めている。また集落の西側縁辺部の調査では、弥生時代中期の3時期にわたる水田遺構など生産域に関わる遺構が検出されている。秋月遺跡では、弥生時代前期の石器製作に関わると考えられる土坑や、遺跡の南東部を北東から南西方向に流れる自然流路が検出されている。

紀ノ川南岸の古墳時代集落は、秋月遺跡、鳴神遺跡群（3・6・9・10）、音浦遺跡（8）、友田町遺跡（25）などのように弥生時代と同じく岩橋山塊西麓の微高地を中心に集中して立地している。秋月遺跡では、庄内式併行期の一辺7.8 mを測る大型住居を含む古墳時代前期の竪穴住居を3棟検出した。当該期の大型竪穴住居は、紀ノ川北岸の府中遺跡や吉田遺跡でも検出されており、古墳時代前期の集落様相を検討するための資料として重要である。また鳴神遺跡群では、竪穴住居や掘立柱建物のほかに古墳時代前期以降の用水路と考えられる溝などが見つかっており、鳴神V遺跡（3）では小區画水田が8単位検出されている。友田町遺跡では、布掘状のホリカタをもつ古墳時代後期の掘立柱建物や溝群が検出され、特に滑石製の勾玉・剣形模造品・有孔円板など祭祀関連遺物が溝から一括出土している。

古墳については、秋月遺跡において出現期的前方後円墳がみられるほか、鳴神V遺跡では微高地上に古墳時代前期から後期にかけての方墳を主体とした古墳群が築造されている。さらにその東にある花山・岩橋の丘陵上には、前期から中期にかけての花山古墳群（14）や、中期から後期にかけての古墳数約700基前後を数える群集墳として国の史跡に指定されている岩橋千塚古墳群（15）が築造されている。

歴史時代になると、鳴神V遺跡では土馬、須恵器円面硯、初期貿易陶磁器、緑釉・灰釉陶器など奈良時代から平安時代の官衙的な施設の存在を窺わせる遺物が出土し、太田・黒田遺跡でも飛鳥～奈良時代の井戸から斎串、和同開珎42枚、万年通寶4枚など井戸祭祀に関わる遺物が出土している他、平安



時代の須恵器円面硯などが出土している。

鎌倉時代では、太田・黒田遺跡において土師器皿・台付皿・盤、瓦器碗など多量の遺物が井戸や土坑から出土しており、鳴神Ⅴ遺跡においても、溝、石組井戸、土坑墓などが検出されている。室町時代では、太田・黒田遺跡の南半部は天正十三年（1585）の秀吉による紀州攻めの際に水攻めが行われたと推定されている太田城跡（2）である。第1～9・17・19次調査では、東西方向にのびる幅10m、深さ3mを測る中世末期の大規模な濠状遺構が検出されており、太田城と関連する遺構として注目されている。また太田・黒田遺跡の北東約800mに残る出水の堤跡（4）は、水攻め時の堤が残存したものと考えられている。江戸時代の遺跡では、和歌山城（史跡）とその城下町である和歌山城跡（27）や鷺ノ森遺跡（26）などがある。



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	太田・黒田遺跡	弥生～江戸	10	鳴神Ⅱ遺跡	弥生～平安	19	井辺遺跡	弥生
2	太田城跡	安土・桃山	11	大日山Ⅰ遺跡	古墳～奈良	20	神前遺跡	弥生～江戸
3	鳴神Ⅴ遺跡	弥生～鎌倉	12	井辺Ⅰ遺跡	弥生～古墳	21	井辺前山古墳群	古墳
4	太田城水攻め堤跡	戦国～江戸	13	井辺Ⅱ遺跡	弥生～古墳	22	和田古墳群	古墳
5	秋月遺跡	弥生～江戸	14	花山古墳群	古墳	23	和田遺跡	弥生
6	鳴神Ⅳ遺跡	弥生～江戸	15	岩橋千塚古墳群	古墳	24	国有本遺跡	弥生～古墳
7	鳴神貝塚	縄文～弥生	16	寺内古墳群	古墳	25	友田町遺跡	弥生～平安
8	音浦遺跡	古墳	17	山東古墳群	古墳	26	鷺ノ森遺跡	弥生～江戸
9	鳴神Ⅵ遺跡	弥生～江戸	18	津秦Ⅱ遺跡	古墳～奈良	27	和歌山城跡	江戸

第2図 太田・黒田遺跡周辺の遺跡分布図



### 3. 調査の方法と経過

#### (1) 調査の方法

調査地は、遺跡範囲北端部の範囲外隣接地に位置し、現況は駐車場であった（図版1）。

調査は、マンション建設工事予定範囲に東西幅3.4m、南北長12.0mの面積40.8㎡の調査区を設定した（第3図）。

重機による掘削は、深さ約60cmまでの造成土、旧表土である厚さ約20cmの耕作土（第1層）、遺物を包含する厚さ約10cmの第2層について行った。掘削時に調査区の南端約3mの範囲が深く攪乱されている状況がみられたため、この部分の人力による調査は除外した。

人力による調査は、まず第3層上面における遺構検出作業を行い、遺構を検出できなかったため第3層以下の土層堆積状況及び遺構の有無を確認するため東壁に沿って幅1.2mのサブトレンチ1を設定し、1層毎に掘り下げ、遺物の採取及び各層上面での遺構検出作業を第5層上面まで行った。また、第5層上面の堆積について北側に向かって下降する傾斜がみられたため、東西方向の土層堆積状況を観察する目的で北壁に沿って幅1mのサブトレンチ2を設定し、同様の調査を行った。

サブトレンチ1・2の調査により、第4層上面及び第5層上面において遺構を検出することができなかったが、第3・4層から少量の遺物が出土したため、調査区南側部分に南北4m、東西2mのサブトレンチ3を設定し、これについても同様の調査を行った（図版2）。また、サブトレンチ1・2の壁際に幅40cmの深掘部分を設け、第5層以下の土層堆積状況の確認に努めた（図版3）。

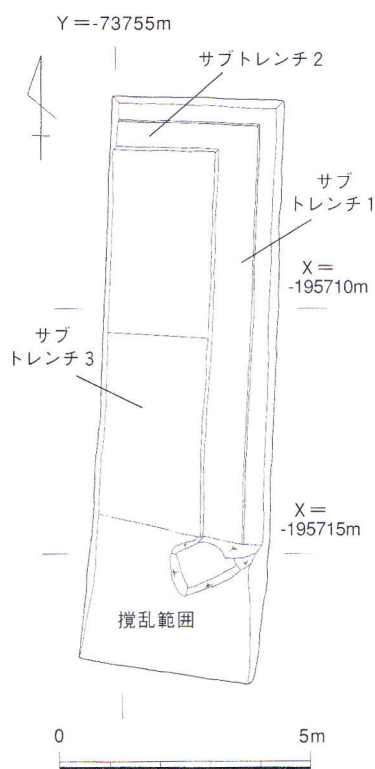
記録保存の方法として、調査範囲内に国土座標軸（日本測地系）を基準とした値を設置し、遺構実測の基準とした。平面実測図、土層堆積実測図を縮尺1/20で作成した。

なお遺跡の水準は国家水準点（T.P.値）を基準とし、土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』を用いた。

#### (2) 調査の概要

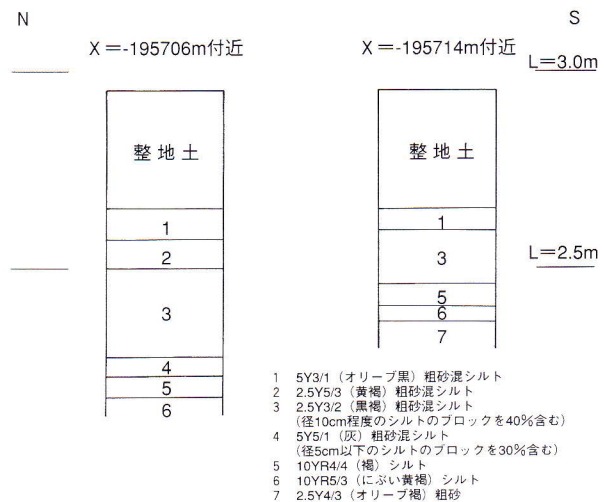
各調査区における基本層序は第4図に示した通りである（図版3）。

調査地の地表面標高は約3.0mを測る。地表下深さ約60cmまでは近年のものとみられる整地土が堆積しており、その下の旧表土と考えられる第1層は厚さ約30cmの厚みの水田耕土である。第2層は厚さ約10cmの厚みをもつ黄褐色のシルトであり、床土に相当する層である。第3層は厚さ25cmの厚みをもつ黒褐色の粗砂混シルトで江戸時代までの遺物を僅かに包含する層である。この第3層上面まで重機により全面掘削を行い、以下の土層堆積はサブトレンチ調査において確認したものである。第4層は厚さ約5cmの厚みの灰色の粗砂混シルトで、第3層と同様江戸時代までの遺物を僅かに包含する層である。第3・4層はX=-195714m付近から北東方向に下降した傾斜をもって堆積している。また、これらの層には約10cm大のブロック状のシル



第3図 調査地平面図

トが30～40%混入しており、第2層と第3層、第3層と第4層、第4層と第5層の各境界面が平坦ではなく波状に乱れていることなどから、第2～4層は第5層上面において低地部分を埋め立てた盛土と考えられる。第5層は厚さ10cmの褐色のシルトで、南西から北東に下降した傾斜をもって堆積しており、調査区北東隅が最も低く第5層下面の標高は1.8mを測り、土師器の細片が1点出土した。第6層は厚さ5cm以上のにぶい黄褐のシルト、第7層は厚さ10cm以上のオリーブ褐の粗砂で、これらの層からは遺物の出土はみられなかった。



第4図 調査地土層柱状模式図

## 4. 遺構

今回の調査で確認した第2～4層は、南西から北東に下降した傾斜をもって堆積していた第5層上面（標高約1.9m）を江戸時代に埋め立てた盛土であると考えられた。第2層の直上の第1層は水田耕土であることから、周辺地における江戸時代の水田開発にかかる整地により、これらの盛土が行われた可能性がある。

第4層下の第5層は中世の土師器とみられる細片が1点出土していることから、中世以降の堆積であるとみられ、第5層が堆積した時には調査区から北東方向に向かって微低地状地形が周囲に広がっていたものと考えられる。また、その下の第6層についても同様の状況があり、第5・6層は微低地状地形の低い部分に堆積した土層であると考えられる。

## 5. 遺物

出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瀬戸・美濃系陶器、肥前系陶磁器、焼締陶器、平・丸瓦、石英製火打石、碁石などである。遺物の大半は第3・4層から出土したもので、全て小破片である。第5層からは中世の土師器とみられる細片が1点出土した。

## 6. まとめ

今回の調査では、第5層上面で南西から北東に下降した傾斜をもつ中世以降とみられる微低地状地形を検出し、調査区から北東方向に向かって微低地状地形が周囲に広がっていたことを明らかにした。

第2～4層は、江戸時代に微低地状地形を埋め立てた盛土であると考えられ、第3・4層から出土した遺物の一群について、最も新しいとみられる肥前系陶磁器（染付碗）と焼締陶器（堺焼播鉢）の年代観から、埋め立ての時期を18世紀後半以降と考えることができる。また、これらの層の直上の第1層は水田耕土であることから、周辺地における江戸時代の水田開発にかかる整地により、これらの盛土が行われた可能性を考えることができる。

以上、遺物包含層及び旧地形の状況を確認したが、明確な遺構を検出することができなかった。また、遺物包含層（第2～4層）については、埋め立てのために別な場所から持ち運ばれてきたものであると考えられることから、本調査地は太田・黒田遺跡の範囲外であると考えられる。



# 鳴神 V 遺跡第 9 次発掘調査

## 1. 調査の契機と経過

今回の調査は、和歌山市秋月字中瀬176-9番地において個人住宅が建築されることになり、この場所が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地地図』に記載された周知の遺跡である鳴神Ⅴ遺跡(遺跡番号318)の範囲内に相当することから、工事に先立ち調査を実施することとなった。

鳴神Ⅴ遺跡は和歌山市の東部に位置し、紀ノ川下流南岸の和歌山平野の沖積平野に立地する。この遺跡は東西300m、南北400mの範囲に広がる弥生時代から平安時代の遺物散布地として知られる。この周辺は平野部でも微高地に当たる地点であり、東側に鳴神Ⅳ遺跡、西側には秋月遺跡に接している(第1図)。本遺跡は昭和52～54年にかけて国道24号線建設に際し、和歌山県教育委員会によって鳴神地区遺跡として発掘調査が行われ、その後和歌山市教育委員会と財団法人和歌山市文化体育振興事業団によって8次にわたる発掘調査が行われ、今回で9次を数えるものである。

調査対象地は遺跡範囲内の北端に位置し、調査地周辺における主な調査成果としては、約100m南東地点において行われた第5次調査で、古墳時代の溝状遺構や奈良時代の柱穴が検出されている。また、そこから南へ約100m地点の第6次調査では、遺構面が4面確認され、古墳時代の土坑、平安時代の柱穴、鎌倉時代の溝、江戸時代の土坑が検出された。さらに、その南隣接地で行われた第4次調査では遺構面が2面確認され、鎌倉時代の溝状遺構や土坑などが検出されている。

この調査は、和歌山市教育委員会が国庫補助金を得て、財団法人和歌山市文化体育振興事業団が同教育委員会の委託を受けて調査を実施したものである。現地における調査期間は、平成17年6月10日から同年7月7日までの約1ヶ月間を要した。



第1図 調査位置図



## 2. 位置と環境

和歌山市は和歌山県の北西端に位置し、北は和泉山脈を境に大阪府泉南郡岬町・阪南市に、東は和歌山県岩出市・紀の川市に、南は海南市に接し、西は紀伊水道に面する。本市は和泉山脈の南裾に沿って西流し、紀伊水道に流れ込む紀ノ川により形成された和歌山平野を中心に立地する。(P.3 太田・黒田遺跡第57次調査 第2図参照)。

鳴神Ⅴ遺跡(3)は、紀ノ川南岸の平野部微高地上に位置する遺跡である。周辺の遺跡について概観すると、紀ノ川南岸における旧石器時代の遺跡としては和歌山市と紀の川市貴志川町の境にひろがる大池遺跡があげられ、ナイフ形石器や角錐状石器、尖頭器など多量の石器類が発見されており、当該期においては県下でも主要な遺跡の一つとして知られている。

縄文時代の遺跡としては、岩橋山塊の周辺部に鳴神貝塚(7)や岡崎縄文遺跡、櫛宜貝塚、吉礼貝塚があり、鳴神貝塚は近畿地方で最初に発見された中期から晩期に至る貝塚として著名な遺跡である。2004年に財団法人和歌山市文化体育振興事業団によって行われた鳴神貝塚の北西に隣接する鳴神Ⅳ遺跡(6)の調査において、鳴神貝塚の延長部とみられる貝層を検出し、晩期の土坑墓から8体以上の埋葬人骨などが出土している。櫛宜貝塚は発掘調査により前期を主体とした南北2本の貝層が平行して存在することが明らかとなっており、貝層に挟まれた空間に集落の中心があると考えられている。吉礼貝塚からは、縄文時代前期前半から後期にわたる遺物が出土しており、紀ノ川流域における縄文時代の遺跡では最古のものである。これら低丘陵に位置する遺跡に対し、岡崎縄文遺跡はやや低地部に立地する遺跡として注目され、後・晩期の遺物が出土している。これらの貝塚から出土する貝類は、海水系のものが多数見られることから、海岸線が岩橋山塊西側にまで及んでいたことを示している。

弥生時代の遺跡としては、当遺跡周辺の紀ノ川南岸平野部に太田・黒田遺跡(1)、秋月遺跡(5)などの遺跡が知られる。太田・黒田遺跡は、前期後半から中期を中心として営まれた県内最大規模の集落跡で、近年の調査によって前期段階の2重環濠が検出され、環濠集落であることが確認された。出土遺物には鹿を描いた絵画土器や銅鐸、直柄広鋤や一木平鋤など注目される遺物が多くみられる。また秋月遺跡においても、近年の遺跡東端部における調査によって前期の自然流路や石器製作土坑などが検出され、前期段階における集落の形成が確認された。井辺遺跡(19)についてはこれまで後期の列状に並んだ2本の土器列が検出されているが、後期段階の遺構・遺物の出土は極めて少なく、古墳時代前期が中心時期であると考えられていたが、近年の調査成果から遺跡北東部に集落が展開していること、集落の中心時期は弥生時代後期から古墳時代初頭であること、集落の形成時期は弥生時代中期に遡る可能性があることなどが明らかとされた。

古墳時代の集落も引き続き平野部を中心に立地しており、大日山Ⅰ遺跡(11)、友田町遺跡(25)、鳴神遺跡群からは集落を中心とした遺構・遺物が検出されている。岩橋山塊西端の山麓付近の大日山Ⅰ遺跡において、竪穴住居・掘立柱建物などが検出されたほか、滑石製模造品や手捏ね土器、鳥形土器などの祭祀遺物が出土しており、重要な集落遺跡であるといえる。また、鳴神Ⅳ遺跡では中期後半から後期前半の竪穴住居群などが確認されている。岩橋山塊西部の音浦遺跡(8)、鳴神Ⅱ遺跡(10)、鳴神Ⅴ遺跡からは現代の用水路と流路方向を同じくする溝が検出されており、その中には旧河道を再掘削しているものもあり、この地一帯が水路として重要な地域であったことが知られる。またこれらの遺跡からは、滑石製模造品や手捏ね土器等の祭祀遺物が出土していて、河川や用水に関わる祭祀が行われたとも考えられている。鳴神Ⅴ遺跡では

それらの水路から水を引いたと考えられる前期の水田区画などが確認されている。墓域については、前期末には花山古墳群(14)において古墳群が造営されるが、平野部に位置する秋月遺跡では前方後円墳や方墳群、鳴神Ⅳ遺跡では方墳、鳴神Ⅴ遺跡でも円墳や方墳群などが確認されており、それに先行あるいは併行するものとして注目できる。中期後半～後期には岩橋山塊の丘陵上に岩橋千塚古墳群(15)が古墳築造の盛期を迎え、その周辺には寺内古墳群(16)、山東古墳群(17)など後期の群集墳が密集する。また生産遺跡としては吉礼砂羅谷窯跡があり、奈良時代まで継続することが確認されている。

奈良時代から平安時代にかけては、太田・黒田遺跡、鳴神Ⅴ遺跡、秋月遺跡、大日山Ⅰ遺跡が知られる。太田・黒田遺跡では、建物遺構は未確認ながら、大型の井戸が2基検出されている。井戸底からは斎串、あるいは和同開珎42枚・万年通宝4枚などがまとまって出土しており、井戸祭祀に関わるものとして注目される。その他、奈良時代前期から後期の瓦や円面硯等が出土しており、郡衙跡とも推定されている。鳴神Ⅴ遺跡では段構成土と呼ばれる土壇状遺構などから、奈良時代から平安時代前期の多量の遺物が出土しており、特に土馬、須恵器硯、初期貿易陶磁器、緑釉・灰釉陶器などの特筆すべき遺物が出土している。秋月遺跡では平安時代の瓦が多量に出土しており、神宮寺に関するものと考えられている。

鎌倉時代では、秋月遺跡や鳴神Ⅴ遺跡において溝、河道、石組井戸群、土坑墓などが検出されているが、詳細な様相が明らかな遺跡は少ない。

室町時代には、太田・黒田遺跡において大型の濠状遺構、溝などが確認されている。濠状遺構は、幅約10m、深さ3m以上、長さは約130m分が確認され、ともに廃絶時期が16世紀後半であることなどから、雑賀衆の太田城跡(2)に関わるものと推定されている。

江戸時代の遺跡としては和歌山城跡(27)とその城下町があげられ、鷺ノ森遺跡(26)は三の丸北側の町屋に相当し、江戸時代の遺構面が3面以上検出され、多くの遺構・遺物が出土している。

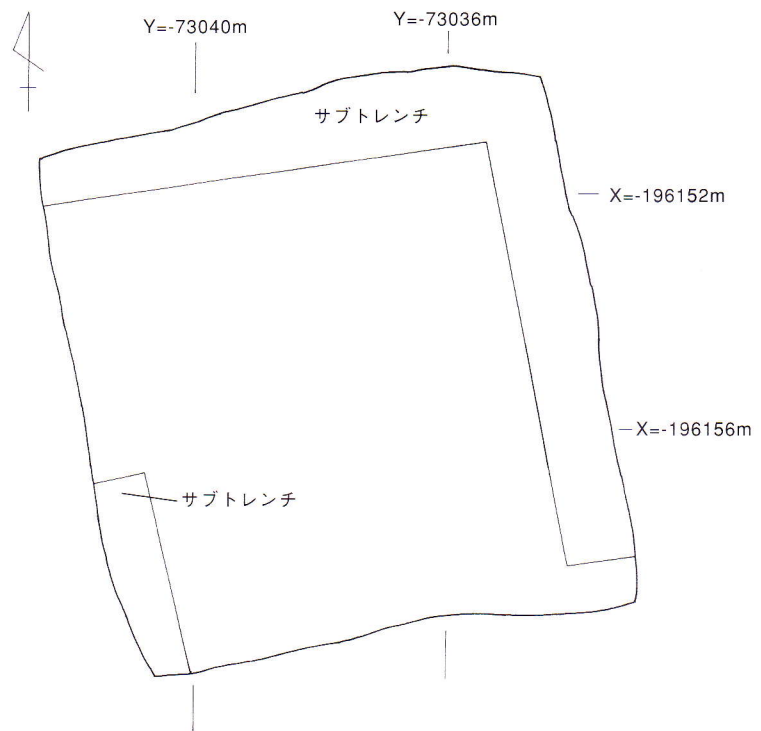
### 3. 調査の方法と経過

#### (1) 調査の方法

調査地は遺跡範囲の北西端部に位置し、現況は宅地であった。調査は、住宅建築予定範囲内に東西8.0m、南北8.5mの調査区を設けて行った。さらに、下層遺構の有無及び土層堆積状況の確認を目的として部分的に下層調査(サブトレンチ)を実施した。

重機による掘削は、深さ50cmの宅地造成土と旧表土である厚さ30～60cmの整地土、旧耕作土(第1層)について行った。

人力掘削による調査は、まず



第2図 調査地区割図



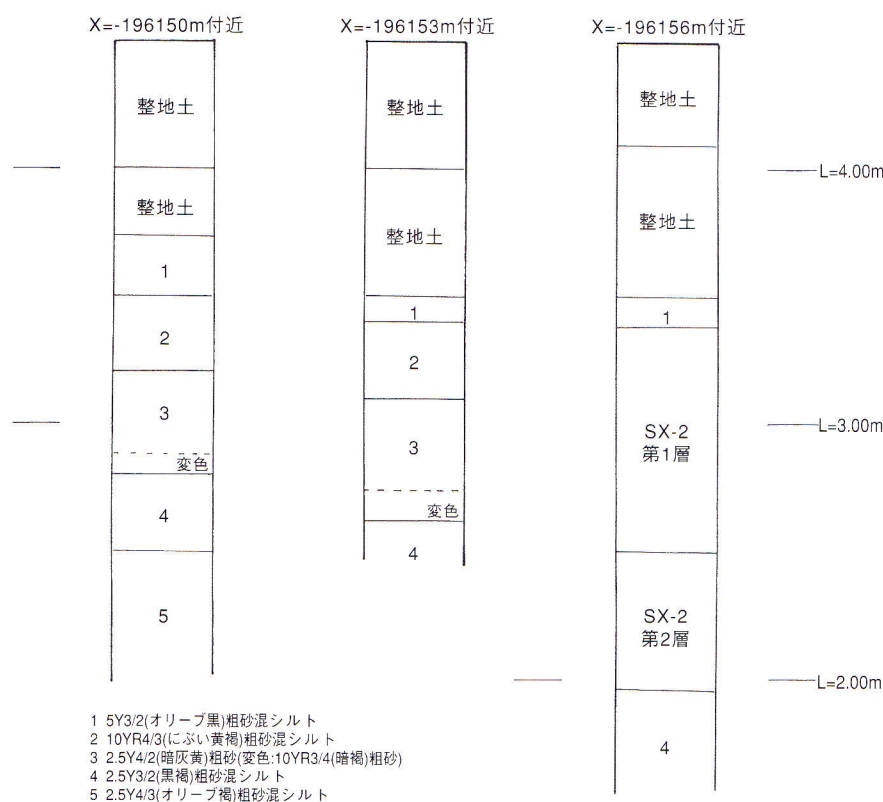
第2層上面において遺構検出し、調査を行った。第2層以下の土層堆積状況及び遺構の有無を確認するため東壁面に沿って、幅60cmのサブトレンチ1を設定し、1層ずつ掘り下げ、第5層上面まで行った。また、西壁面において第2層の堆積が傾斜していることを確認したため、調査区南半西壁面に沿って、幅40cmのサブトレンチ2を設定し、同様の調査を行った。さらに、重機を用いて調査区東壁面に沿って下層の堆積状況の確認を行った（サブトレンチ3）が、連日の降水により壁面の崩落が著しく、一部の確認しかできなかった。

記録保存の方法として、調査範囲内に国土座標軸（旧日本測地系）を基準とした値を設置し、遺構実測の基準とした。平面実測図、土層堆積実測図を縮尺1/20で作成した。なお遺跡の水準は国家水準点（T.P. 値）を基準とし、土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』を用いた。

## （2）調査の概要

調査地の基本的な土層堆積状況については第3図に示したとおりである。

現地表面である表土は、近年の2時期の整地土が厚さ約1mで堆積している。この整地土下には旧耕土である第1層が10～20cmの厚さで堆積する。第2層は約30cm堆積し、この層の上面が今回の遺構検出面である。この層の上面は、ビニールハウスの基礎や重機の爪痕など近年の土地利用に伴う攪乱が調査区のほぼ全域に及んでいた。第3層は約50cm、第4層は30～40cmの厚さで堆積する。第5層は50cm以上の厚さで全体に堆積する。第2層から下層の状況は調査区の北・西・東壁面に沿って設定した下層調査のためのサブトレンチにおいて確認した。第2層は遺物包含層であるが、



第3図 調査地土層柱状模式図

第3層以下については、遺物を確認することはできなかった。

調査区内の堆積について、第1層～第3層は南側に下降した緩やかな傾斜がみられ、第4層～第5層は $X = -196154\text{m}$ 付近で急激に南側へ下降した傾斜がみられることを確認した。このことから、この地点から南側は谷状地形であったと推測される。

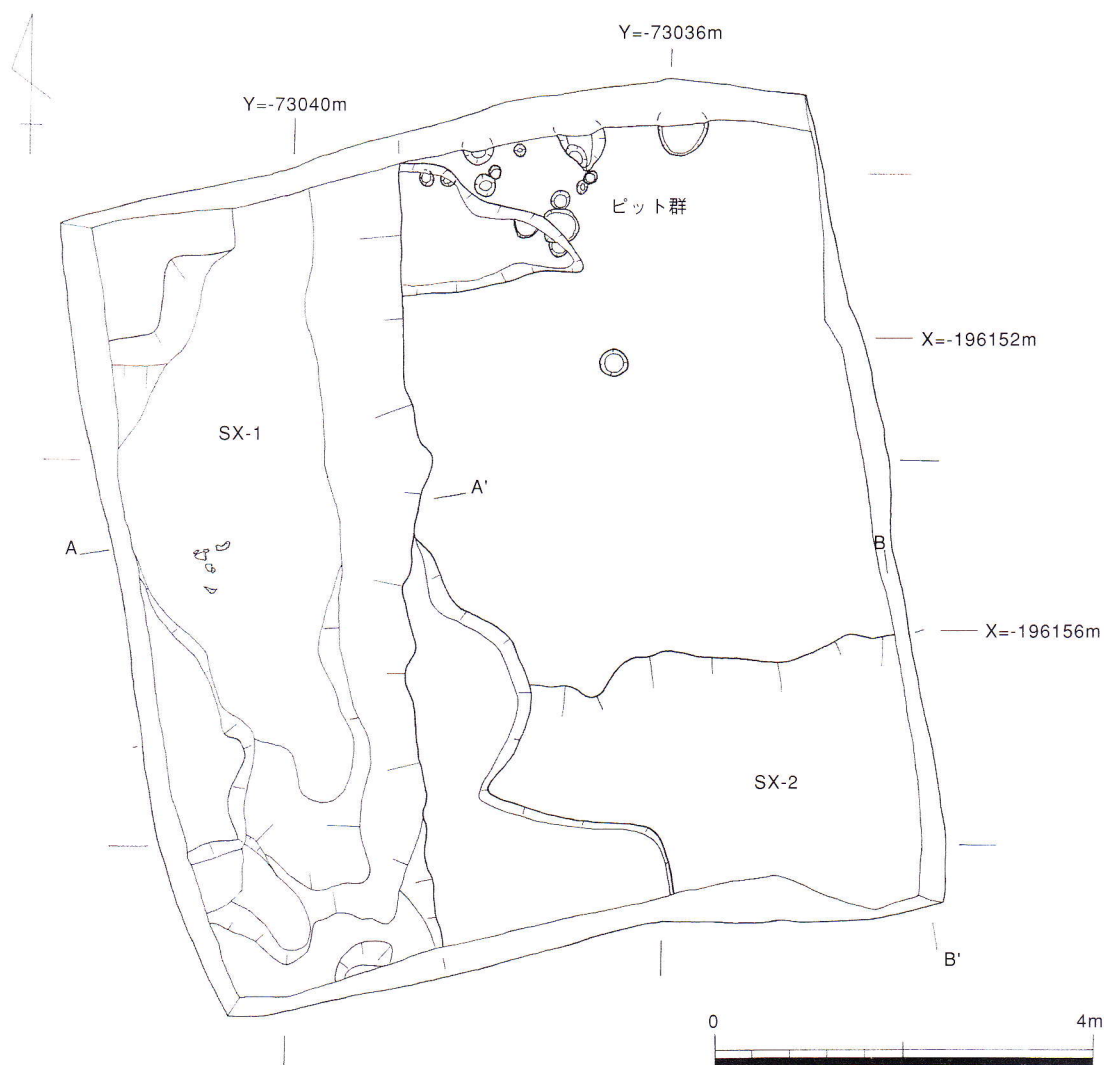
#### 4. 遺構

本調査では、第2層上面において遺構面を確認した。遺構面の標高は約 $3.5\text{m}$ を測る。この面において検出した遺構の時期は古墳時代と室町時代から江戸時代後期まで、江戸時代末期以降のものである。ここでは、検出した遺構を古墳時代と室町時代から江戸時代後期まで、江戸時代末期以降のものに分け、主な遺構についての記述を行う。

古墳時代と室町時代から江戸時代後期の遺構については、河道とピットを検出した（第4図）。

【ピット】（第4図 図版8）

調査区北側において検出したピット15基は直径約 $12\text{cm}$ と直径 $25\sim 50\text{cm}$ の2群に分類することができ、

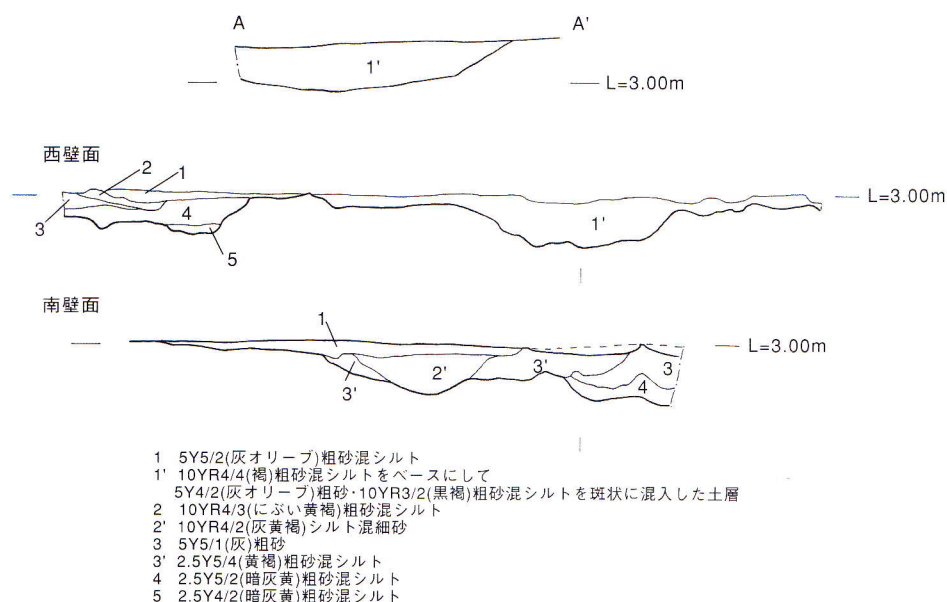


第4図 遺構全体平面図

前者は杭跡と考えられる。出土遺物から古墳時代のもの（P-4・6・7・9・12）と室町時代のもの（P-5・10・13・14）を確認することができた。

#### 【SX-1】（第4・5図 図版5）

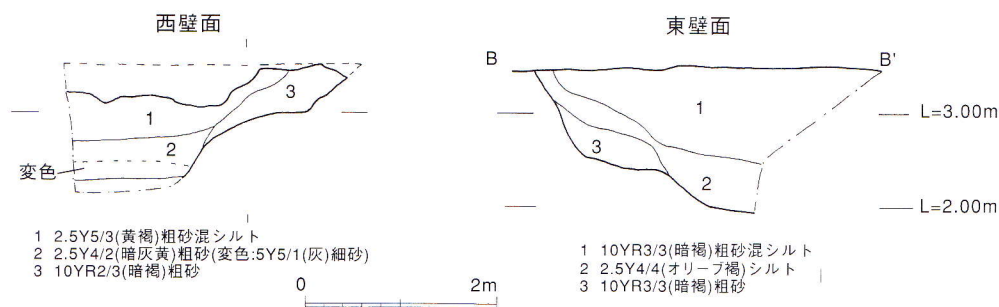
調査区西側において東西幅2.2m以上、南北長8.0m以上、深さ67cm以上のSX-1を検出した（第4図）。埋土の堆積状況から河道と考えられる。覆土層層することができ、古墳時代から江戸時代後期までの遺物を含み、遺構の底面においては、古墳時代の土師器や須恵器、石器などの遺物が多く出土した。この遺構は、南北方向の河道の東側肩部を検出したもので、西側は調査区外に広がり全容は不明である。形成された時期は不明であるが、出土遺物から江戸時代後期頃に埋没したものと考えられる。



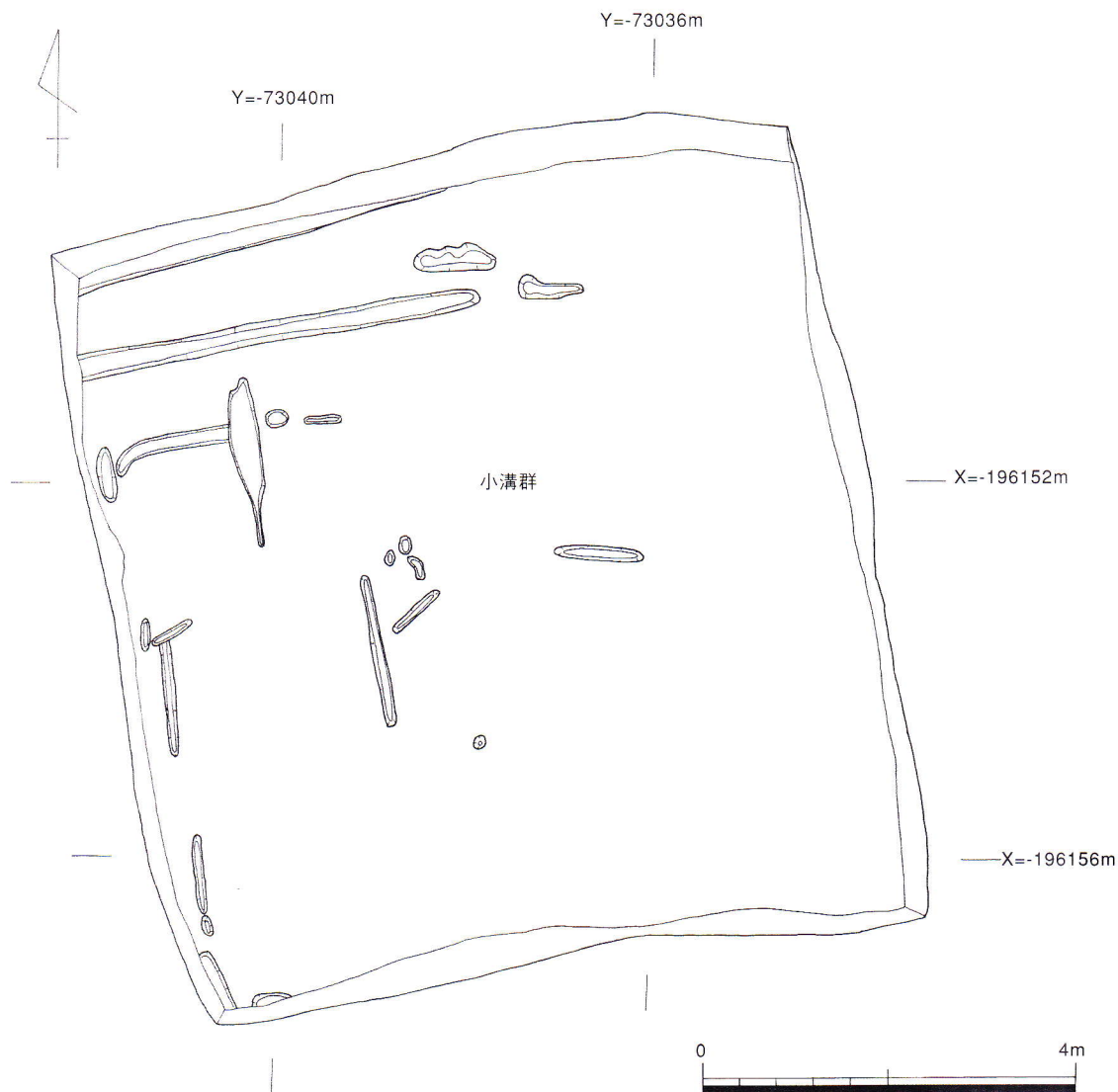
第5図 SX-1 土層断面図

#### 【SX-2】（第4・6図 図版6・7）

調査区南側において、サブトレンチ2の調査の結果、基本土層第2層の堆積と認識していたが遺構の可能性があったため、再度遺構検出を行い、東西長7.5m以上、南北幅2.5m以上、深さ1.5m以上のSX-2を検出した。底面の標高は約2.0mを測り、埋土の堆積状況から河道と考えられる。この遺構は、東西方向の河道の北側肩部を検出したもので、検出した範囲の覆土は3層に分層すること



第6図 SX-2 土層断面図



第7図 遺構全体平面図(近世末～近代)

ができ、第1層には、木片などの有機質の遺物が含まれていた。形成された時期は不明であるが、出土遺物から古墳時代以前のものと考えられる。

【江戸時代末期以降の遺構】(第7図 図版8)

江戸時代末期以降の遺構は、耕作に伴うと考えられる小溝13条やピット3基を検出した。小溝は幅約20cm、深さ1～5cm、検出長は0.4～5.2mである。ピットは径10～15cm、深さ2～6cmを測り、杭跡とみられる。これらの遺構は、調査区の中央部より西側で検出したものである。

## 5. 遺物

出土した遺物は、遺物収納コンテナ4箱分である。遺物内容については、江戸時代後期に埋没したと考えられる河道(SX-1)の覆土から出土した土器を中心に、韓式系を含む土師器、須恵器、黒色土器、中世須恵器、中世土師器、瓦器、瓦質土器、中世の国産陶器、輸入陶磁器、近世の陶磁器、瓦、



石器（叩石、凹石、ミガキ石）、石製品（砥石、大田井産チャート製・石英火打石）、土製品（土鍾、紡錘車）、自然遺物（炭など）がある。

以下、S X-1 出土の主な遺物についての報告を行う（第8図 図版9）。

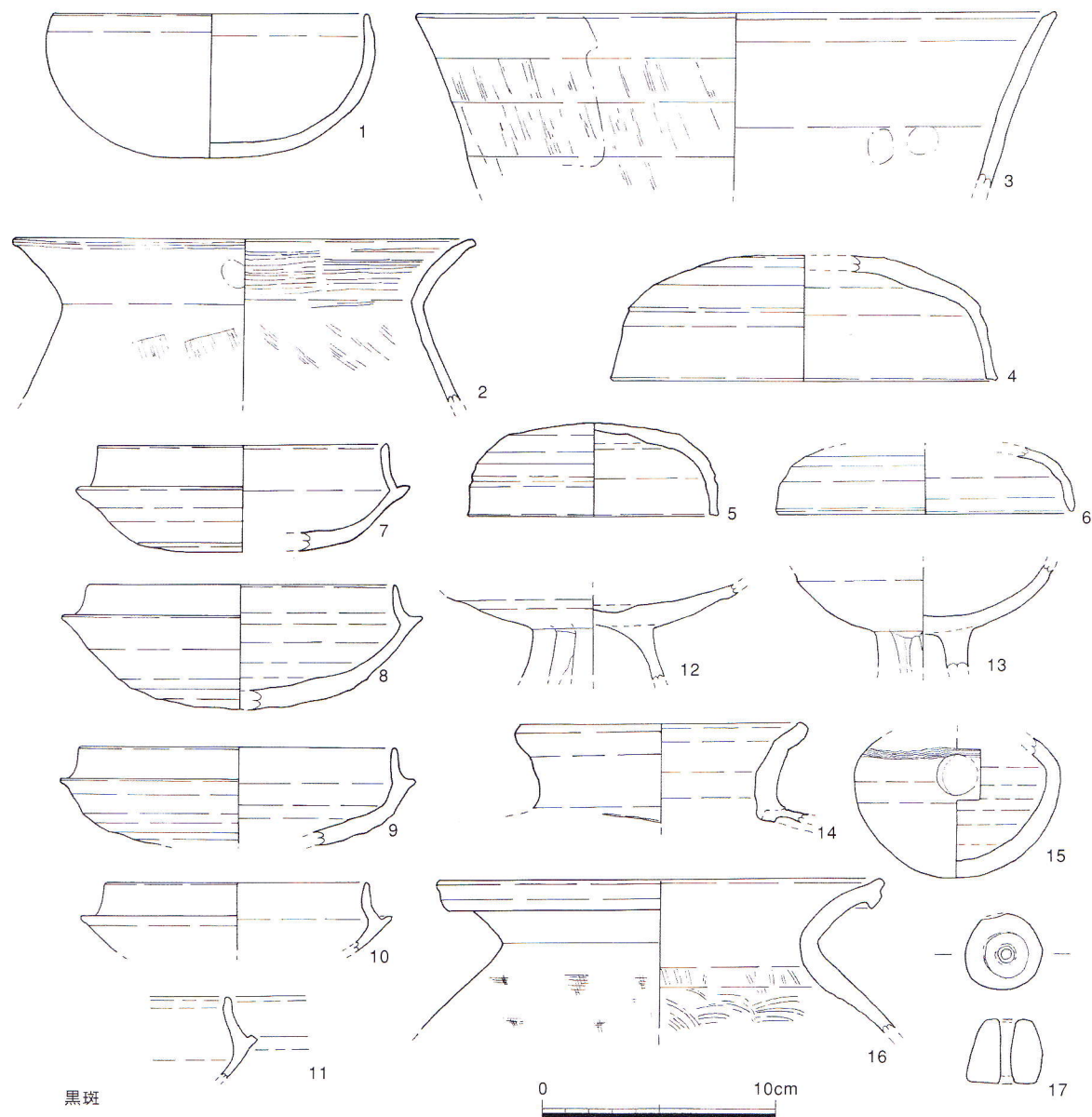
土師器には杯・高杯・壺・甕・甑・製塩土器などがある。

1の口縁部は内湾し、端部は丸味をもちやや内側に傾く杯である。口径13.2cm、器高6.2cmである。体部に1カ所黒斑がみられる。胎土に結晶片岩を含むことから在地産のものと考えられる。

2は長胴形の器形とみられる甕である。「く」の字状に外反する口縁部をもつものであり、体部内外面と口縁内面はハケ調整が施されている。口径19.4cmを測り、黄褐色を呈するものである。

3は口縁部が外反ぎみに上方にのびる甑である。口径27.2cmで、外面はハケ調整後ヨコナデ、内面はユビオサエ調整が施されている。また口縁部外面の一部に黒斑がみられる。

色調については1・3は赤褐色、2は黄褐色を呈する。胎土は精良である。



第8図 遺物実測図

須恵器は蓋杯・壺・甕、高杯、膝などがある。

杯蓋の蓋（４～６）では、４・５の肩部にみる稜は丸く沈線状に施されたもので、口縁端部に内傾する明瞭な段を成す。４は口径16.4cm、器高5.4cm、５は口径10.6cm、器高4cm、６は口径12.6cm、器高2.8cm、2/3は回転ヘラケズリである。ロクロの回転方向は４・６が右、５は左である。

次に杯身（７～11）は、７・８は口縁端部に段をもち、立ち上がりはやや内傾気味である。1/2は回転ヘラケズリ、９～11は口縁端部が丸く収められているものである。７は口径12.3cm、器高4.6cm、８は口径13cm、器高5.4cm、９は口径13.3cm、器高4.2cm、2/3は回転ヘラケズリ、10は口径13cm、器高3cmである。11は体部に自然釉がみられる。ロクロの回転方向は７・８が右回転、９は左回転である。

12・13は高杯である。12は３方向のスカシ、13は４方向のスカシが施されている。また12は杯部下半にカキメ調整が施され、13の脚部内面はヘラケズリである。

14は口径12cmの壺口縁部で、口縁部はやや楕円形を呈する。体部外面には、ヘラ記号の可能性のある沈線がみられる。また接合面で剥離しており、体部断面に接合のためのキザミ目がみられる。内外面に自然釉がみられる。

15は膝である。体部のみ残存しており、最大径8.8cm、残存高は6cmである。上肩部に波状文が施され、内面はナデ調整である。体部上半に直径1cmの円孔を穿つものである。形状から古墳時代後期のものと考えられる。16は口径18.8cmの甕である。体部外面の調整はタタキ、内面には同心円状の当て具痕を観察することができる。

色調については４・６・９・10・11・14が灰色、７・12は灰白色、８・13は暗赤褐色、15は青灰色を呈する。胎土は緻密で1mm未満の白色粒を含み、焼成は４～11、14～16は堅緻で、13は軟質焼成である。また、口縁部の一部に歪みがみられる。

17は土製紡錘車である。手づくね成形後ナデ調整が施されている。上部径1.9cm、底部径3.3cm、高さ2.8cmである。中央に穿たれている孔径は4mmを測り、芯棒を抜き取った痕跡がみられる。赤褐色をし、胎土は精良であるが1mm未満の白色粒・石英を含むものである。

## 6. まとめ

今回の調査では、古墳時代と室町時代から江戸時代後期、江戸時代末期以降の遺構を検出し、古墳時代から江戸時代にかけての遺物が出土した。

調査対象地周辺の調査例は少なく、ほとんどは小規模な調査であったため、遺跡北側縁辺部の様相は不明確であった。しかし、遺跡の北西側隣接地は、鳴神Ⅵ遺跡の調査成果から旧紀ノ川の支流である旧大門川の氾濫源であったため密度が稀薄であると指摘されていた。

SX-1は、形成された時期を特定するには至らなかったが、埋没時期は江戸時代後期頃と考えられる。覆土からは古墳時代から江戸時代までの遺物が多数出土しており、これらの中に韓式系土師器が２点含まれていた。攪拌された土層堆積状況などから河道であると考えられ、覆土の遺物は上流周辺の遺構が洪水などで、押し流されたものが堆積したと推察される。またSX-2は、古墳時代以前に形成された河道または谷状地形と考えられるが部分的な調査のため実体は不明である。

これまで鳴神Ⅵ遺跡など周囲の遺跡の調査成果から本遺跡北側は紀ノ川の氾濫源と考えられており、北側への遺構はさほど広がりをもつものとは考えられていなかった。しかし、調査区北東部においてピットや杭跡を検出したことや土層堆積状況などから、調査対象地周辺は農耕地帯であったと考えられるが、古墳時代のものと考えられる河道や江戸時代後期に埋没したとみられる河道の実体解明が今後の課題であるといえる。

以上、今回の調査において鳴神Ⅴ遺跡の北西端の一樣相を明らかにすることができた。

#### 【参考文献】

- |   |                  |       |
|---|------------------|-------|
| 『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』                         | 和歌山県教育委員会        | 1984年 |
| 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報1』                      | (財)和歌山市文化体育振興事業団 | 1992年 |
| 『鳴神Ⅴ遺跡 発掘調査概要報告書』                       | (財)和歌山市文化体育振興事業団 | 1994年 |
| 『鳴神Ⅳ遺跡第6次発掘調査概報』                        | (財)和歌山市文化体育振興事業団 | 1995年 |
| 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報3』                      | (財)和歌山市文化体育振興事業団 | 1996年 |
| 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報5』                      | (財)和歌山市文化体育振興事業団 | 1998年 |
| 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報6』                      | (財)和歌山市文化体育振興事業団 | 2000年 |
| 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報7』                      | (財)和歌山市文化体育振興事業団 | 2002年 |
| 「鳴神Ⅳ遺跡第10・11次調査」『和歌山市内遺跡発掘調査概報—平成16年度—』 | 和歌山市教育委員会        | 2006年 |



# 西庄遺跡 第4次確認調査

## 1. 調査の契機と経過

和歌山市西庄及び本脇周辺に所在する西庄遺跡は、標高4.5m前後の砂堆に位置する海浜集落である。この遺跡は東西約900m、南北約400mの範囲をもち、古墳時代を中心とした大規模な製塩遺跡として知られている(第1図)。

当遺跡の調査は、平成7年度から6ヶ年にわたり県道西脇・山口線道路拡幅工事に伴う発掘調査が財団法人和歌山県文化財センターによって行われ、古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物、石敷製塩炉、古墳などの遺構が検出されている。この遺跡中央部を東西に貫く調査によって遺跡西部を作業域、中央部を居住域、東部を墓域として遺跡内の土地利用を行っていたことが確認されている。この他、財団法人和歌山市文化体育振興事業団がこの道路南側縁辺部において3度調査を行い、財団法人和歌山県文化財センターの調査成果と同様の掘立柱建物、石敷製塩炉、古墳などの遺構を検出している。

今回の調査は、県道北側の和歌山市本脇43-1番地他において宅地造成工事が行われることになり、この工事用地が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記された西庄遺跡(遺跡番号38)の範囲内であったため、和歌山市教育委員会が国庫補助金を得て、遺跡確認の目的で調査を実施することとなった。調査は、和歌山市教育委員会の指導のもと財団法人和歌山市文化体育振興事業団が委託を受けて行った。

現地における調査は、平成17年9月12日から9月29日までの期間を要した。



第1図 調査位置図



## 2. 位置と環境

和歌山県北部を西走する紀ノ川は、その河口域で広大な和歌山平野を形成している。古代における河口域は、磯ノ浦から海岸線に沿って大規模な砂州が形成されていたことで、紀ノ川は狐島付近で大きく屈曲して和歌浦湾に注いでいたと考えられている。西庄遺跡(1)は、紀ノ川北岸の沿岸砂州でも微高地にあたる砂堆上に形成された遺跡として位置づけられる。

当遺跡の周辺では、和泉山脈南麓裾部にそって東から木ノ本Ⅲ遺跡(6)、木ノ本Ⅱ遺跡(5)、木ノ本Ⅰ遺跡(2)、西庄Ⅱ遺跡(4)、平の下遺跡(3)、西庄遺跡、磯脇遺跡(20)と遺跡が連なり、紀ノ川河口域北岸の遺跡の密集する地域としても位置づけられる(第2図)。

周辺の遺跡について概観すると、紀ノ川北岸における旧石器時代の遺跡としては北東約1kmに位置する西庄Ⅱ遺跡、さらに東方の鳴滝遺跡や園部遺跡からナイフ形石器が採集されている。

縄文時代では、木ノ本Ⅱ遺跡や木ノ本Ⅳ遺跡(19)がある。木ノ本Ⅱ遺跡では縄文時代晩期の土器が表採されているが、詳細は不明とされる。

弥生時代では、明確な遺構が検出されている遺跡として西庄Ⅱ遺跡がある。この遺跡では、弥生時代後期の円形竪穴住居1棟、古墳時代前期の方形竪穴住居4棟の他、周囲に溝を巡らした掘立柱建物23棟以上で構成される中世の屋敷地が検出されている。

古墳時代では、当遺跡や西庄Ⅱ遺跡のように平野部を中心として集落が形成されている。当遺跡では多くの竪穴住居や石敷製塩炉が検出され、時期的にみて庄内式併行期から始まる土器製塩は5世紀末から6世紀初めにかけて最盛期を迎えるものとみられる。出土遺物には土師器、須恵器や多量の製塩土器をはじめ、鉄製の釣り針や鹿角製の釣り針の他、ヤス、土錘などの魚撈具、滑石製の子持ち勾玉や石製模造品などの祭祀関連遺物、多くの魚介類の骨や貝殻などがあり、漁村としての性格を保ちながら大規模に土器製塩を行っていたものと考えられる。また当遺跡の約2km東に位置する木ノ本Ⅲ遺跡の範囲内には、釜山古墳(7)・車駕之古址古墳(8)・茶臼山古墳(9)で構成される釜山古墳群が含まれている。このうち、車駕之古址古墳は全長86mの前方後円墳で、周濠と外堤を含めると全長120mにも及ぶ県内最大規模の中期古墳として位置づけられている。造り出し及び周濠からは、いわゆる淡輪技法をもつ円筒埴輪や円形埴輪などの形象埴輪が、また、墳丘盛土内から金製勾玉が出土している。

奈良時代では、平城宮から出土した木簡に海部郡可太郷から塩を納めていたことを示す調の荷札が出土しており、当遺跡を含め海浜部において引き続き土器製塩が行われていたものと考えられる。

鎌倉時代以降では、城山遺跡(15)、木ノ本Ⅲ遺跡、木ノ本経塚(10)、中野遺跡(14)などがある。木ノ本Ⅲ遺跡では梵字文を瓦当文様とする軒丸瓦が出土しており、寺院の存在が考えられている。同遺跡の範囲内には須恵器を外容器とし、和鏡を納めた木ノ本経塚が存在する。また当遺跡でも、遺存状態の良い人骨と輸入陶磁器、和鏡などを副葬した土坑墓が検出されている。中野遺跡は、雑賀衆の紀ノ川北岸地域の拠点となる平城(中野城)推定地である。これまで2度の調査が行われ、幅7m、深さ0.9mの大溝を65m分検出した他、中国製の青磁、白磁、染付などの輸入陶磁器や備前焼、丹波焼などの国産陶磁器が多量に出土しており、中野城の位置づけをより明確にしている。また城山遺跡は、標高約40mの独立丘陵に位置する城跡で、丘陵頂部に方形の土塁を巡らし、南側に開口した入口部に門柱礎石を4基検出している。このことから、天正5(1577)年の織田信長による紀州攻めの際の陣城ではないかと推定されている。



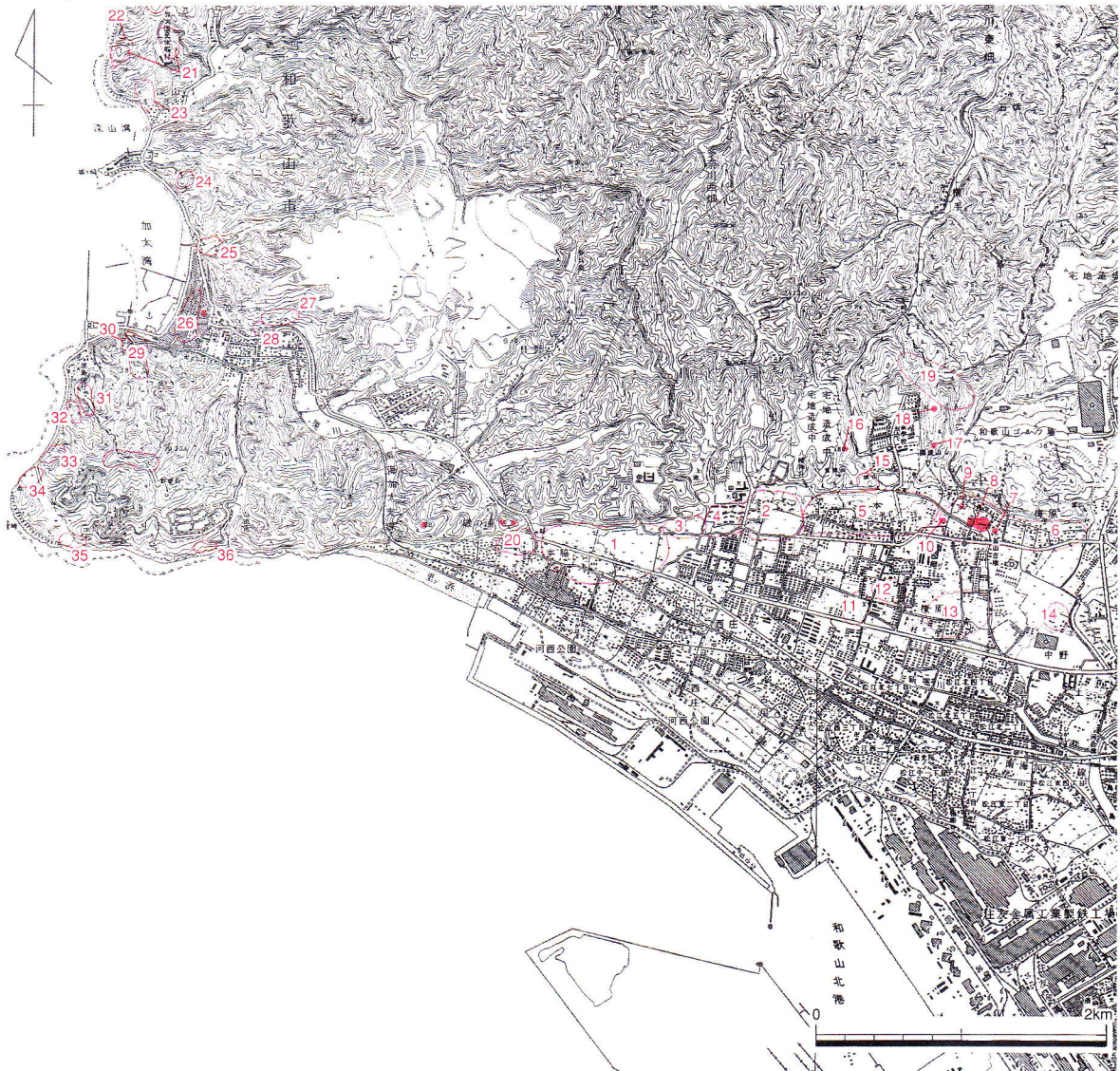
## 【参考文献】

額田雅裕「和歌山市木ノ本付近における微地形と遺跡の立地」『和歌山市立博物館研究紀要』5 和歌山市立博物館 1990年

『西庄遺跡』一都市計画道路西脇山口線道路改良工事に伴う発掘調査報告書 (財)和歌山県文化財センター 2003年

『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報7』 (財)和歌山市文化体育振興事業団 2002年

『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報8』 和歌山市教育委員会・(財)和歌山市文化体育振興事業団 2004年



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	西庄遺跡	古墳～鎌倉	10	木ノ本経塚	鎌倉	19	木ノ本IV遺跡	縄文・中世	28	加太II遺跡	弥生
2	木ノ本I遺跡	弥生～古墳	11	木ノ本小学校I遺跡	古墳	20	磯脇遺跡	鎌倉	29	加太南遺跡	古墳
3	平の下遺跡	弥生～鎌倉	12	木ノ本小学校II遺跡	古墳	21	深山砲台跡	明治	30	行者堂東遺跡	中世～近世
4	西庄II遺跡	同6番・鎌倉～江戸	13	榎原遺跡	古墳	22	男良の谷遺跡	古墳～奈良	31	田倉崎砲台跡	明治
5	木ノ本II遺跡	縄文～室町	14	中野遺跡	古墳～鎌倉	23	深山遺跡	古墳～奈良	32	平の谷遺跡	
6	木ノ本III遺跡	古墳～江戸	15	城山遺跡	安土・桃山	24	加太砲台跡	明治	33	田倉崎I遺跡	縄文～
7	釜山古墳	古墳	16	城山古墳	古墳	25	大谷川遺跡	縄文～弥生	34	田倉崎II遺跡	
8	車駕之古址古墳	古墳	17	権現山1号墳	古墳	26	加太遺跡	縄文～中世	35	船出遺跡	
9	茶臼山古墳	古墳	18	権現山2号墳	古墳	27	加太駅北方遺跡	弥生～奈良	36	浜遺跡	

第2図 西庄遺跡・木ノ本I遺跡・平の下遺跡周辺の遺跡分布図

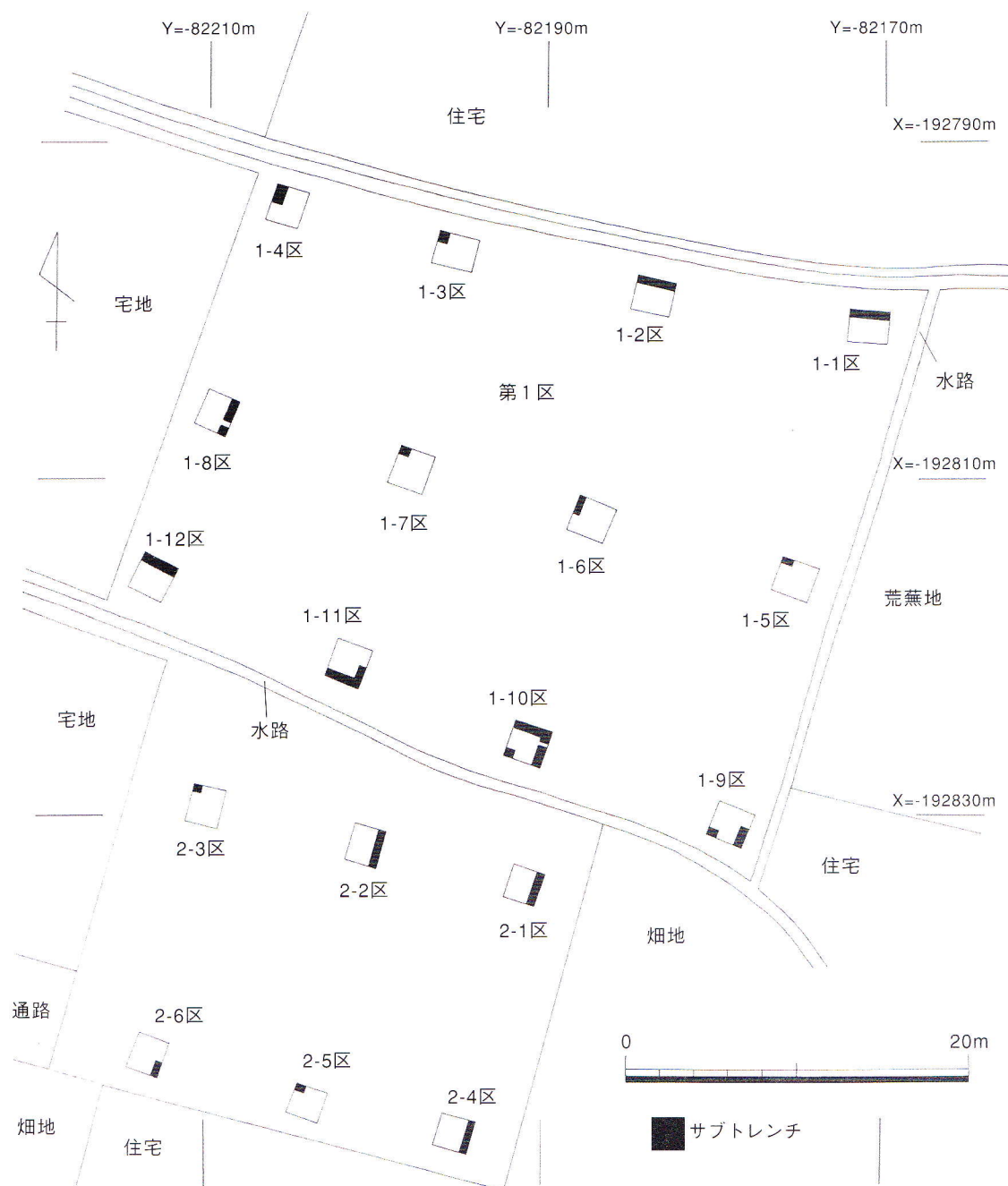


### 3. 調査の方法と経過

#### (1) 調査の方法

今回の調査は、造成工事計画範囲約2000㎡を対象に2×2m四方のグリッド調査区を18ヶ所設定して実施したものである。調査対象地は、その中央部を東西に貫く灌漑用水路によって2区画に分かれていたため、北側の区画を第1区、南側の区画を第2区と定めた。調査区は、第1区の範囲にグリッド12ヶ所を設定し、北東隅から順次番号を付して1-1～1-12区とし、同じく第2区に6ヶ所のグリッドを設定して2-1～2-6区と呼称した（第3図）。各調査区の面積は第1表に示した通りである。

調査の方法は、当地が雑草の生い茂る荒蕪地（図版10上）であったことから、この雑草を重機に



第3図 調査地区割図

よって除去後、調査区のラインを設定し掘削にいたった。重機による掘削は、奈良時代の遺物包含層と考えられた第3層直上までを慎重に行い、第3層とサブトレンチによる下層調査を人力掘削によって行った。当初、第3a層掘削後の第3b層上面において遺構が検出されるものと想定していたが、第3b層上面において遺構が検出できなかったため、和歌山市教育委員会文化振興課と協議を行い、第3b層の掘削を行って第3b層下面における遺構の確認を目的とした。

遺構掘削については、確認調査であることから今後の本発掘調査に対処するための情報を得る目的でサブトレンチによる掘削を行い、ピットなどは選択的に掘削を行った。

図面による記録は、国土座標軸（日本測地系）を基準とした平板測量図を1/200の縮尺で作成し、各調査区の遺構平面図及び壁面土層断面図については1/20の縮尺を用いた実測を行った。土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。また遺跡の水準は、国家水準点（T.P.値）を基準とした。

第1表 調査面積一覧表

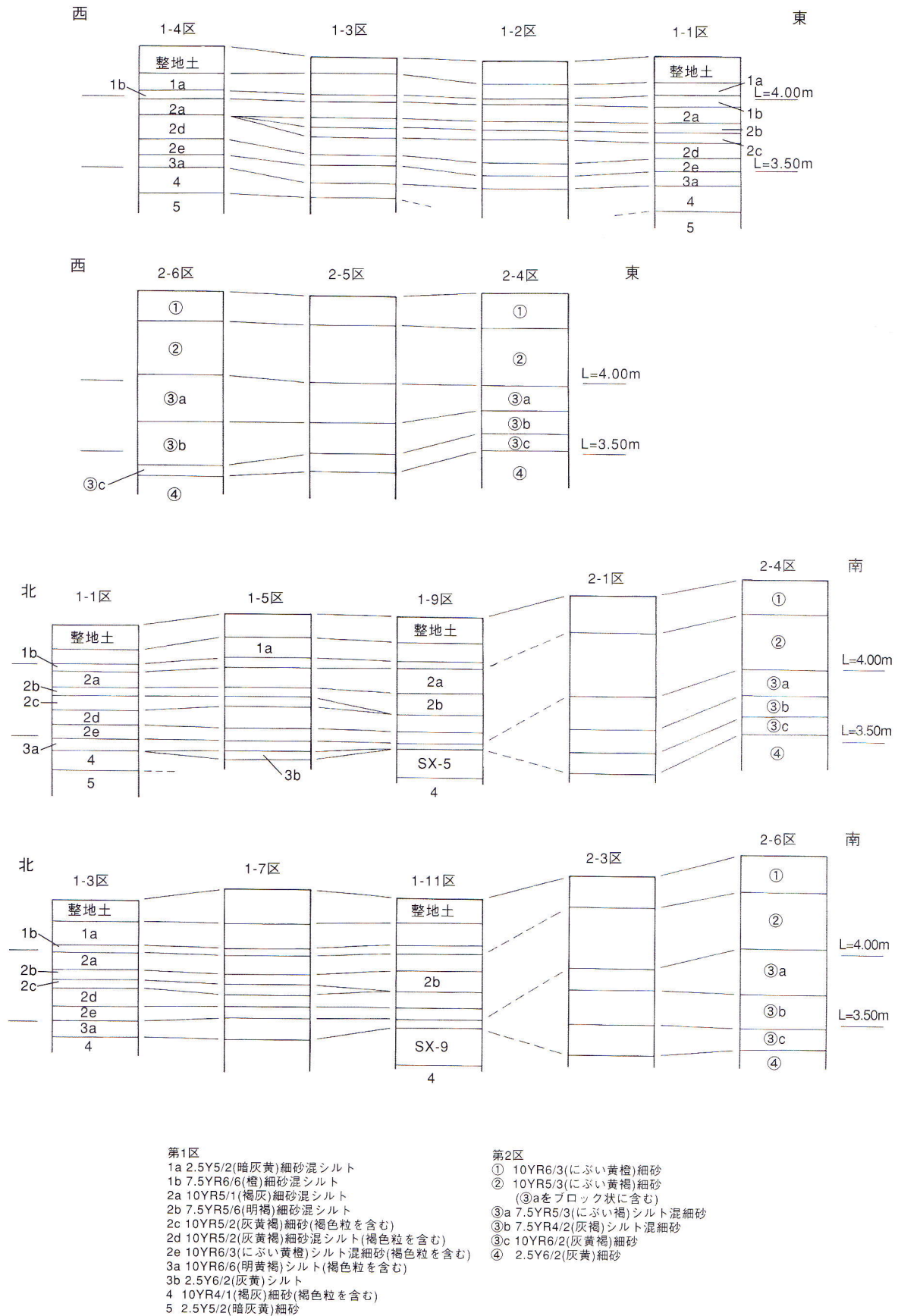
調査区	規模 (東西×南北m)	面積(m <sup>2</sup> )
1-1区	2.4×2.1	5.0
1-2区	2.3×2.0	4.6
1-3区	2.4×2.0	4.8
1-4区	2.0×2.2	4.4
1-5区	2.2×2.1	4.6
1-6区	2.3×2.1	4.8
1-7区	2.2×2.3	5.1
1-8区	2.0×2.2	4.4
1-9区	2.2×2.1	4.6
1-10区	2.3×2.2	5.1
1-11区	2.0×2.4	4.8
1-12区	2.2×2.2	4.8
2-1区	2.1×2.1	4.4
2-2区	2.0×2.1	4.2
2-3区	2.0×2.3	4.6
2-4区	2.1×2.0	4.2
2-5区	2.0×1.9	3.8
2-6区	2.0×2.2	4.4
合計		82.6

## (2)調査の概要

調査地の基本層序は第4図に示した通りである（図版24・25他）。

調査地の現況は荒蕪地であり、一面に雑草が生い茂る状況であった。雑草を取り除いた状態では、第1区の地表面には灰褐色系の整地土層が、第2区では表土である細砂層（第①層）が現れた。調査を進める中、調査対象地を東西に縦断する水路を境として第1区と第2区では堆積の様相が異なることが判明し、堆積の時期的な併行関係を考慮して数字番号を付した。

まず第1区の状況は、土地区画全体に30cm程度の整地が施されており、この整地土層の下に2単位（第1a・1b層）の旧水田耕土が堆積している。この水田耕土上面の標高は4.2～4.3mで、西から東に向けて緩やかに下降する傾斜をもつ。第2層は灰褐色から黄褐色の細砂混じりのシルト質土層である。この土層は3～5単位（第2a～2e層）に分けられ、それぞれ5～15cm程度の厚みをもち、微量の遺物を包含している。出土遺物から中世の範疇におさまるものとみられ、沖積作用によって堆積した土層と考えられる。第3a層は、第2区全域で確認した5～10cmの厚みをもつ明黄褐色のシルト質土層で、奈良時代までの遺物を多量に含む遺物包含層と考えられる。遺物の包含量は南に行くほど増加する傾向にある。この第3a層上面では1-1区及び1-3区において耕作に伴うと考えられる小溝を検出している。この小溝の方向性はN-73°-Eである。また1-5区においてのみ灰黄色のシルト質土層（第3b層）を検出した。この堆積の広がりとは不明であるものの、遺構覆土の可能性も考えられる。第4層は褐灰色の細砂層で今回の調査では遺物が出土していない。この第4層の上面では、1-5～1-12区において多くの遺構を検出した。第5層は第4層に類似する暗灰黄色の細砂層で、ともにサブトレンチ内によってその状況を確認したものである。



第4図 調査地土層柱状模式図



次に第2区の状況では、表土（第①層）は20～30cmの厚さをもつ細砂層で、聞き取り調査によると海浜から持ち込まれた整地層の可能性が高い。また第②層は40cm程度の厚みをもつにぶい黄色系の細砂層で、畑作のために行ったとされる重機による攪拌の痕跡が顕著に確認できた。第②層下に堆積している第③層は従前の調査によって検出されていた遺物包含層である。これまでは、上下の2単位（第③a・③b層）として認識されていたが、今回の調査ではその下位に第③c層を確認した。全体的にみてこの第③層上面は北に向かって下降する傾斜をもつ。第③a層及び第③b層はともに多量の製塩土器などの遺物を含むシルト混じりの細砂層である。遺物の包含量は、第③a層よりも第③b層が多く、北側に位置する2-1～2-3区よりも南側に位置する2-4～2-6区の方が多い。また第③c層は灰黄褐色系の細砂層で上位層よりも遺物量は少ないものの、一定量の須恵器・土師器・製塩土器が出土した。第2区では、2-2区を除くすべての調査区において第③c層上面から掘り込まれたピット多数を検出した。第③c層下には第1区の第4・5層に類似する灰黄色の細砂層（第④層）を検出し、サブトレンチの範囲で掘削を行ったが遺物は出土しなかった。

第1区と第2区の対応関係としては、第4図に示した通りと考えられるが、遺構面として捉える場合、第2区では第③c層上面であることから1-9～2-1区及び1-11～2-3区の双方とも標高3.4～3.5mとなり、高低差のない立地条件であったものと推定できる。しかし、2-4区の堆積状況から、南に向かって遺構面が高くなっていく状況が窺え、このことは砂堆の形成が顕著に現れているものと考えられよう。

## 4. 遺構

今回の調査では、第1区北端部にあたる1-1～1-4区（図版11・12）を除いたほぼ調査対象地全域において残存状態の良い遺構を確認した。ただし、各調査区が狭小であったことから溝やピット以外の調査区外に広がる遺構について、具体的な内容は限定できていない。以下、遺構が検出できた調査区について、平面図及び個別図面を掲載して説明を行う。

### （1）第1区検出の遺構

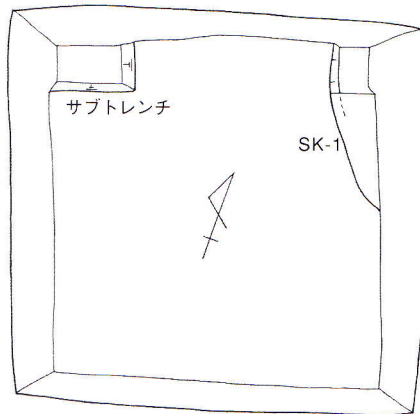
〔1-5区〕（第5図、図版13）

1-5区で検出した遺構は、北東隅部において検出した土坑1基（SK-1）であるが、前項でも触れた通りこの調査区でのみ確認できた第3b層も遺構覆土の可能性が考えられる。SK-1は北半部の一部を掘削して調査を行った。この遺構は、東側に向け緩やかに落ち込むもので、東西25cm以上、南北90cm以上の規模である。覆土は上下2単位に分けられ、ともに黄灰色系の土色であるが、下位層が粘土質となる。

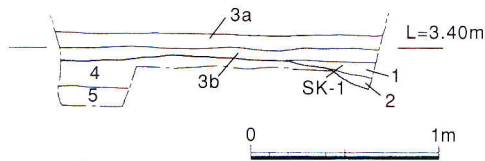
〔1-6区〕（第5図、図版14）

1-6区では調査区の南壁下から西壁下にかけてのびる遺構ラインを検出した。この遺構（SX-3）は北側に向けて落ち込むもので、その状況を確認するため西壁下にサブトレンチを設定して掘削を行った。遺構検出時に肩部から1.0～1.5m北側の地点で別のラインを検出したが、サブトレンチによ

1-5区

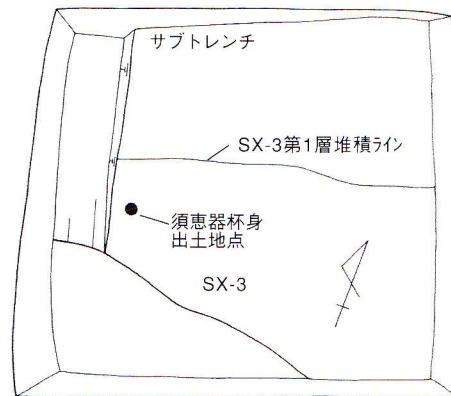


調査区北壁



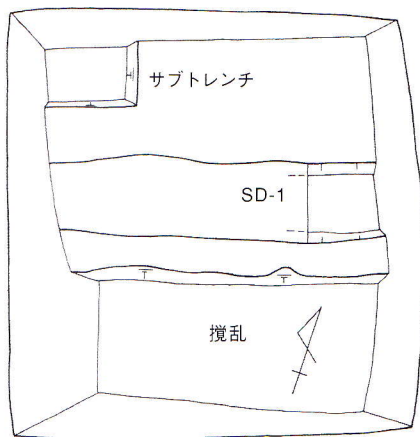
SK-1  
1 2.5Y5/1(黄灰)シルト  
2 2.5Y6/1(黄灰)シルト混粘土

1-6区

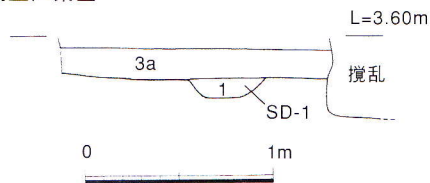


0 1m

1-7区

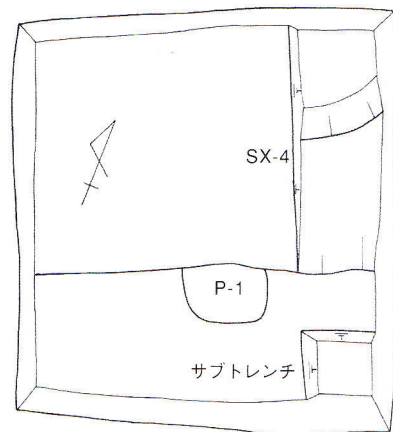


調査区東壁

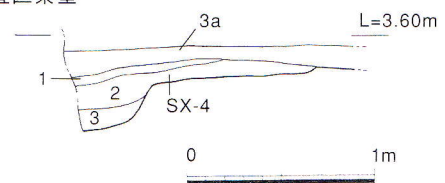


SD-1  
1 10YR5/1(褐灰)細砂混シルト

1-8区



調査区東壁



SX-4  
1 2.5Y5/1(黄灰)シルト  
2 2.5Y5/2(暗灰黄)細砂  
3 2.5Y6/2(灰黄)細砂

第5図 1-5～1-8区 遺構平面図及び土層断面図



る確認の結果、S X-3 第1層の堆積ラインであることが判明した。この遺構の深さは、サブトレンチ北隅の最深部で検出面から13cm であり、上下2単位の堆積に分けられた。上位にあたる第1層はにぶい黄色の細砂混シルト、下位にあたる第2層は暗灰黄色の色調をもつ細砂である。またS X-3 第2層にあたる図示した地点において、古墳時代後期の須恵器杯身の完形品（第8図5）が1点出土した。またS X-3 第1層には奈良時代の須恵器杯蓋（第8図3）が含まれていたことから、埋没時期が奈良時代まで下るものと考えられる。

〔1-7区〕（第5図、図版15）

1-7区では調査区の南側約1/3程度が攪乱によって削平されていたものの、ほぼ中央部を東西にのびる溝1条（S D-1）を検出することができた。このS D-1の調査は、東壁直下においてサブトレンチを設定して掘削した他、下層調査のためのサブトレンチを北西隅に設定した。S D-1は幅45cm程度、東壁直下における深さは10cmを測る。覆土は単一で、褐灰色の細砂混シルトである。この溝からの出土遺物には、被熱を受けた砥石（第15図90）がある。

〔1-8区〕（第5図、図版16）

1-8区では調査区の南側約1/3程度から北側に落ち込む遺構（S X-4）とS X-4に切られているピット1基（P-1）を検出した。これらの遺構の調査は、S X-4については、東壁直下にサブトレンチを設定して掘削を行ったが、P-1については未掘削とした。S X-4は肩部から80cm程度緩やかに落ち込みそこから急激に深くなる遺構で、北壁付近の最深部で深さ35cm前後となる。覆土は3単位に分けられ、ともに灰黄色系の色調で上位にあたる第1層のみがシルト質、下位の2単位が細砂である。またP-1は表面観察から黄褐色のシルト混細砂の覆土である。

〔1-9区〕（第6図、図版17）

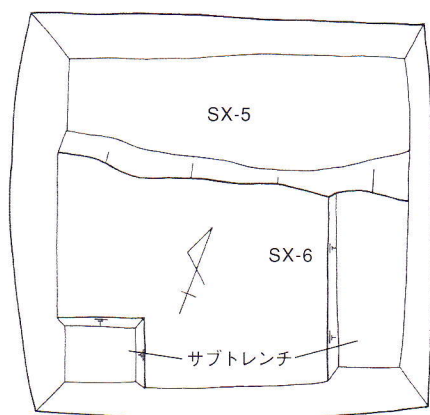
1-9区では調査区全体が2基の遺構の重なりとして検出した。調査は、調査区のほぼ中央を東西にのびる遺構のラインを検出したことから、東壁直下にサブトレンチを設定して遺構の切り合いを確認にした。この後、新しい時期の遺構（S X-5）を調査区内で完掘し、古い時期の遺構（S X-6）の西側部分の深さを確認するため南西隅にサブトレンチを設定して、部分的な掘削を行った。S X-5は肩部から急激に落ち込む遺構で、底面はほぼ水平となる。深さは検出面から20cm程度で、覆土は上下2単位に分けられ、ともに多量の土器を含む。またS X-6も底面がほぼ水平となる遺構で、深さ15cm程度を測り、灰黄褐色系の覆土は上下2単位に分けられる。S X-5からの出土遺物には、石錘と考えられる石器（第15図88）が1点ある。

〔1-10区〕（第6図、図版18）

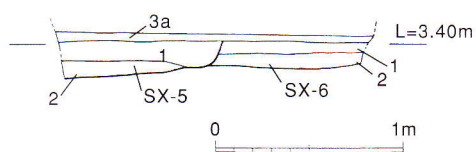
1-10区も調査区全体が2基の遺構の重なりとして検出した。調査は、調査区のほぼ中央を東西にのびる遺構のラインを検出し、検出状況から新しい時期と考えられた南側に落ち込む遺構（S X-7）を確認するため東壁下及び南西隅部にサブトレンチを設定して掘削を行った。また古い時期の遺構（S X-8）の確認は、東壁及び北壁下にサブトレンチを設定し、調査を行った。S X-7は肩部からほぼ垂直に落ち込む遺構で、30cm程度を測る底面はほぼ水平となる。覆土は3単位に分けられ、最下層を除く上位2単位はレンズ状の堆積を示す。S X-8も10cm程度の深さで、底面が水平となる遺構であり、覆土は灰黄褐色系のシルト混細砂の単層である。出土遺物では、S X-7から製塩土器が多量に出土した。



1-9区

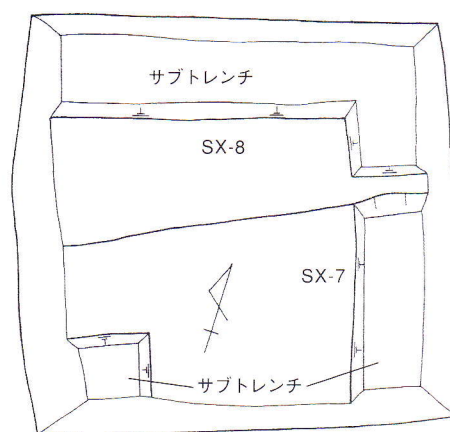


調査区東壁

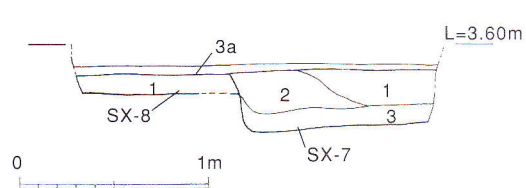


- SX-5  
1 10YR4/1(褐灰)細砂混シルト  
2 10YR5/2(灰黄褐)シルト混細砂
- SX-6  
1 10YR5/2(灰黄褐)細砂混シルト  
(褐色粒を上位に含む。)  
2 10YR6/2(灰黄褐)細砂混シルト

1-10区

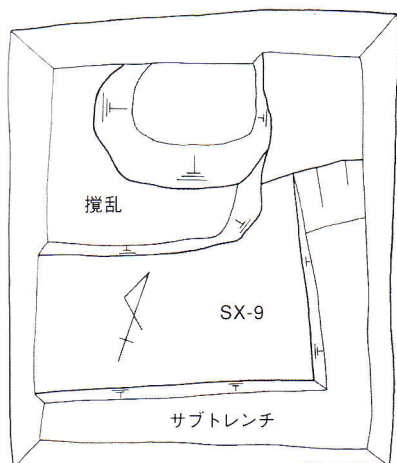


調査区東壁

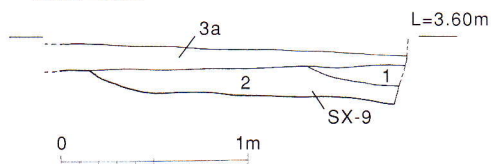


- SX-7  
1 10YR6/2(灰黄褐)細砂混シルト  
2 10YR4/1(褐灰)細砂混シルト  
3 10YR5/2(灰黄褐)細砂
- SX-8  
1 10YR6/2(灰黄褐)細砂混シルト

1-11区

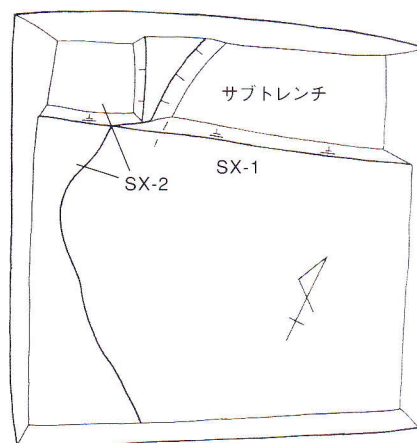


調査区東壁

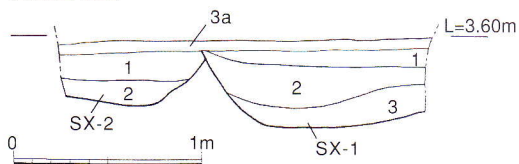


- SX-9  
1 10YR5/1(褐灰)細砂混シルト  
2 10YR5/1(褐灰)シルト混細砂

1-12区



調査区北壁



- SX-1  
1 10YR5/2(灰黄褐)細砂混シルト  
(褐色粒を上位に含む。)  
2 10YR6/2(灰黄褐)細砂混シルト  
3 10YR6/2(灰黄褐)細砂
- SX-2  
1 10YR4/1(褐灰)細砂混シルト  
2 10YR5/2(灰黄褐)シルト混細砂

第6図 1-9～1-12区 遺構平面図及び土層断面図

[1-11区] (第6図、図版19)

1-11区では調査区の北西部約1/3程度が攪乱によって削平されていたものの、ほぼ中央部を東西にのび、南側に落ち込む遺構(SX-9)を検出することができた。このSX-9は、東壁直下及び南壁直下においてサブトレンチを設定して調査を行った。SX-9は緩やかに落ち込む遺構で、南壁下の最深部で20~25cmの深さをもつ。覆土は2単位に分けられ、ともに褐灰色の色調をもつものの下位の方が砂質が強い。この遺構からも製塩土器が多量に出土した。

[1-12区] (第6図、図版20)

1-12区では調査区全体が2基の遺構の重なりとして検出した。調査は、調査区の西隅を南北にのびる遺構のラインを検出したことから、北壁直下にサブトレンチを設定して遺構の切り合い関係を確認した。この結果、北側に落ち込む遺構(SX-1)の方が新しい時期のものであることが判明した。SX-1は検出面からの深さが45cmと比較的深い遺構で、覆土は3単位に分けられる。覆土は、全体的に灰黄褐色の色調をもち下位層ほど砂質が強い。また最上層から多量の土器が出土した。古い時期の遺構であるSX-2は、西側に向けて落ち込む遺構で、覆土は上下2単位に分けられる。

(2)第2区検出の遺構

[2-1~2-6区] (第7図、図版21~23)

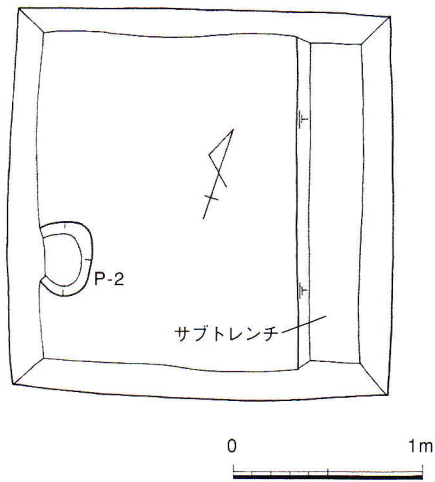
第2区では2-1・2-3~2-6区においてピット14基を検出した。これらのピットはすべて第3c層上面から検出したもので、選択的に掘削して調査を行った。未掘削のピットについては、表面採集によって遺物の取り上げを行った。各ピットの形状等は第2表に示した通りである。

ピットの形状として、大きさでは直径20~25cm 大の比較的小規模なもの、40~45cm 大の中規模なもの、50cm以上の大規模なものに分けられる。覆土は大半が灰黄褐色系の細砂である。

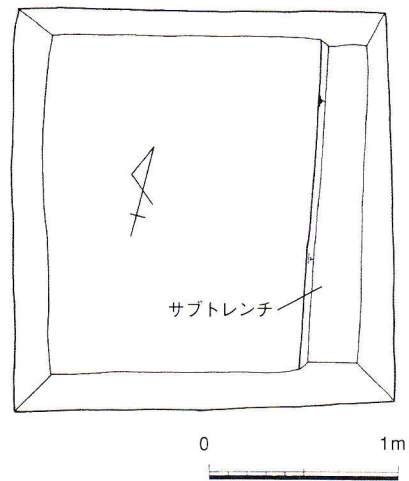
第2表 第2区検出のピット観察表

調査区	ピット番号	調査方法	最大径(cm)	深さ(cm)	覆 土	出土遺物
2-1区	P-2	掘 削	40	19	上位 10YR4/1(褐灰)細砂混シルト 下位 10YR6/1(褐灰)細砂混シルト	土師器・須恵器・ 製塩土器・軽石
2-3区	P-8	未掘削	46		10YR5/2(灰黄褐)細砂	土師器
	P-9	未掘削	20		10YR5/2(灰黄褐)細砂	
	P-10	未掘削	24		10YR5/2(灰黄褐)細砂	土師器
	P-11	掘 削	24	30	10YR5/2(灰黄褐)細砂	土師器・須恵器・ 製塩土器・軽石
	P-12	未掘削	64		10YR5/2(灰黄褐)細砂	製塩土器
2-4区	P-3	掘 削	45以上	50	上位 10YR5/2(灰黄褐)細砂 下位 2.5Y5/2(暗灰黄)細砂	土師器・須恵器・ 製塩土器
	P-4	未掘削	50以上		10YR5/2(灰黄褐)細砂	土師器
	P-5	未掘削	35		10YR5/2(灰黄褐)細砂	
	P-6	未掘削	45		10YR5/2(灰黄褐)細砂	
2-5区	P-7	未掘削	45		10YR5/2(灰黄褐)細砂	
2-6区	P-13	掘 削	50以上	20以上	2.5Y5/2(暗灰黄)細砂	土師器・須恵器・ 製塩土器
	P-14	掘 削	35以上	28以上	上位 2.5Y4/2(暗灰黄)細砂 下位 2.5Y5/2(暗灰黄)細砂	土師器・須恵器・ 製塩土器・軽石
	P-15	未掘削	42		2.5Y4/2(暗灰黄)細砂	

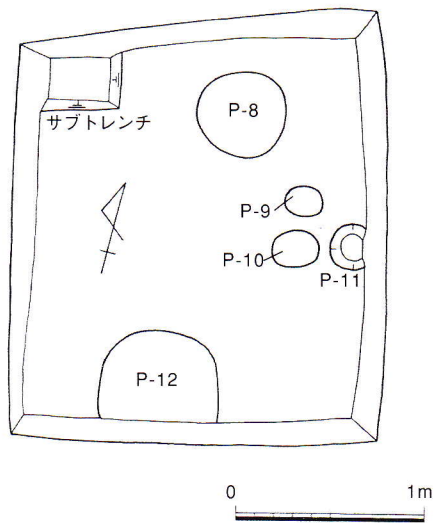
2-1区



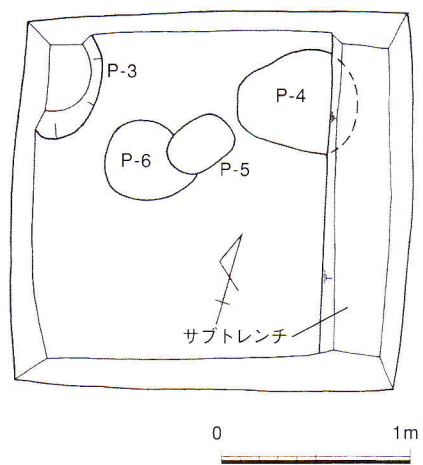
2-2区



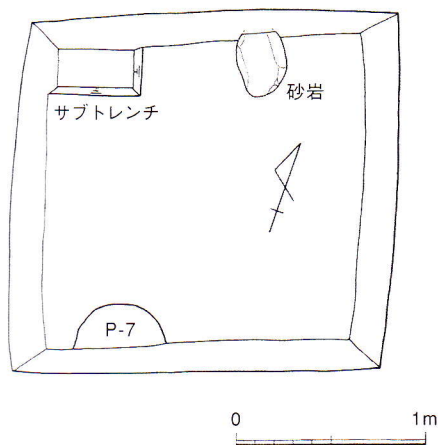
2-3区



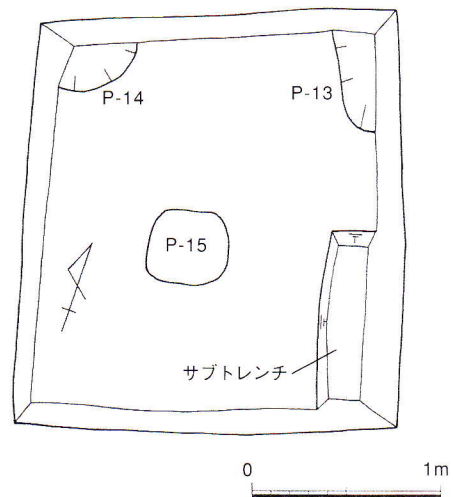
2-4区



2-5区



2-6区



第7図 2-1～2-6区 遺構平面図



## 5. 遺物

遺物は、遺構の覆土や第3層などの遺物包含層から遺物収納コンテナ21箱分が出土した。

これら遺物の内容は、古墳時代の土師器・須恵器の他、黒色土器・瓦器・中世土師器・近世陶磁器などの土器類がある。土器以外のものとしては、土錘や紡錘車などの土製品、叩石や石錘などの石器、滑石製の白玉や有孔円板などの石製品がある。以下、土器では遺構出土のものと遺物包含層出土のものに分けて記述し、土器以外の土製品や石器・石製品等については個別に説明を行う。

### (1) 遺構出土土器(第8図1～8、図版26)

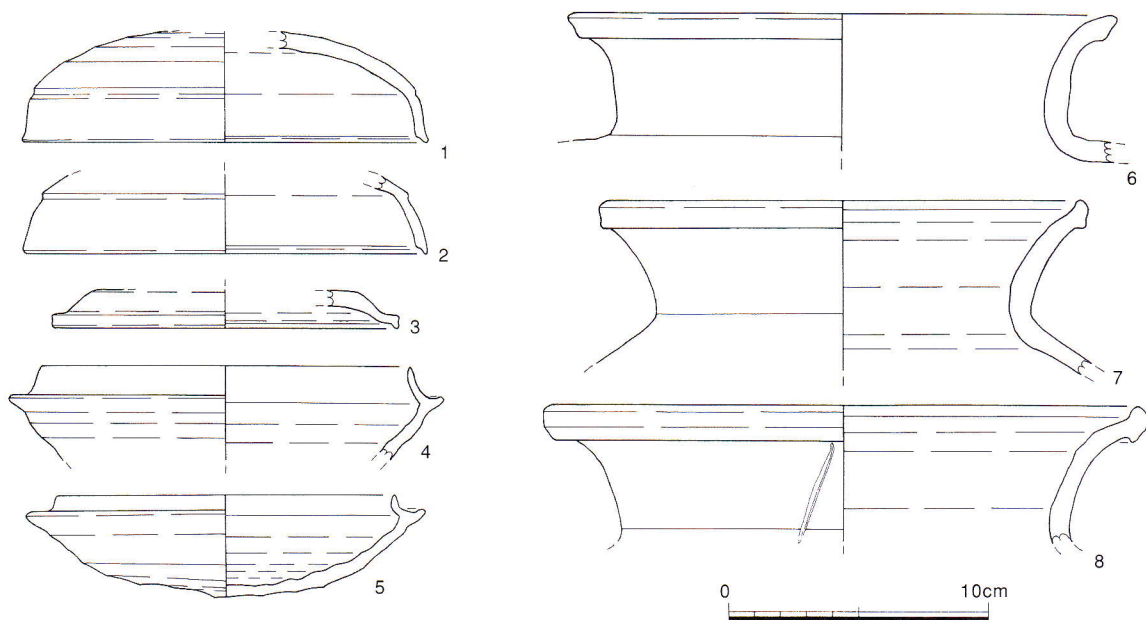
遺構出土の土器のうち図示できるものは須恵器(1～8)のみである。

1～3は杯蓋である。1・2は口径15.5cm程度のもので、ともに口縁端部は内傾する段をもち、肩部には退化気味の凸線が巡る。1の天井部に施された回転ヘラケズリは2/3程度と幅が広い。3は口径13.2cmで、平らな天井部から屈折しながら接地する扁平な器形のものである。

4・5は杯身である。4は口径14.2cmで、内傾する口縁部が比較的長くのびるものである。5は口径13.0cm、器高4.1cmの完形のもので、内傾気味にのびる短い口縁部が端部にいたって直立するものである。また外底面に施されたヘラケズリは1/2程度で、自然釉が付着している。

6～8は甕である。6は口径20.8cmを測るもので、口縁端部を大きく外反させ下方に肥厚させている。7は口径18.3cmを測るもので、口縁端部を上下に丸く肥厚させている。また8は口径22.6cmを測るもので、口縁端部を上下に大きく肥厚させている。頸部外面にはタテ方向に1条のヘラ記号が施されている。

以上の須恵器のうち、蓋杯では1mm程度の細かい砂粒を僅かに含むものが大半で、5には比較的多くの黒色粒が含まれている。焼成は良好で、灰色から淡灰色に発色している。甕では2～3mm大の砂粒を含み、石英・長石・黒色粒が目立つ。焼成は6・8が良好であるものの、7は軟質で灰白色に発色している。



第8図 遺物実測図1

これらの出土位置は、1・6が1-12区のSX-1第1層、2・4・8が1-10区のSX-7第2層、7が同じく第3層、3が1-6区のSX-3第1層、5が同じく第2層である。時期的には3を除き6世紀中葉から後葉に位置づけられる。3は7世紀末から8世紀前半の範疇で、SX-3の埋没時期を示すものである。

## (2) 遺物包含層出土土器

[土師器](第9図9~25、図版27)

9・10は高杯である。9は口径17.0cmの杯部で、緩やかに内湾しながらのびる口縁部をもつ。外面にはタテ方向のハケ調整が施され、これをヨコナデによって消している。10は下方に向かって大きく開く脚柱部である。中位には外面から径1.0cm円孔が3ヶ所穿たれている。この土器の調整は、外面にはナナメ方向のハケの後、タテ方向のヘラミガキが、内面下半部にはヨコ方向のハケ調整が施されている。

11・12は壺である。11は口径9.8cmの直口壺で、口縁部内面にはヨコ方向のハケ調整が施されている。12は口径11.0cmの緩やかに外反する口縁部を形成するもので、体部外面にはタテ方向のハケ調整が施されている。

13~19は甕である。13は口径14.8cmで、直立気味に立ち上がる端部を内側に丸く肥厚させた口縁部をもつものである。体部外面にはタテ方向、内面にはヨコ方向の細かいハケ調整が行われている。14は口径14.8cmのもので、体部と口縁部の境が不明瞭な器形で、口縁端部を外反させ丸くおさめている。器形からみて鉢の可能性も考えられる。外面にはタテ方向のハケ調整が僅かに確認でき、また内面にはヘラケズリが明瞭に観察できる。15・16は大きく屈折しながら外反する口縁部をもつもので、ともに外面にはタテ方向のハケ調整が施されている。15は口径19.0cmを測るもので、体部内面にはヘラケズリが明瞭に観察できる。16は口径15.5cmのもので、摩滅が著しい内面にはヘラケズリが行われていた可能性が高い。17~19は肥厚する口縁部を形成するものである。17は口径17.0cmで、内湾気味に立ち上がる口縁部を形成するものである。外面にはヨコナデに先行するタテ方向のハケ調整が僅かに確認できる。また体部内面はヘラケズリが行われている。18は口径19.2cmを測る口縁端部を丸くおさめるもので、外端面に沈線が1条巡る。口縁部内面にはヨコ方向のハケ調整が施されている。19は口径17.0cmで、大きく外反する口縁端部に外端面を形成するものである。内外面ともハケ調整が行われている。

20・21は口径26.0cm程度の甕である。20はやや外反気味にのびる口縁部をもつもので、端部を丸くおさめるものである。21は屈折気味に立ち上がる口縁部をもつもので、口縁端部に面を形成する。ともに外面にはタテ方向のハケ調整が、内面にはヨコ方向のハケ調整が行われ、部分的にナデ消している状況が観察できる。

22~25は把手である。22・23は上方に大きく屈曲させるタイプのもので、形状からみて塙の把手と考えられる。24・25は斜め上方にのびるもので、甕の把手と考えられる。これらはすべて手づくね成形で、24には成形時に上部から切り込みが入れられ、また25にはハケ調整が部分的に行われている。

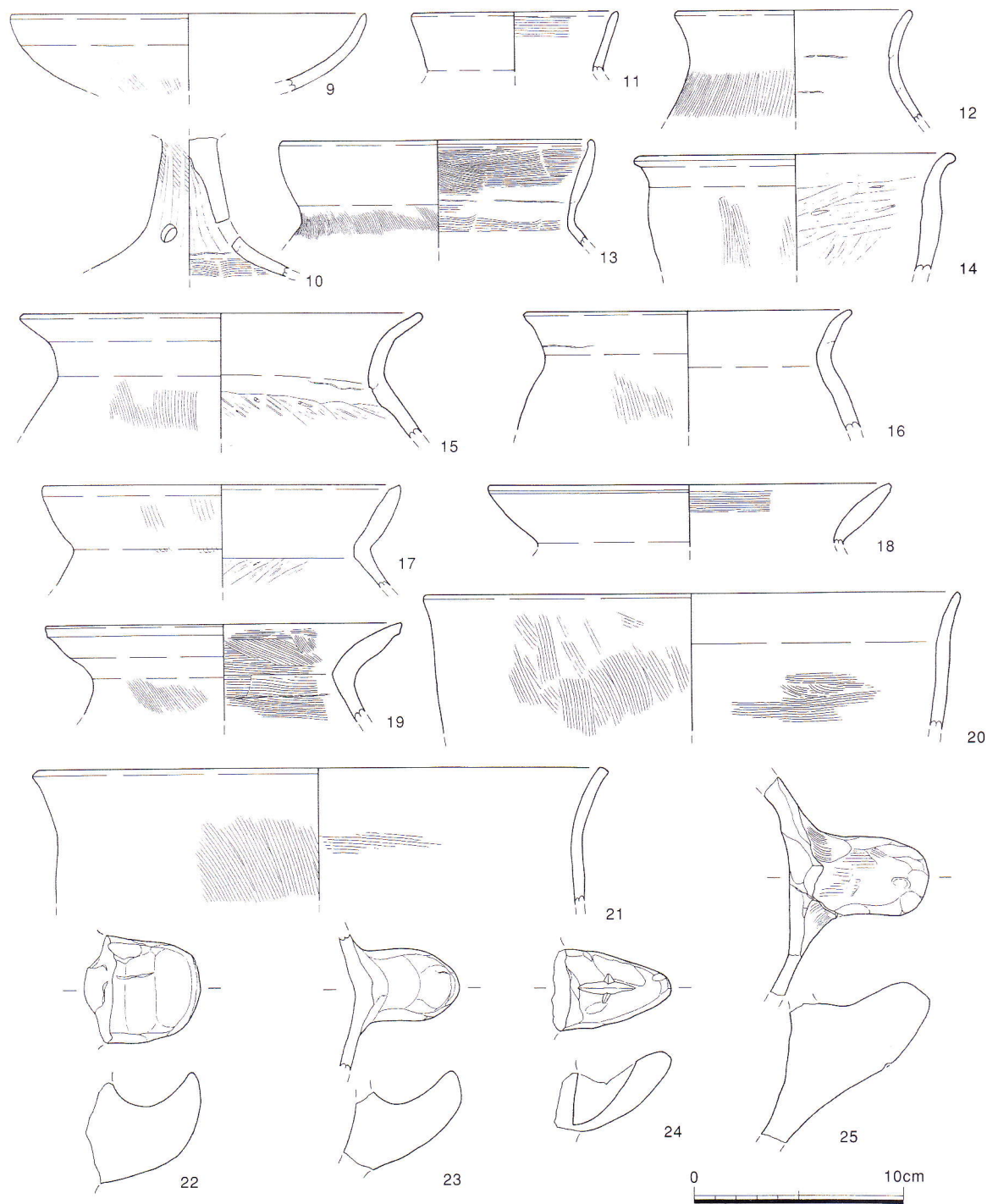
以上の土師器では1~3mm程度の石英や赤色軟質粒を含む在地系のものが大半であるものの、9・11・15・18には雲母が含まれていることから、搬入品と考えられる。

これらの出土位置は、9が2-2区の第3b層、10・13・16・21が2-6区の第3b層、11が2-1区の第3b層、12・14・15・23・25が2-5区の第3b層、17・18が2-4区の第3b層、19・20が2-5区の第3a層、22・24が2-4区の第3a層である。時期的には古墳時代中期から後期にかけてのものと考えられる。



[須恵器] (第10図26~44、図版28・29)

26~34は蓋杯である。杯蓋では口径13.0cm程度のもの(26・28)と口径11.5cmのもの(27)があり、ともに口縁端部には内傾する段をもつ。26は直立する肩部に明瞭な凸線が巡るもので、上部が平らとなる器形である。外面に施されたヘラケズリの範囲は、肩部周辺までの幅の広いものである。27・28も26と同様の形状を呈するものであるが、上部がやや丸みをもちヘラケズリの範囲は2/3程度のものである。杯身では口径12.0cm前後のもの(30・33)と口径10.5cm前後のもの(29・31)の他、口径13.2cmを測るもの(34)や口径8.8cmの極



第9図 遺物実測図2

めて小さなもの(32)がある。29・30は内傾気味に立ち上がる口縁端部に段を有するもので、外底面に施されたヘラケズリの範囲が1/2程度のものである。29の外底面には直線と曲線からなるヘラ記号が観察できる。31は直立気味に立ち上がる口縁端部を丸くおさめたもので、底面のヘラケズリの範囲が約2/3と広い。この外底面は焼成後に研磨等が行われたものとみられ、平滑になっている。32は内傾して立ち上がる口縁端部を上方につまみ上げたもので、底面に施されたヘラケズリの範囲は約1/2である。形状からみて、特殊器形の一部とも考えられる。33・34は内傾する短い口縁部をもち端部を丸くおさめたものである。33の外底面のヘラケズリは1/3程度で、内底面は焼成後に研磨されたものか平滑になっている。

35は有蓋高杯の蓋と考えられる。上部は緩やかな傾斜をもち、中央部に径3.2cmの扁平なつまみが付く。36は高杯の脚部である。脚部にはヘラ切りによる三角形の透かしが3方に穿たれている。また脚端部は上下に肥厚させ、丸くおさめている。

37・38は壺である。37は口径11.8cmを測るもので、外反する口縁端部を垂下させ外端面を作り出している。38は口径17.0cmを測るもので、直立する口縁端部を内側に突出させ上端面を作り出している。ともに体部内面にはあて具の痕跡が残り、38の外面には平行タタキをヨコナデによって消している状況が確認できる。

39～44は甕である。39・40はともに口径16.8cmで、波状文による加飾が行われたものである。39は大きく外反させた口縁端部を上方につまみ上げているもので、外面に凸線が1条巡る。40は外反する口縁端部を上下に肥厚させ、外端面をシャープに作り出しているもので、口縁下に1条と中位に2条の凸線が巡る。また波状文による施文を行い乾燥させた後、一部にタテ線とヨコ線を用いたヘラ記号が施されている。41は口径19.4cmのもので口縁端部を上下に、42は口径22.5cmのもので口縁端部を上方に、ともに肥厚させてシャープに仕上げたものである。42の頸部上位にはヘラ描きによる沈線が1条巡る。また43は口径15.4cmのもので、口縁端部を上下に肥厚させて丸くおさめている。体部外面には成形時の平行タタキをナデ消した状況が観察できる。44は口径20.0cmを測るもので、外反する口縁端部を垂下させて外端面を作り出している。体部外面にはヨコ方向の平行タタキの後、タテ方向の平行タタキを行い、それをヨコナデによって部分的に消している状況が明瞭に確認できる。また内面は、あて具の痕跡をナデによって丁寧に消している。

以上の須恵器のうち、蓋杯及び高杯では1mm程度の細かい砂粒を僅かに含むものが大半である。焼成は良好で、暗灰色から淡灰色に発色しているものが大半であるものの、32は暗赤灰色に発色している。壺・甕では2～3mm大の砂粒を一定量含むものが多い。焼成は良好で、暗灰色から淡灰色に発色しているものが大半であり、特に39は硬質である。

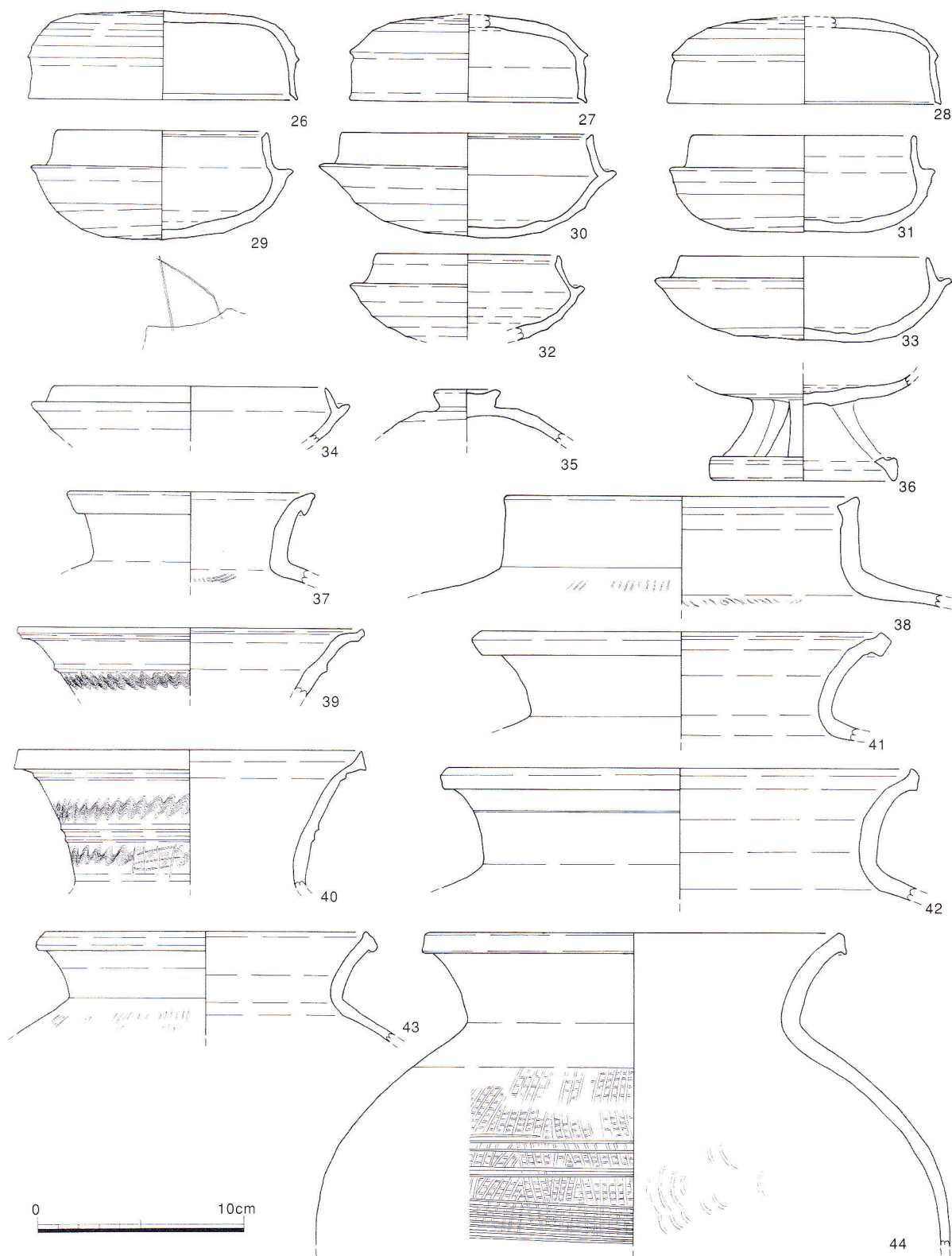
これらの出土位置は、26～29・31・35・36・39・40・43・44が2－5区の第3b層、30・34が2－5区の第3a層、32が2－4区の第3c層、33・41が2－6区の第3b層、37が1－11区の第2層、38が1－8区の第3a層、42が2－1区の第3b層である。時期的には5世紀後半から6世紀後半の範疇におさまるものと考えられる。

#### 〔製塩土器〕（第11図45～61、図版30）

45～47は、口径4.5cm前後の器壁が薄い丸底Ⅰ式に位置づけられるものである。調整は不明瞭なものが多く判別が困難であるものの、47の内面には板状工具によるナデ調整が、外面には掌紋が観察できる。48は口径11.8cmと比較的大きいもので、器形的には丸底Ⅰ式に類似するものである。内面下半部にはナデ調整に先行するヨコ方向の貝殻条痕が観察できる。



49～51は丸底Ⅱ式に位置づけられるものである。49は口径6.2cm、器高5.6cmの完形のもので、内湾する口縁部をもち器壁が比較的薄いものである。50・51は口径8.0cm前後、器高5.0cm程度の法量をもつもので、ほぼ直立する口縁部を形成するものである。3点とも、内面にはヨコ方向の貝殻条痕が、外面には



第10図 遺物実測図 3



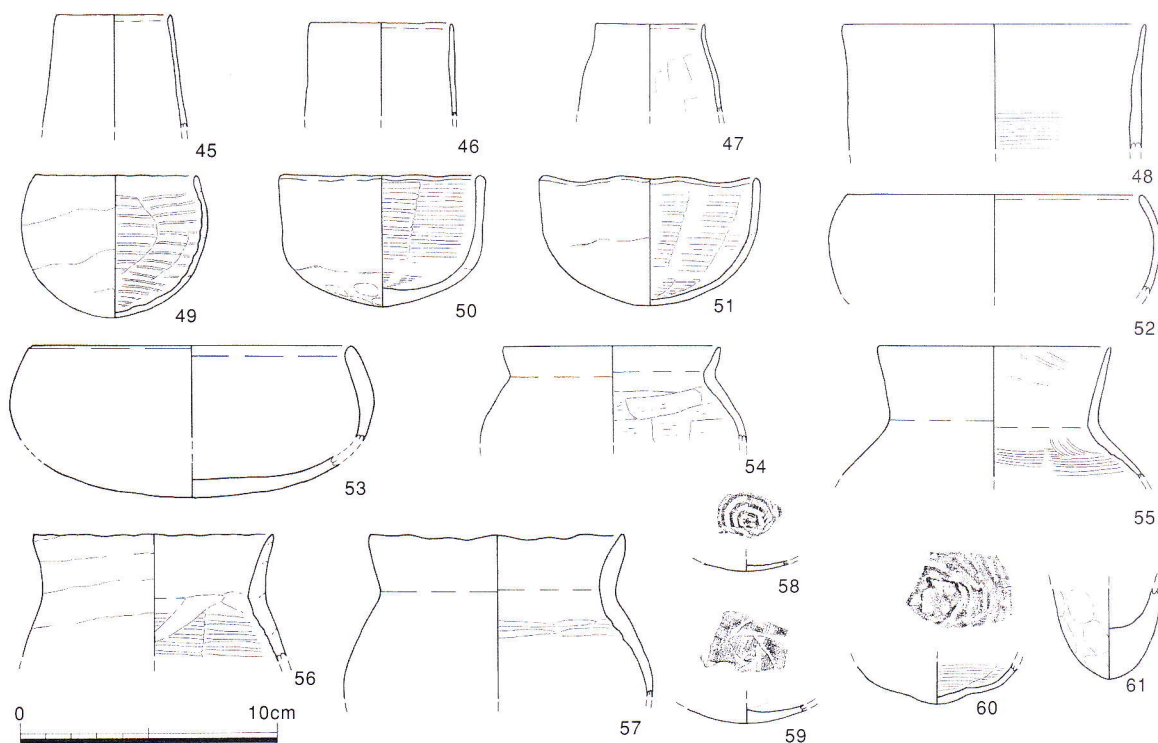
粘土紐の巻き上げ痕が明瞭に残る。外面調整では、49に掌紋が観察できる他、50の底部には指頭圧痕が残る。また51の内底面には塩の結晶が付着している。52は口径11.4cmと比較的大きいもので、器形的には丸底Ⅱ式に類似するものである。内外面ともヨコナデによってシャープに仕上げている。

53は土師器杯に類似する器形のもので、口径12.4cm、器高6.0cmに復元できる。内湾する口縁部はヨコナデ、体部内外面はナデ調整によって仕上げ、内底面にはへら先によるとみられる痕跡が残る。また口縁端部内外面の一部に塩の結晶が付着している。

54～57は甕形のものである。54は口径8.4cmで、比較的短い口縁部をもつものである。体部内面にはヨコ方向のへラケズリが施され、外面には掌紋が観察できる。55～57は口径9.5cm前後のもので、ともに体部内面にヨコ方向の貝殻条痕が残る。55は器壁が薄くシャープに仕上げたもので、口縁部内面にはヨコナデに先行する貝殻条痕が僅かに観察できる。56は頸部の稜が不明瞭な器形で、外面には粘土紐の巻き上げ痕が顕著に残る。57は口縁部が肥厚し、外反してのびるものである。また54の外面と56の口縁部内面には、それぞれ塩の結晶が付着している。

58～61は底部である。58は丸底Ⅰ式の底部と考えられるもので、内底面に貝殻条痕が、外面には掌紋が観察できる。59・60は丸底Ⅱ式の底部と考えられるもので、59の内底面には器壁をかき取ったへら状工具の痕跡が、60の内面には貝殻条痕がそれぞれ観察できる。また61の外面には掌紋が残る。61は丸底Ⅳ式に比定できる尖底のものである。この土器の外面には指オサエの痕跡が顕著に残る。

以上の製塩土器の胎土は、微細な砂粒を僅かに含むものが大半で、砂粒には赤色軟質粒が目立つ。焼成は大半が良好であるものの、比較的軟質なものとして50・51・56・57・61が挙げられる。また色調は赤褐色から淡赤褐色に発色しているものが大半であるものの、45・49・59・60は淡褐色に、52は乳白色に、54・61は黄褐色にそれぞれ発色している。



第11図 遺物実測図 4

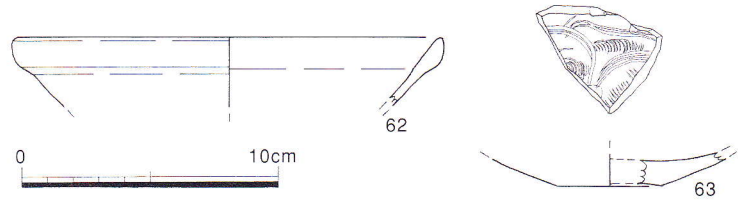
これらの出土位置は、45～48・52～54・56・58～60が2－5区の第3 b層、49・55が2－6区の第3 b層、50・51が2－5区の第3 a層、57が2－2区の第3 c層、61が1－8区の第2層である。時期的には奈良時代の61を除き古墳時代の範疇におさまるものと考えられる。

〔中国製磁器〕（第12図62・63、図版30）

62は口径16.6cmを測る玉縁の白磁碗である。平安時代後期のものと考えられる。

63は底径4.1cmの青磁皿である。

内底面にはノミ状工具とクシ状工具を用いて画花文を描き、外底面は施釉後に釉薬を削り取り露胎としている。鎌倉時代のものと考えられる。



第12図 遺物実測図 5

これらの出土位置は、62が1－11区の第2層、63が1－1区の第2層である。

### （3）土製品（第13図64～73、図版31）

土製品には、有孔土錘や管状土錘のほか紡錘車が出土している。土錘については、出土破片数89点を数え、そのうち約7割が有孔土錘である。

有孔土錘は、大型のもの（64・65）と小型のもの（66～69）に大別できる。64は断面形態が長径2.7cm、短径2.0cmを測る楕円状を呈するものである。側端面にはヘラ切りの痕跡が認められ、端部には直径8mmの紐通し孔が穿たれている。65は直径2.2～2.4cmを測るもので、側端面はヘラ切り後、指頭によるナデを行い平滑に仕上げている。端部には直径6mmの紐通し孔が穿たれている。次に66～69は、直径1.2～1.5cmを測る小型のものである。66は全長6.0cmを測る完形のもので、側端面にはヘラ切りの痕跡が認められ、両端部には直径5mmの紐通し孔が穿たれている。重量は15.0gを量る。67は、側端面にヘラ切りの痕跡が認められるもので、端部には直径9mmの紐通し孔が穿たれている。68・69は、摩滅が著しく成形技法の観察が困難なもので、端部にはそれぞれ6～7mmの紐通し孔が穿たれている。これら64～69の色調は69が褐色であり、それ以外のものは黄褐色から淡赤褐色に発色する。また胎土については、69が3mm大までの比較的粗い砂粒を多く含むのに対し、それ以外のものは微細な砂粒を含むものである。

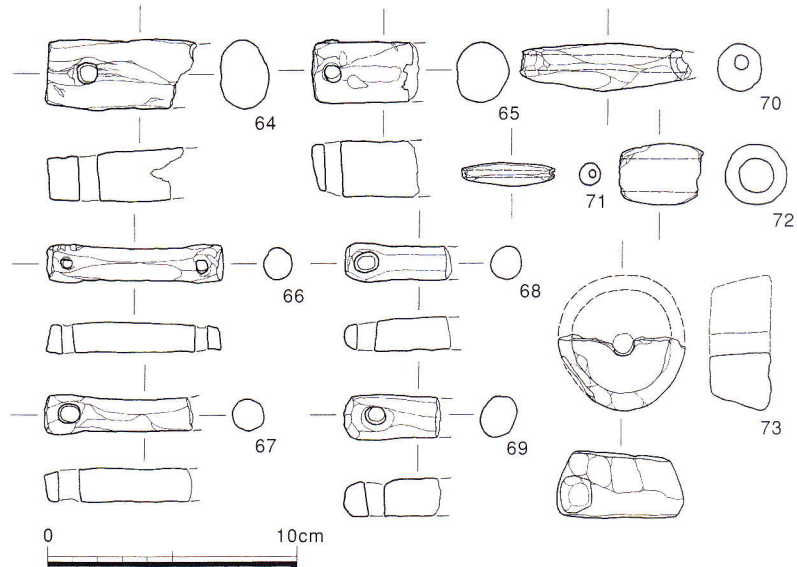
管状土錘は、大型のもの（70）と小型（71）のもの、またやや寸胴なもの（72）がある。まず70は、右側端部を欠損するもののほぼ完形のもので、残存長6.9cm、最大径1.9cmを測る。成形はナデと指頭によるオサエによって行うもので、特に端部には丁寧なオサエが認められる。また断面観察では、中心からややずれた位置に直径5mmの紐通し孔が認められる。重量は19.2gを量る。71は完形のもので、全長3.8cm、最大径9mmを測る。成形方法や紐通し孔の位置などは70と同様である。紐通し孔の直径は3mmであり、重量は2.3gを量る。72はほぼ完形のもので、全長3.3cm、最大径2.4cmを測る。断面観察では、紐通し孔の直径が1.3cmを測り、70・71と比較して明らかに大きく、装着されるものの違いを示すものと考えられる。これら70～72の色調は、70が灰黄色、71が赤褐色、72が黄白色に発色するものである。また胎土については、それぞれ微細な赤色軟質粒が含まれる。

73は、紡錘車である。全体の約1/2を欠損するものの、復元すると直径5.0～5.3cm、高さ2.3～2.6cmを



測るものとみられる。縦断面の形状は台形状を呈するもので、中央には直径8mmの円孔が穿たれている。成形はナデや指頭によるオサエによって行われており、側面にはその痕跡が明瞭に残っている。色調は黄褐色に発色し、胎土に微細な赤色軟質粒が含まれる。

その他のものとして、フイゴの羽口(図版31上a)が第1-9区第3層から出土している。



第13図 遺物実測図6

以上の遺物の出土位置は、

64・66・73が2-6区の第3b層、65・67が2-5区の第3b層、68がSX-7の第1層、69がSX-3の第2層、71は1-1区の第2層である。そのほか、層位不明のものとして70が1-9区、72が2-6区から出土した。

#### (4) 石器(第14・15図74~89、図版31~33)

石器はすべて礫石器であり、砂岩を用いた叩石や磨石及び石錘のほか、結晶片岩を用いた棒状品(89)が出土している。

叩石は、使用痕である敲打の位置やその形状から大きく3つに分類が可能である。まず74~77は、礫の上下端部及び左右側縁部の複数ヶ所に細かな敲打痕が集中してみられるものである。また79~81は礫の側縁部に細かな敲打痕が帯状に集中してみられるものである。さらに82~84は、礫の左右側縁部に敲打による抉りを施すものである。これらの敲打痕は、その大半が石の潰れのような細かな凹凸となって残るものである。

74は棒状の礫を用いたもので、全長15.5cm、最大幅4.0cmを測り、重量は320gである。敲打痕は、下端部及び左右側縁部に認められる。そのうち左側縁部の上部にみられる敲打痕は、長さ3.7cm、幅1.4cmの範囲が皿状に凹むものである。また右側縁部と下端部の敲打痕は、左側縁部ほど集中するものではなくまばらに認められる。75は横断面が方形状の礫を用いたもので、全長11.1cm、最大幅5.2cmを測り、重量は450gである。敲打痕は、上端部及び左側縁部に認められる。そのうち左側縁部の敲打痕は、長径2.2cm、短径1.4cmの範囲が浅く凹むもので、その周辺部にも集中して認められる。その他、まばらではあるものの上端部にも敲打痕が認められる。76は、丸味のあるやや扁平な礫を用いたもので、全長12.1cm、最大幅6.4cmを測り、重量は430gである。敲打痕は、上下端部及び右側縁部に認められる。これらのうち上端部のものは、表裏面からの敲打によって、敲打面の中央部に稜線が形成されるものである。また下端部の裏面には、敲打行為によって剥落した痕跡が明瞭に残っている。77は卵形の円礫を用いたもので、全長11.7cm、最大幅6.5cmを測り、重量は630gである。敲打痕は、表面の下端部

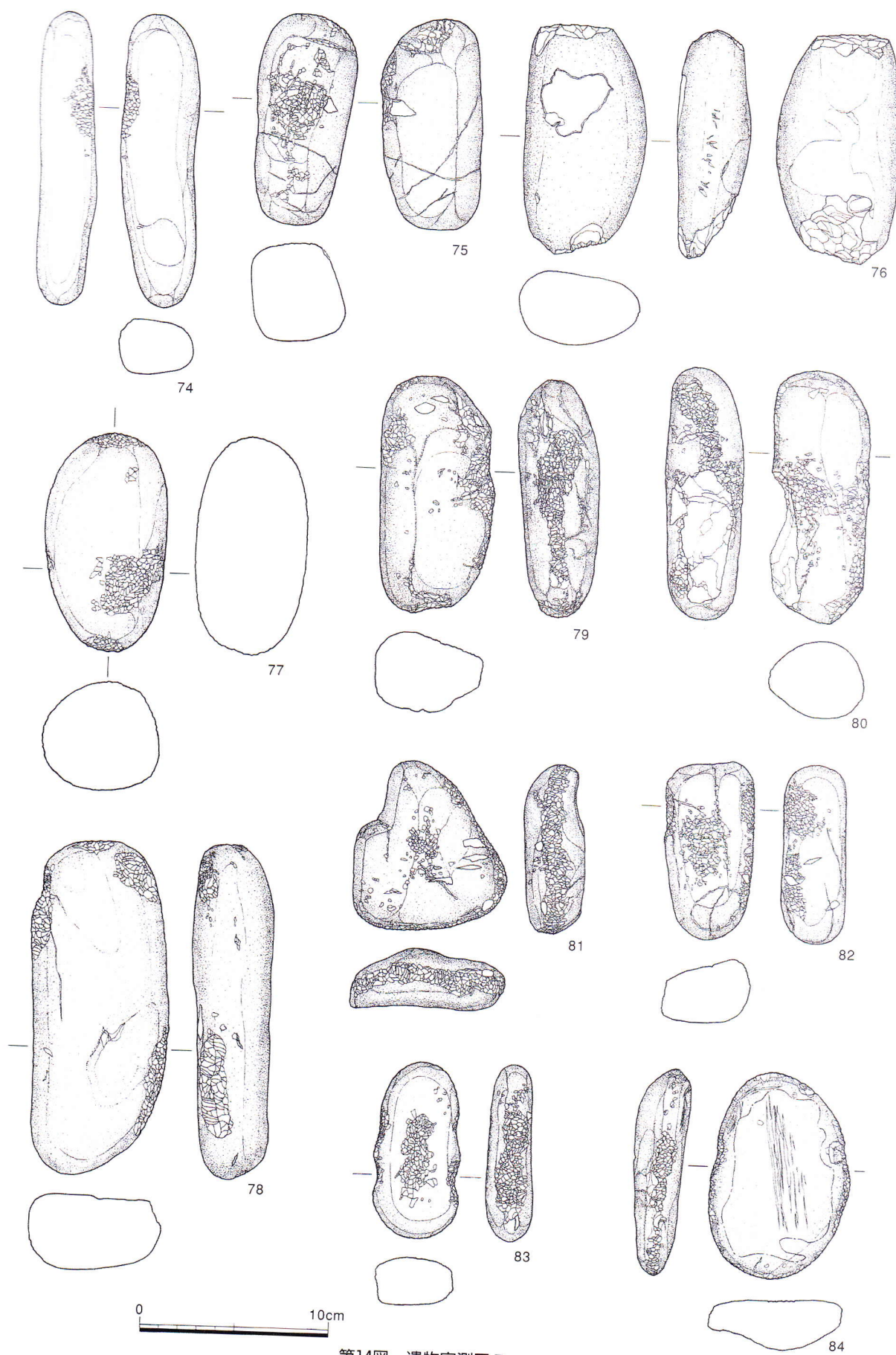


や上下端部及び左右側縁部の合計 5ヶ所に集中して認められる。そのうち表面下端部のものは、長径3.0cm、短径2.2cmの範囲が浅く皿状に凹むもので右側縁部にまでおよんでいる。石材については、砂岩を構成する鉱物粒子が粗いもので、色調は灰黄色である。

次に78は、やや厚みのある板状の礫を用いたもので、全長17.7cm、最大幅7.2cmを測り、重量は880 gである。敲打痕は上下端部及び左右側縁部に集中して認められ、左右側縁部の敲打痕は上下端部付近に偏ってみられる傾向がある。特に、右側縁部の下端部や左側縁部の上端部にみられるものは、長さ5.0～5.5cm、幅1.5～2.0cmの帯状を呈し、その内側が浅く凹むものである。79は、全長12.6cm、最大幅6.0cmを測り、重量は430 gの礫を用いたもので、敲打痕は上下端部及び左右側縁部に集中して認められる。そのうち右側縁部には長径2.7cm、短径1.9cmを測る楕円形状の浅い凹みを上端として、長さ5.5cmにわたり帯状の敲打痕が認められる。80は左側縁部の下半が使用中に破損したと考えられるもので、全長13.5cm、最大幅5.1cmを測り、重量は410 gである。敲打痕は、表面の中央部や左右側縁部に集中して認められる。特に破損しているものの左側縁部には、長径2.0cm、短径1.5cmを測る楕円状の浅い凹みを上端として、復元長10.1cmを測る帯状の敲打痕が認められる。また、右側縁部の下端には敲打による長径2.5cm、短径1.8cmの楕円状を呈する平坦面が形成されている。81は、三角形の扁平な礫を用いたもので、全長9.0cm、最大幅8.1cmを測り、重量は300 gである。敲打痕は、三辺のうち下辺と右辺の側縁部において帯状に集中して認められる。また表面の中央部にはまばらではあるものの、敲打痕が確認できる。

82は、横断面が歪な台形状でやや厚みのある礫を用いたもので、全長9.6cm、最大幅4.7cmを測り、重量は250 gである。敲打痕は、表面の中央部や左右側縁部に集中して認められ、裏面にもまばらな敲打痕がみられるものの、上下端部には確認することができなかった。これらのうち左右側縁部の上半部にみられるものは、左右相対する位置に敲打によって挟り込みが施されるものである。また、右側縁部の下半部には長さ3.5cm、幅1.0cmの範囲に帯状の敲打痕が認められる。83は扁平な楕円形状の礫を使用したもので、全長7.4cm、最大幅4.5cmを測り、重量は157 gである。敲打痕は、表面の中央部及び左右側縁部に集中してみられるものの、上下端部には確認することができなかった。これらのうち左右側縁部には左右相対する位置にそれぞれ2ヶ所ずつ敲打による挟り込みが施されている。また表面には、82と同様に長さ5.0cm、幅1.5cmの範囲に敲打痕が集中して認められる。84は、扁平な楕円形状の礫を使用したもので、長径10.9cm、短径7.4cmを測り、重量は290 gである。敲打痕は、粗密の差はあるもののすべての側縁部に認められる。そのなかで礫の長軸と直交する側縁部には、敲打による挟りを左右2ヶ所ずつ確認することができる。また表面には、長軸方向に平行するように細い線状の擦痕が数条認められる。これら82～84は、敲打による挟りをもつことなどから後述する石錘の可能性がある。

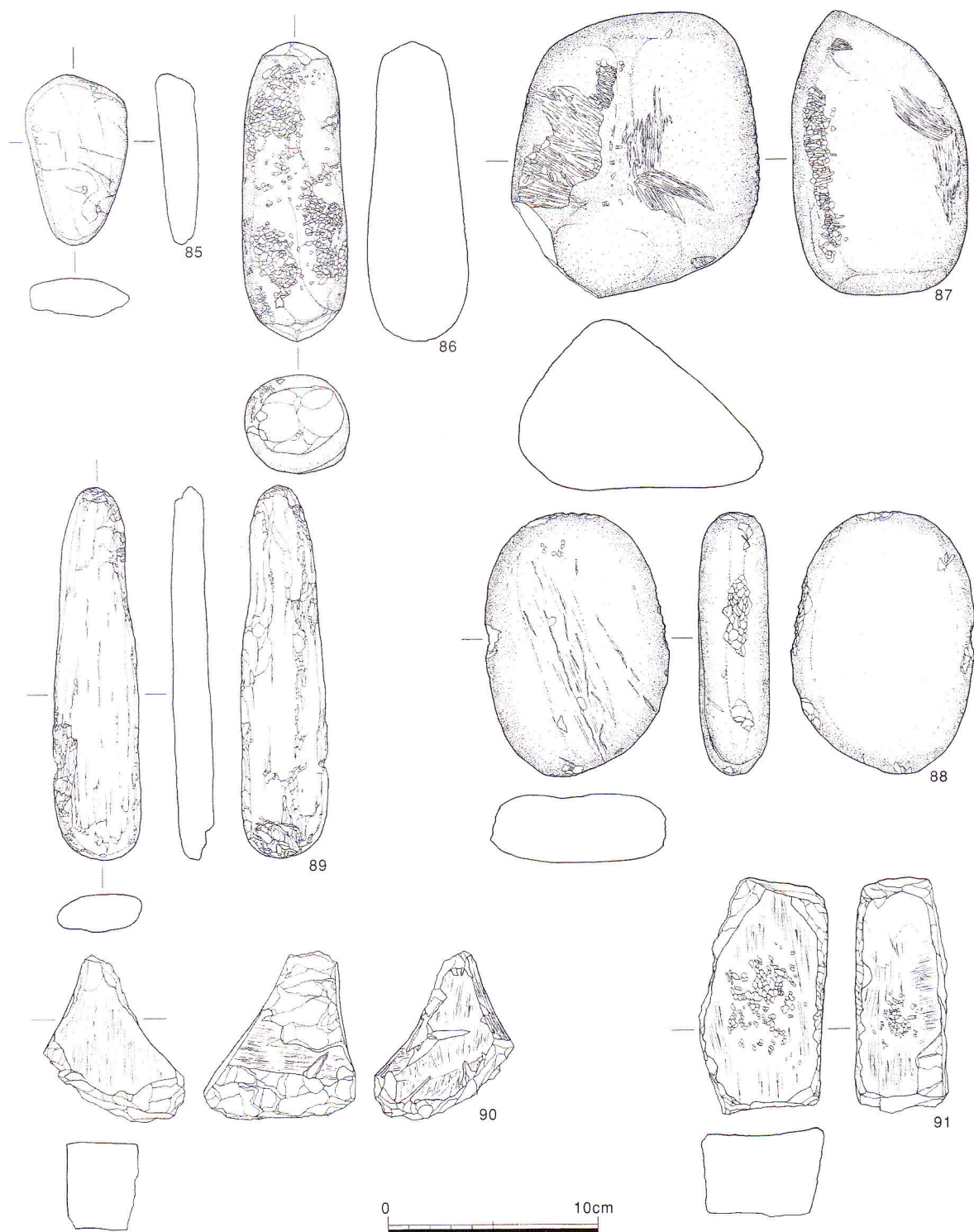
85～87は磨石である。85は、扁平な三角形の礫を用いたもので、全長6.3cm、最大幅4.9cmを測り、重量は99 gである。磨面は表側であり、著しく平滑で不定方向の擦痕が認められる。86は円柱状の礫を用いた石杵状の磨石であり、全長14.5cm、最大幅5.0cmを測り、重量は490 gである。上下端部の磨面には、ともに相対する2方向からの複数回にわたる研磨行為によって中央部に稜が形成されており、この稜線方向性はそれぞれ直交する関係にある。また磨面は、平滑であるものの石の粒子が潰れるほど研磨されていない。その他、表面には敲打痕も認められ、一部集中する部分



第14図 遺物実測図 7



もみられるが、楕円状や帯状、また挟りを形成するものではない。87は横断面が三角形状の礫を用いたもので、残存長13.2cm、最大幅11.7cmを測り、重量は1.6kgである。斜面に相当する2ヶ所には筋状の擦痕がみられるもので、その方向性は一部を除き斜面に対し平行するものである。また側縁部には、長さ8.5cm、幅1.2cmを測る帯状の敲打痕が認められ、その法量に関わらず手持ちの作業に使用された可能性がある。



第15図 遺物実測図8



88は石錘である。扁平な楕円形状の礫を用いたもので、長径12.7cm、短径8.7cm、最大厚3.3cmを測り、重量は570 gである。上下端部や左右側縁部には、それぞれ一箇所ずつ合計4ヶ所の敲打による抉りが施されており、また表面の中央部には長軸と平行するように研磨による筋状の凹みが認められる。

89は扁平な棒状の礫を用いたもので、全長18.0cm、最大幅4.1cm、厚さ2.8cmを測り、重量は230 gである。上下端部には表裏の面を違えて人為的な使用の痕跡が認められ、表裏面とも著しく平滑で研磨された可能性がある。

その他、一定量の軽石が出土しており、図版31上bのものは長径4.9cm、短径3.6cmを測り、2-1区第3b層から出土したものである。

以上これらの礫石器のなかで、77・78・87が一部分に、81・84・85が全面に被熱の痕跡が認められ、74・84・85の表面には黒褐色の有機物が付着していた。またその出土位置は、74・75・82が2-6区の第3b層、76・87・88が1-9区のSX-5第1層、77・89が2-5区の第3b層、78が2-4区の第3a層、79~81・83が2-5区の第3a層、84が1-12区の第2層、85が2-3区の第3b層、86が2-4区の第3b層である。

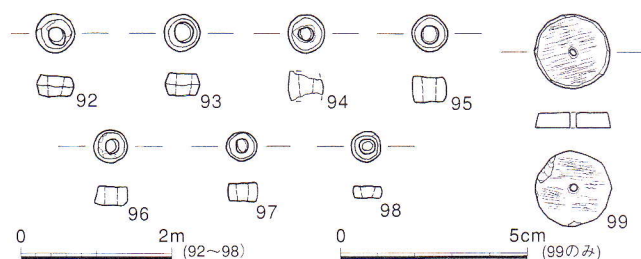
#### (5) 石製品(第15図90・91、第16図92~99、図版33)

石製品には石灰岩製及び砂岩製の砥石の他、滑石製の白玉及び有孔円板が出土している。

90・91は砥石である。90は石灰岩を用いたもので、全長7.0cm、最大幅7.2cm、厚さ6.1cmを測り、重量は270 gである。使用面には明瞭な研磨痕が観察できる。形状は、磨面にあたる4面とも使用頻度が高く、四角錐状に変形している。また、被熱を受けているため一部が赤変している他、粗い加工痕が残る下端部は黒変している。91は砂岩を用いたもので、全長11.2cm、最大幅5.8cm、厚さ4.0cmを測り、重量は470 gである。部分的に破損しているものの使用面には明瞭な研磨痕が確認できる。また砥石としての使用後には、まばらではあるものの敲打痕が認められることから、叩石として再利用されたものと考えられる。

滑石製の白玉は、断面形が算盤玉形のもの(92・93)と、それ以外のもの(94~98)の2つに大きく分類することができる。まず、92・93はそれぞれ側面中位に稜がめぐるもので、直径5mm、厚さ3mmを測り、紐通し孔の直径は2mmである。また94~98は、その法量から直径5mm、厚さ4mm、紐通し孔の直径が2mmを測る大型のもの(94・95)と、直径4mm、厚さ3mm、紐通し孔の直径が2mmを測る中型のもの(96・97)のほか、直径4mm、厚さ2mm、紐通し孔の直径が1.5mmを測る小型のもの(98)の3つに分類することができる。これらの白玉の色調は、92が褐色、93・95が緑灰色、94・96・98が暗緑色、97が透明度の高い淡緑色である。

99は滑石製の有孔円板である。法量は、直径2.0cm、厚さ4mmを測るもので、重量は3.4gを量る。断面形は台形状を呈し、中央には径2mmの円孔が1ヶ所穿たれている。表裏面には丁寧な研磨が施されており、色調は暗緑色である。これらの遺物の出土位置は、90が1-7区のSD



第16図 遺物実測図9

ー1、91～96が2－5区の第3 b 層、97が2－6区の第3 b 層、98が2－4区の第3 b 層、99が2－2区の第3 a 層である。

## 6. まとめ

今回の調査成果は、調査例のなかった遺跡北半部においてその様相の一端を明らかにしたことである。この成果を近接する既往の調査成果と比較検討し、まとめとしたい。

今回の調査対象地に最も近接する調査成果では、南側40mに位置する財団法人和歌山県文化財センターが第3次調査として行ったE地区の調査（以下、県E地区と呼称する。）がある。この調査における堆積の状況は、Ⅱ層が中世の遺物包含層、Ⅲ a 層が8世紀代までの遺物を含む遺物包含層、Ⅲ b 層が奈良時代の遺物を含まない純粋な古墳時代の遺物包含層として報告されている。今回の調査では、出土した遺物について未整理であるため確実とは言えないものの、調査時の認識からも、第2区では第②層がⅡ層、第③ a 層がⅢ a 層、第③ b 層がⅢ b 層に相当するものと判断できた。また第1区では、第3 a 層がⅢ a 層に相当し、Ⅲ b 層（第③ b 層）に該当する堆積は存在しないものと考えられる。

古墳時代に相当する遺構面は、県E地区では標高3.85～4.25mである。今回の調査では1－9～2－1区及び1－11～2－3区の双方とも標高3.40～3.50mで、南側に位置する県E地区の方が50～70cm高くなっていることが明らかである。このことは、南側に位置する遺跡中心部に大規模な砂堆が形成され、この砂堆上に遺跡の形成が始まったものと推定できる。また当調査地は、砂堆の北側末端部に位置し、中でも第1区は砂堆の背後に形成された後背低地、ラグーンとして位置づけられよう。

次に遺構について、県E地区では古墳時代の竪穴住居7棟をはじめ、掘立柱建物3棟、柱列2条、円墳1基などが検出されている。竪穴住居の様相は、すべて方形の平面プランをもつもので、長方形のものがあり、一辺が最大で5.8m程度である。住居内部には、造りつけのカマドがあり、壁溝をもたないという特徴がある。時期的には、5世紀末から6世紀末の範疇である。住居内部からの出土遺物は比較的豊富で、土器の他に子持勾玉、滑石製模造品などの装身具やハマグリの貝殻がほとんどの住居から出土し、有孔土錘が多量に出土したものなどがある。

今回の調査では、各調査区が狭小であったことから溝やピット以外の調査区外に広がる遺構について、規模や性格等の特定はできていない。第2区を中心として検出したピットは、その規模をみても県E地区検出のものと類似するため第2区の範囲まで掘立柱建物や柱列が構築されていたものと考えられる。また第1区で検出した直線的にのびる遺構（SX－5・7・9）や底面がほぼ水平となる遺構（SX－6・8）は、内部構造であるカマドや柱穴などの検出にはいたっていないが、竪穴住居の可能性が極めて高い遺構であるといえよう。このことから、6世紀代に至り生活域が今回の第1区まで拡大したことが考えられる。

以上のことから、西庄遺跡集落域の北部への広がりや、少なくとも当該地まで及んでいることが確実であり、後背低地となる第1区まで生活域が広がっていたものと考えられる。また第1区北端



部の 1-1 ～ 1-4 区では遺構が検出されず、遺物量も減少傾向にあるので、集落の北端に近接する調査区であったものと考えられよう。

#### 【参考文献】

『西庄遺跡―都市計画道路西脇山口線道路改良工事に伴う発掘調査報告書』 （財）和歌山県文化財センター 2003年

『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報 7』 （財）和歌山市文化体育振興事業団 2002年

『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報 8』 和歌山市教育委員会・（財）和歌山市文化体育振興事業団 2004年

# 木ノ本Ⅰ遺跡 第2次試掘調査



## 1. 調査の契機と経過

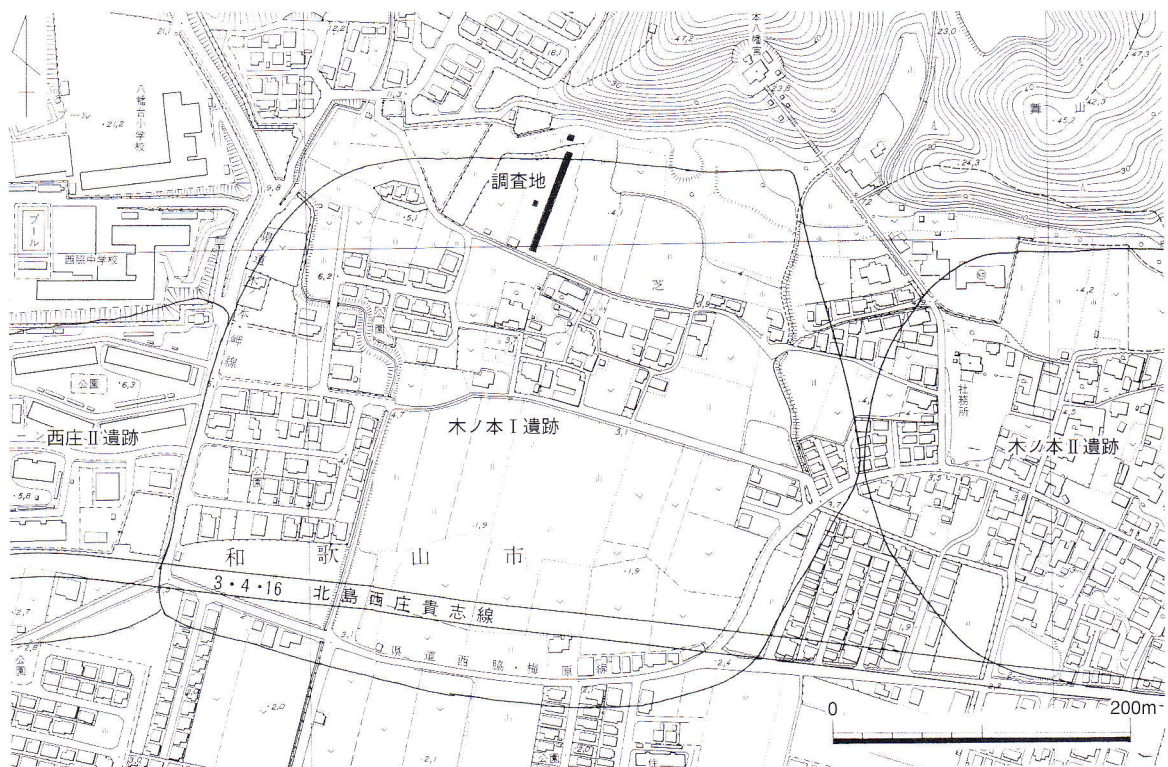
今回の調査は、和歌山市西庄字宮下27・28・29番地内において造成工事が行われることになり、この場所が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された周知の遺跡である木ノ本Ⅰ遺跡(遺跡番号40)の範囲内に相当することから工事に先立ち調査を実施することとなった。

木ノ本Ⅰ遺跡は和歌山市の北西部、和泉山脈南麓の扇状地に位置し、東西約450m、南北約350mの範囲をもち、弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡として周知されている。

本遺跡周辺は、和泉山脈の裾部にそって東から木ノ本Ⅲ遺跡、木ノ本Ⅱ遺跡、木ノ本Ⅰ遺跡、西庄Ⅱ遺跡、平の下遺跡、西庄遺跡と遺跡が連なり、紀ノ川河口域北岸の遺跡の密集する地域として位置づけられる。また社伝では欽明天皇の命によって創建されたといわれる木ノ本八幡宮の南西200mの地点にあたる。

調査対象地は遺跡範囲内の北端部及び近接地に位置し、2004年に財団法人和歌山市文化体育振興事業団によって実施された第1次確認調査地の東側隣接地にあたる。この調査では中世以降の農耕に伴うものと考えられる南北方向の小溝を9条検出した。この成果から、本調査においても同様の遺構の検出が予想された。また、西庄Ⅱ遺跡(遺跡番号364)と当遺跡の西端部の一部を含む範囲が昭和52年度から53年度にかけて和歌山県教育委員会によって西庄地区遺跡として調査されており、この調査では弥生時代後期の円形竪穴住居1棟、古墳時代前期の方形竪穴住居4棟の他、周囲に溝を巡らした掘立柱建物23棟以上で構成される中世の屋敷地や礎石建物や池をもつ近世の屋敷地が検出されている。

この調査は、和歌山市教育委員会が国庫補助金を得て、財団法人和歌山市文化体育振興事業団が同教育委員会の委託を受けて実施したものである。現地における調査期間は、平成17年10月6日から同年10月26日までの約3週間を要した。



第1図 調査位置図



## 2. 位置と環境

木ノ本Ⅰ遺跡(2)は、和泉山脈南麓の猿坂峠から南に流れる小河川によって形成された扇状地に立地する。この和泉山脈南麓の平野部には、木ノ本Ⅲ遺跡(6)や西庄遺跡(1)など広範囲の遺跡群が東西に連なっている(P.19 西庄遺跡第4次調査 第2図参照)。

周辺の遺跡を概観すると、旧石器時代の遺跡としてナイフ形石器が出土した西庄Ⅱ遺跡(4)が知られている。

縄文時代では木ノ本Ⅱ遺跡(5)や木ノ本Ⅳ遺跡(19)の他、海浜部において大谷川遺跡(25)や加太遺跡(26)などの集落が営まれている。大谷川遺跡では縄文時代中期の土器が、木ノ本Ⅱ遺跡では晩期の土器がそれぞれ表採されているが、詳細は不明とされる。また弥生時代では大谷川遺跡、平の下遺跡(3)、木ノ本Ⅰ遺跡があげられる。平の下遺跡は近年の調査で遺跡の初現時期が弥生時代前期に遡ることが明らかとなっている。木ノ本Ⅰ遺跡においては、弥生時代後期末から古墳時代前期の竪穴住居が数棟検出されている。

古墳時代では、平野部を中心として集落が形成されている。西庄遺跡は県内最大規模を誇る製塩遺跡として知られている遺跡で、古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物、石敷製塩炉、古墳などが検出されている。これまでの調査成果から、遺跡の西部を作業域、中央部を居住域、東部を墓域として土地利用を行っていたことが判明している。また古墳は木ノ本Ⅲ遺跡(6)範囲内に、釜山古墳(7)・車駕之古址古墳(8)・茶臼山古墳(9)で構成される木ノ本古墳群が含まれている。このうち、車駕之古址古墳は全長86mの前方後円墳で、周濠と外堤を含めると全長120mにも及ぶ県内最大規模の中期古墳として位置づけられている。

奈良時代では、遺跡周辺は奈良の大安寺領木本郷となっている。また平城宮跡から出土した木簡に海部郡可太郷(和歌山市加太)から塩を納めていたことを示す調の荷札が出土しており、海浜部において引き続き土器製塩が行われていたものと考えられる。その後、平安時代には東大寺末寺崇敬寺領木本荘となり、初期荘園として成立していたことが文献資料から窺える。

鎌倉時代では木ノ本Ⅲ遺跡、木ノ本経塚(10)、平の下遺跡、西庄遺跡などがある。木ノ本Ⅲ遺跡では梵字文を瓦当文様とする軒丸瓦などが出土しており、寺院の存在が考えられている他、土師器皿6枚と和鏡を副葬した後期の土坑墓も確認されている。また同遺跡の範囲内には須恵器を外容器とし、和鏡を納めた木ノ本経塚が存在する。西庄遺跡では、遺存状態の良い人骨と輸入陶磁器、和鏡などを副葬した土坑墓が検出されている。

室町時代では中野遺跡(14)、城山遺跡(15)などがある。中野遺跡は、雑賀衆の紀ノ川北岸地域の拠点となる平城(中野城)推定地である。これまで2度の調査が行われ、長さ65m以上、幅7m、深さ0.9mの大溝を検出、この遺構からは室町時代後期の中国製輸入陶磁器や備前焼などの国産陶器が多量に出土しており、この中には天正13(1585)年の根来寺滅亡直前時期とされるものが含まれており、遺物の組成が類似することや立地から「畠山記」に記載のある雑賀衆の中野城である可能性が高いとされる。また城山遺跡は、標高約40mの独立丘陵に位置する城跡で、丘陵頂部に方形の土塁を巡らし、南側に開口した入口部に門柱礎石を4基検出していることなどから、天正5(1577)年の紀州攻めに伴う織田軍築城の陣城ではないかと推定されている。



### 3. 調査の方法と経過

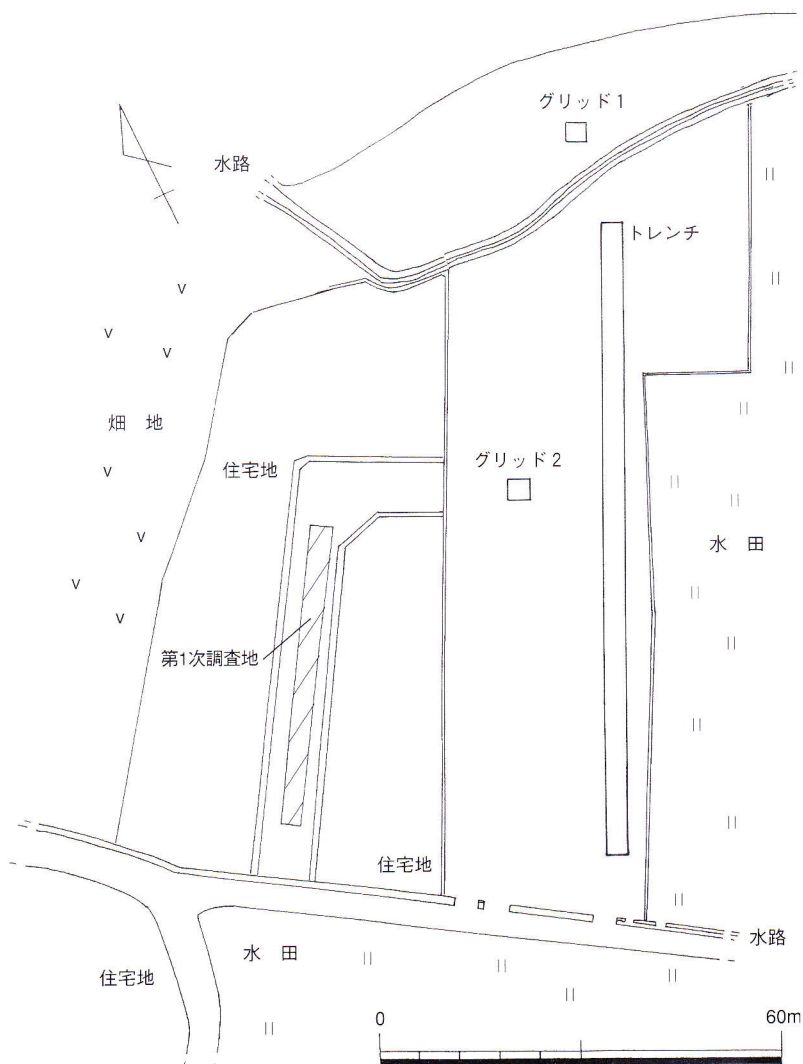
#### (1) 調査の方法

調査地は、遺跡北部に位置する住宅地に囲まれた水田地帯である（第2図）。調査区は、污水管理施設予定部分に幅2m、総延長63mの調査区（トレンチ）とその西側と北側に各1カ所、1辺2mの調査区（グリッド1・2）を設定した。さらに下層遺構の有無及び土層堆積状況の確認を目的として部分的に下層調査（サブトレンチ）を実施した。

重機による掘削は、グリッド1は表土である耕作土（第1層）と床土（第2層）、稀薄な遺物包含層である第3層について行った。グリッド2とトレンチは宅地造成土（深さ約80cm）と旧耕作土（第1層）と床土（第2層）、稀薄な遺物包含層である第3・4層について慎重に行い、これらの土層に含まれた遺物の採集を行った。

人力による調査は、北・南・東壁面の精査と第5層上面における遺構検出を目的とし、検出した遺構については、後述のサブトレンチ範囲内とS K-1についてののみ行った。また調査区内の東壁面に沿った4ヶ所にサブトレンチを設定し、さらに下層の状況確認を行った。

図面による記録は、平面図に関しては、1/200の縮尺を用いた平板測量を行い、縮尺1/2500の国土基本図と照合して位置図とした。また遺構配置図は、1/50の縮尺を用いて手実測で行った。壁面の土層堆積状況図については、仮原点（仮水準値0m）を調査区外に設定し、仮原点からのマイナス値を基準として1/20の縮尺を用いて手実測で行った。土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。



第2図 調査地周辺の全体平面図

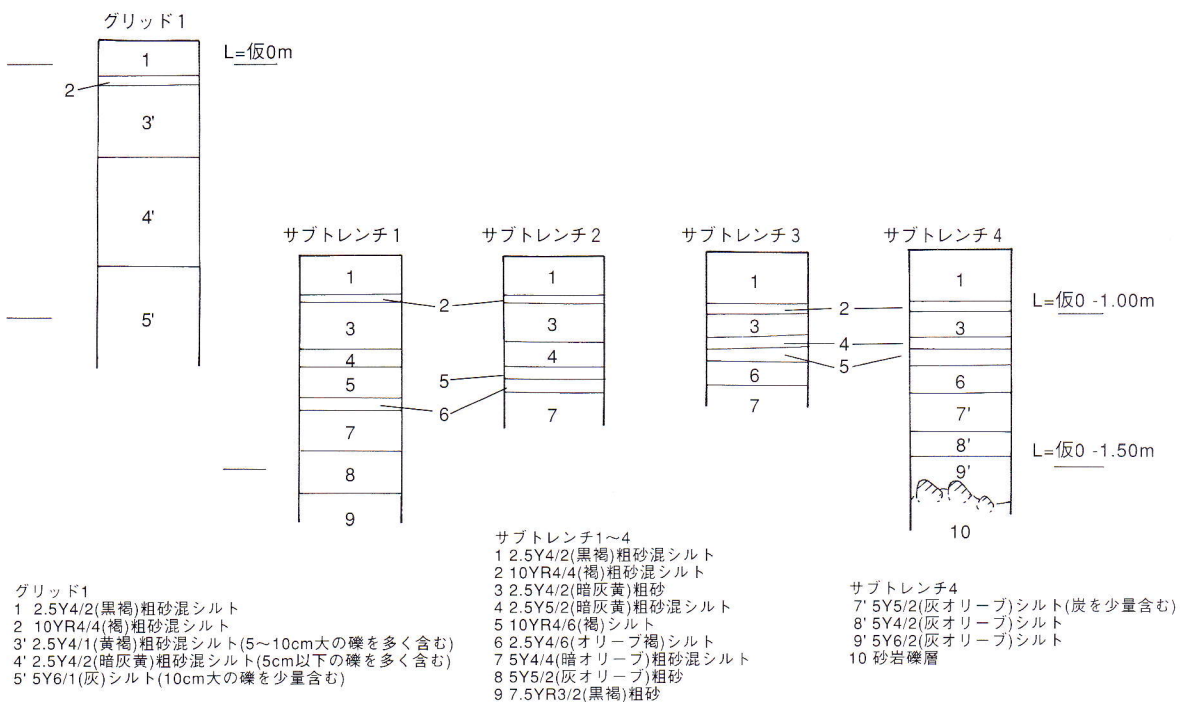
## (2) 調査の概要

各調査区における基本層序は第3図に示した通りである。調査対象地を東西に横断する水路を境としてグリッド1とグリッド2・トレンチではその様相が異なる。

グリッド1は、まず表土である第1層は、約20cmの厚みをもつ水田耕土であり、その水田面の標高は、国土基本図に記された近辺の地表面の標高から6.6m程度と推定できる。第2層は厚さ約4cmの床土である。第3'層は厚さ20～50cmの黄灰色系の粗砂混シルト層で、5～10cm大の礫を含む。第4'層は、厚さ約50cmの厚みをもつ暗灰黄色系の粗砂混シルトで、5～10cm大の礫を含み、中世の土師器を含む。第5'層は厚さ約45cmの厚みをもつ灰色のシルトで、10cm大の礫を含む。

次にグリッド2及びトレンチであるが、水田面の標高は5.8m程度と推定できる。表土である第1層は、約20cmの厚みをもつ水田耕土であり、第2層は厚さ約5cmの床土である。第3層は暗灰色系の粗砂層で、北から南に向かって薄くなっていく傾向を示す。第4層は、厚さ5cm程度の厚みをもつ暗灰黄色系の粗砂混シルトで、中世の土師器及び瓦器が比較的多く出土した。

第5～10層は、トレンチ内に設定した4ヶ所の下層調査区（サブトレンチ1～4）内においてその状況を確認したものである。第5層は、厚さ5～10cmの厚みをもつ褐色のシルトで、土師器及び須恵器、中世の土師器、瓦器が出土した。第6層は、5～14cmの厚みをもつオリーブ褐色のシルト層であり、土師器や中世の土師器が出土している。10～20cmの厚みをもつ暗オリーブ色のシルト（第7層）、約20cmの厚みをもつ灰オリーブ色の粗砂（第8層）、黒褐色の粗砂（第9層）が10cm以上堆積している。ともに褐色粒を多く含む土層で、サブトレンチ1～3の調査では遺物の出土が認められず無遺物層と考えられる。サブトレンチ4においては他のトレンチとは様相が異なる灰オリーブ色のシルトの第7'～9'層を確認した。第7'層は厚さ約15cm、第8'層は厚さ約10cm、第9'層は約30cm以上、第10層は5～20cm大の河原石とみられる砂岩の礫層が堆積している。第7'層からは土師器や炭が出



第3図 調査地土層柱状模式図



土している。

上位にあたる第1・2層はほぼ水平堆積するのに対し、第3層より下位にあたる土層の上面は北に向けて緩やかに下降する傾斜をもつ。

## 4. 遺構

遺構検出の結果、グリッド2とトレンチにおいて第5層上面で耕作に伴うと考えられる小溝や杭跡、土坑などを検出した(第4図)。グリッド1では遺構を検出することはできなかった。また、トレンチ内において下層の状況を確認するために設けたサブトレンチの範囲内においても遺構を検出することはできなかった。

### グリッド1

この調査区においては、遺構を検出することはできなかった。北壁面に沿って幅40cmのサブトレンチを設け、下層の状況を確認した。第4層が中世の土師器を含む遺物包含層であることを確認した。第5層において遺物は確認できなかった。また礫を多く含むことから自然堆積層と考えられる。

### グリッド2

耕作に伴うと考えられる小溝を5条検出した。これらの小溝は、調査区にほぼ平行する南北方向のもので、幅5～20cm、深さ5～10cm程度のものである。中世の土師器及び瓦器等が出土したことから中世の範疇に含まれるものと考えられる。

### トレンチ

調査区全域において耕作に伴うと考えられる多くの小溝と杭跡を検出した。これらの小溝は、S15mまでは調査区に直交する東西方向のもので、幅5～30cm、深さ5～10cm程度のものである。S15m以南は調査区にほぼ平行する南北方向のもので、幅5～30cm、深さ5～10cm程度のものである。覆土はすべて暗灰黄色のシルト混細砂であり、中世の土師器及び瓦器等が出土したことからグリッド2同様、中世の範疇に含まれるものと考えられる。

S1m付近において、SK-1とP-1を検出した。SK-1は西壁に沿って検出したもので、直径約1m、深さ約10cmである。覆土から中世の土師器、瓦器碗、中国製青磁鎗連弁文碗などの遺物が出土した。P-1は直径約25cm、深さ約8cmである。

S15m付近においてSK-2を検出した。東西30cm以上、南北75cm、最深は4cmと浅いものである。

またS19m付近において壁面の土層堆積状況から第4層上面にも遺構を確認した。SK-3は南北約1m、最深は20cm、覆土は砂層で、瓦器が出土している。

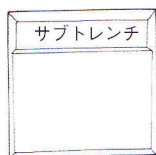
### サブトレンチ1

トレンチの北東角に1辺1mの調査区を設けた。第5層から第9層までを堆積層毎に人力掘削を行ったが遺構は確認できなかった。遺物は第5層から土師器壺、須恵器甕、中世の土師器、瓦器碗が出土している。

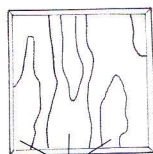
### サブトレンチ2

トレンチのS14m付近に0.5×2mの調査区を設けた。第5層から第7層までを堆積層毎に人力掘削を行ったが遺構は確認できなかった。遺物は第5層から土師器、中世の土師器、サヌカイ剥片、炭、第6層から中世の土師器が出土した。

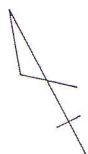
グリッド1



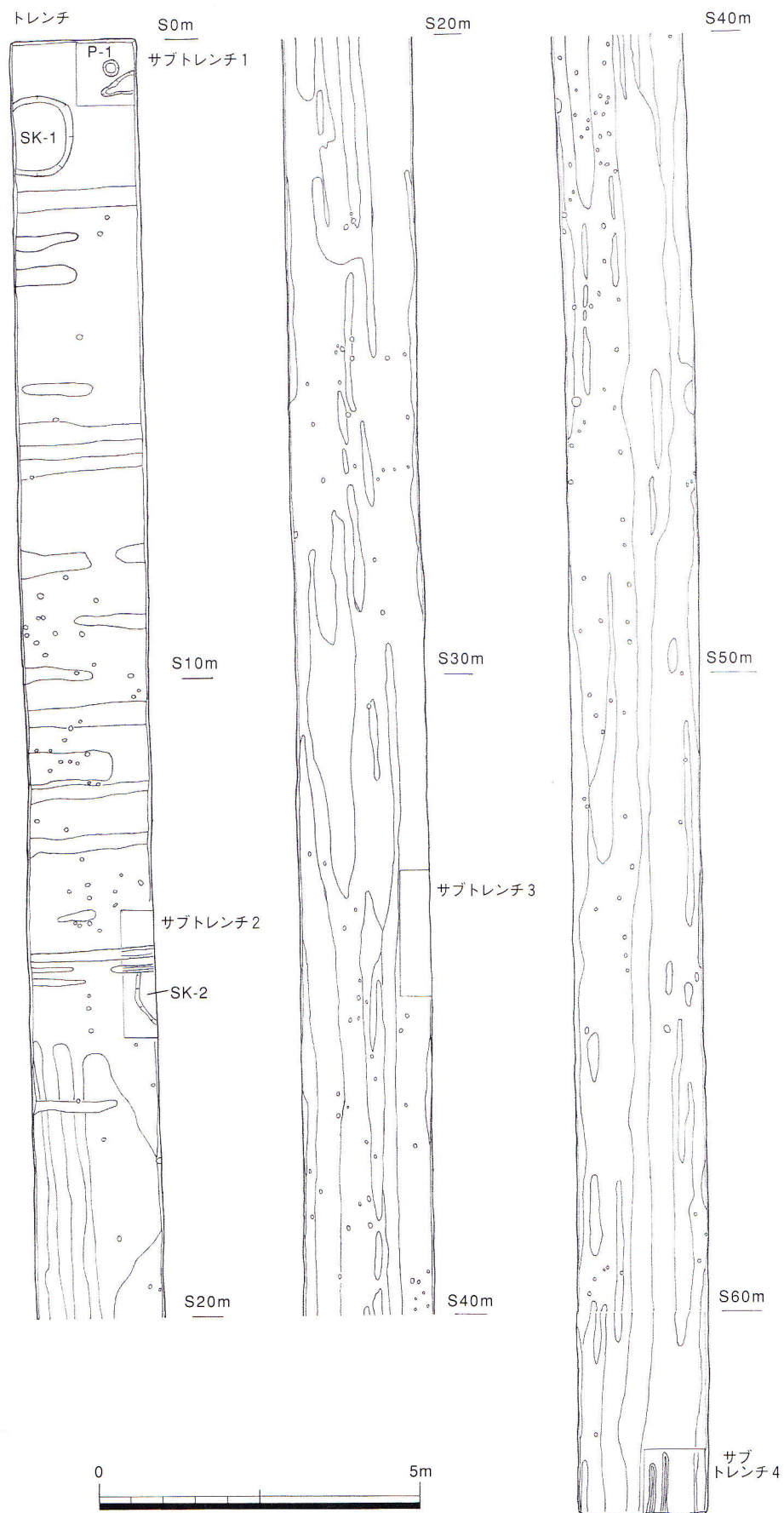
グリッド2



小溝群



トレンチ



第4図 遺構全体平面図



### サブトレンチ 3

トレンチのS33m付近に0.5×2 mの調査区を設けた。第5層から第7層までを堆積層毎に人力掘削を行ったが遺構は確認できなかった。遺物は第5層から中世の土師器、瓦器碗、炭、第6層から土師器碗などが出土した。

### サブトレンチ 4

トレンチの南東角に1辺1 mの調査区を設けた。第5層から第10層までについて堆積層毎に人力掘削を行った。第6層までの堆積及び包含遺物はサブトレンチ1～3と同様であるが、第7'～10層は様相が異なっていた。第7'層からは土師器や炭が出土している。調査範囲が狭小であったため、遺構であるのか遺物包含層であるのかを明らかにすることができなかった。第10層は5～20cm 大の河原石とみられる砂岩の礫層であり、自然堆積層と考えられる。

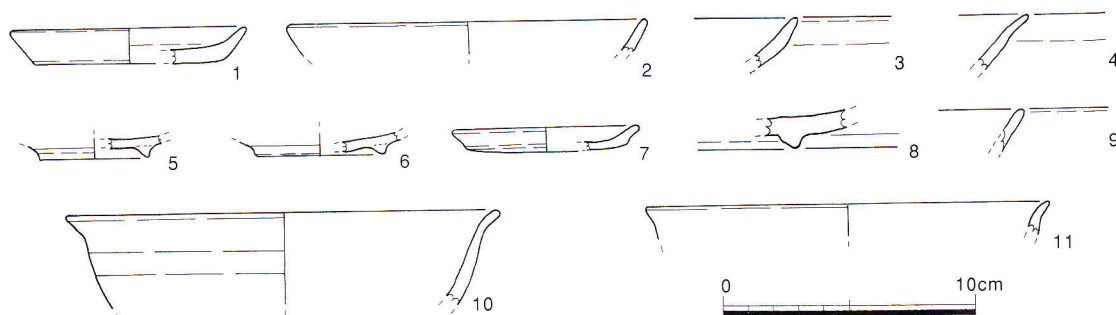
## 5. 遺物

今回の調査においてコンテナ1箱の遺物が出土した。遺物の出土は、第1～6層・7'層の堆積層と第5層上面において検出した小溝群や土坑からのものである。出土した遺物は土師器、須恵器、黒色土器、中世須恵器、中世土師器、瓦器、瓦質土器、備前焼、中国製磁器(青磁・白磁)、肥前系陶磁器、瀬戸系染付、堺焼播鉢、砂岩製叩石、チャート製火打石、サヌカイト剥片などがある。遺物量としては鎌倉時代を中心とした中世のものが比較的多く、次いで古墳時代のものがみられる。なお、江戸時代の遺物は第3層から上層にみられ、第4層は室町時代まで、第5・6層は鎌倉時代までの遺物を含む層である。

以下、主なものについて詳細を述べる(第5図)。

1は中世の土師器皿である。2～7は瓦器である。2～6は碗で、3・4はナデ調整により外反する口縁部、5・6は断面形が逆三角形の高台である。7は皿である。8～11は中国製磁器である。8は白磁碗で平安時代後期のものと考えられる。9は鎬蓮弁文の青磁碗で、鎌倉時代のものと考えられる。10・11は青磁の端反り碗で、室町時代のものと考えられる。

1はSK-2、2～3・5～8・10は第5層、4・9はSK-1、11は機械掘削時に出土したものである。



第5図 遺物実測図

## 6.まとめ

今回の調査地は、木ノ本Ⅰ遺跡範囲の北端部に位置し、水田面の標高は5.8m前後の扇状地上に相当する。当遺跡及び周辺における既往の調査は本調査地の西側に隣接した第1次調査において、中世のものと考えられる小溝群が検出されている。これらのことから、今回の調査においても同時期の遺構・遺物が検出されるものと考えられた。

調査の結果、第5層上面において中世のものと考えられる小溝群、杭跡、土坑などの遺構を検出した。この小溝群は農耕に係るものとみられ、中世には耕地としての土地利用が行われていたものと考えられる。またS15m付近で小溝の掘削方向が、北側は東西、南側は南北方向と二分されるが、調査区の東側隣接地の畦にその地割りの名残を見ることができる(第2図)。また、北端部において検出したSK-1からは、瓦器碗や中国製青磁碗などの遺物が出土しており、周辺地に集落が存在する可能性が考えられる。

サブトレンチ調査の結果、第6～10層上面において遺構は確認できなかった。しかし、第6層には古墳時代の遺物が含まれていることから、周辺に古墳時代の遺構等が存在する可能性が考えられる。またサブトレンチ4において確認した第7層について、土師器片や炭が出土していることから古墳時代の遺構の一部である可能性も考えられる。

遺跡範囲の北端の調査で、遺跡がさらに北側にも展開していることを明らかにすることができた。また、下層に古墳時代の遺構面が存在する可能性があり、今後も近隣の調査においては注意が必要である。

### 【参考文献】

『西庄地区遺跡発掘調査概報Ⅰ』 和歌山県教育委員会 1978年

「木ノ本Ⅲ遺跡第7次調査」『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報2』 財団法人 和歌山市文化体育振興事業団 1994年

『西庄遺跡発掘調査Ⅰ』 (財)和歌山県文化財センター 1995年

大野左千夫「「木ノ本経塚」出土遺物について」『和歌山市立博物館研究紀要10』 和歌山市立博物館 1996年

『木ノ本Ⅲ遺跡 第9次発掘調査概報』 財団法人 和歌山市文化体育振興事業団 1998年

『西庄遺跡発掘調査Ⅱ』 (財)和歌山県文化財センター 1999年

「平ノ下遺跡発掘調査」『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報6』 財団法人 和歌山市文化体育振興事業団 2000年

『西庄遺跡―都市計画道路西脇山口線道路改良工事に伴う発掘調査報告書―』 (財)和歌山県文化財センター 2002年

「車駕之古址古墳第6次調査」『和歌山市内遺跡発掘調査概報―平成14年度―』 和歌山市教育委員会 2004年

「木ノ本Ⅰ遺跡確認調査」『和歌山市内遺跡発掘調査概報―平成16年度―』 和歌山市教育委員会 2006年



## 平の下遺跡 第2次確認調査

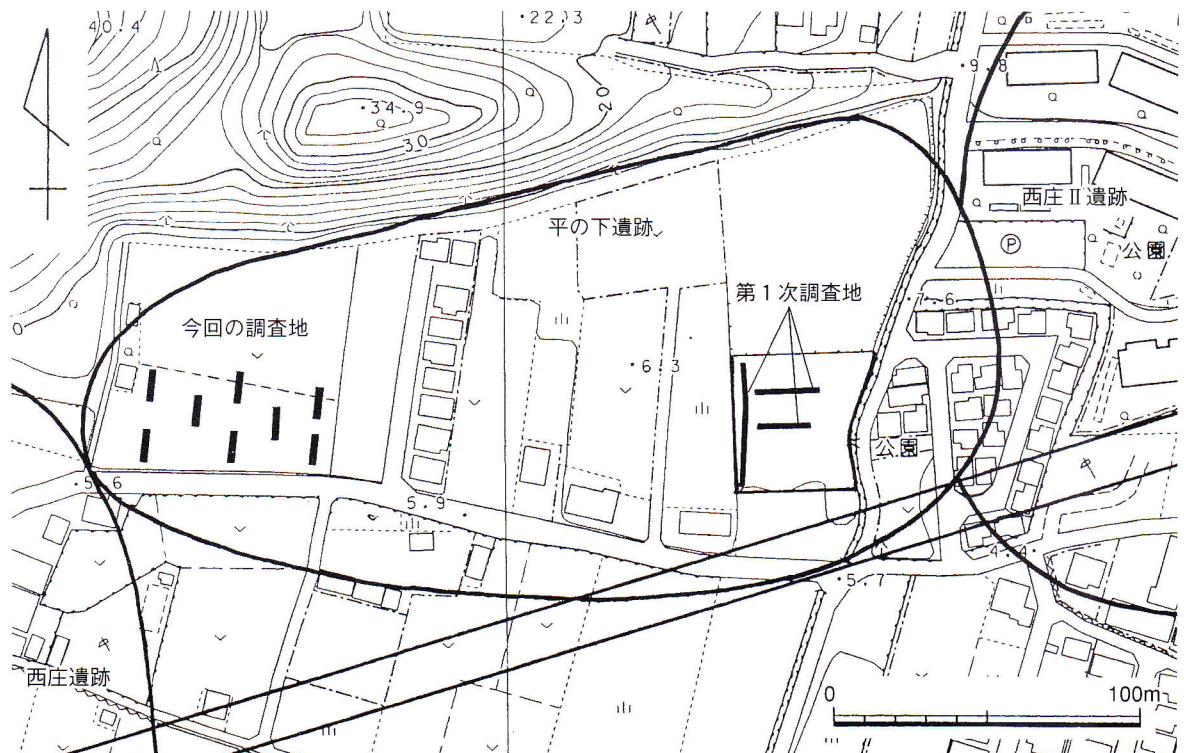
## 1. 調査の契機と経過

平の下遺跡は、標高4.5m前後の和泉山脈南麓裾部に立地し、東西約300m、南北約150mの範囲に広がる遺物散布地として知られている（第1図）。当遺跡における過去の調査としては、平成9年に和歌山市教育委員会が遺跡東部において実施した宅地造成に伴う第1次調査がある。この第1次調査では、調査地の北半部において鎌倉時代の溝や土坑が密に検出されており、また出土遺物では弥生時代前期の甕破片や緑釉陶器が出土している。これらの調査成果から当遺跡の形成時期が弥生時代前期にまで遡ることや、調査地の北半部を中心として鎌倉時代から平安時代にかけての居住域が展開しているものと推測されている。

当遺跡が立地する紀ノ川河口域北岸は、和泉山脈南麓裾部に沿って東から木ノ本Ⅲ遺跡、木ノ本Ⅱ遺跡、木ノ本Ⅰ遺跡、西庄Ⅱ遺跡、平の下遺跡、西庄遺跡、磯脇遺跡が東西に連なる遺跡密集地域である。そのうち木ノ本Ⅲ遺跡は、その範囲内に3基の古墳（釜山古墳・車駕之古址古墳・茶臼山古墳）で構成される釜山古墳群が含まれるものである。また当遺跡の東側に隣接する西庄Ⅱ遺跡では弥生時代後期の円形竪穴住居や古墳時代前期の方形竪穴住居の他、周囲に溝を巡らした3時期にわたる中世の屋敷地が検出されている。さらに西側に隣接する西庄遺跡は、古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物、石敷製塩炉、古墳などが検出されており県内最大規模の製塩遺跡である。

今回の調査は、和歌山市西庄479-2番地他において宅地造成工事が行われることになり、この工事用地が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された平の下遺跡（遺跡番号39）の範囲内にあたるため、和歌山市教育委員会が国庫補助金を得て遺跡確認の目的で実施することとなった。

調査は、和歌山市教育委員会の指導のもと財団法人和歌山市文化体育振興事業団が委託を受けて実施した。また現地における調査は、平成17年12月6日から12月20日までの期間を要した。



第1図 調査位置図



## 2. 位置と環境

遺跡分布図については、「西庄遺跡第4次確認調査」の項、第2図「西庄遺跡・木ノ本Ⅰ遺跡・平の下遺跡周辺の遺跡分布図」(P.19)を参照とする。

奈良県の大台ヶ原を源とする紀ノ川は、本市のほぼ中央を西流して紀伊水道に注いでおり、度重なる流路方向の変化により運ばれた土砂によって和歌山平野が形成されている。古代では、磯ノ浦から海岸線に沿って大規模な砂州が形成されており、紀ノ川は狐島付近で大きく南へ屈曲して和歌浦湾に注いでいたとされている。平の下遺跡(3)は、現紀ノ川河口北岸の海岸砂州上に立地する。

次に本遺跡周辺の遺跡分布については、加太湾周辺の海岸部に分布する遺跡群と磯脇遺跡(20)以東の和泉山脈南麓裾部に東西に連なる遺跡群とに分けることができる。

まず加太湾周辺の海岸部では、縄文時代以降、大谷川遺跡(25)や加太遺跡(26)など紀伊水道に面した海岸部に小規模ながら海浜集落が出現する。大谷川遺跡は縄文時代から弥生時代までの海浜集落として知られており、製塩土器や銅鏃及び銅製の釣針などが出土している。次に弥生時代に出現するものとしては、弥生時代から古墳・奈良時代にかけての製塩集落と考えられている加太駅北方遺跡(27)などがある。さらに古墳時代から奈良時代にかけては、深山遺跡(23)において製塩炉が確認されている。

和泉山脈南麓裾部に立地する遺跡については、旧石器時代のものであり、当遺跡の東側に隣接する西庄Ⅱ遺跡(4)や、東方約7kmに位置する鳴滝遺跡及び園部遺跡においてナイフ形石器が採集されている。また縄文時代のものである木ノ本Ⅱ遺跡(5)や木ノ本Ⅲ遺跡(6)があり、これらの遺跡からは晩期後半の突帯文土器が出土している。弥生時代では西庄Ⅱ遺跡において弥生時代後期の円形竪穴住居1棟が確認されており、古墳時代以降の集落については、同じく西庄Ⅱ遺跡において古墳時代前期の方形竪穴住居が4棟検出されている。また当遺跡の西隣に立地する西庄遺跡(1)は、古墳時代前期から後期にかけての方形竪穴住居や掘立柱建物の他、石敷製塩炉が検出されるなど、古墳時代の大規模な海浜集落として著名である。

古墳については、当遺跡の東約2kmに古墳時代中期の大型前方後円墳である車駕之古址古墳(8)の他、釜山古墳(7)や茶臼山古墳(9)で構成される釜山古墳群が立地している。また古墳時代後期のものでは、西庄遺跡において遺跡の東端部に6基の古墳が築造されている。これらの古墳は和泉砂岩を用いた横穴式石室を埋葬施設とする小円墳群であり、使用石材の一部に紀ノ川南岸においてみられる結晶片岩が使用されており、紀ノ川南岸との交流を考える上で重要な古墳である。

奈良時代の西庄・加太地域は、古代の官道である南海道に沿う地域であり、平城京から海部郡可太郷(加太)の塩が調として都に納められたことを示す木簡が出土するなど、西庄遺跡を中心として土器製塩が行われていたことが分かる。

また平安時代から鎌倉時代にかけては、西庄遺跡や木ノ本Ⅲ遺跡において中世墓が検出されており、副葬品として和鏡や中国製磁器などが出土している。さらに西庄Ⅱ遺跡では、周囲を溝で区画した掘立柱建物で構成される中世の屋敷地が3時期にわたり検出されている。

最後に室町時代では、中野遺跡(14)において雑賀衆の中野城に関わるとみられる大溝が検出されている他、城山遺跡(15)では方形の土塁を巡らせた室町時代後期の城郭が検出されている。

### 3. 調査の方法と経過

#### (1) 調査の方法

今回の調査は、造成工事計画範囲約2400㎡を対象に東西幅約2m、南北長約10mの調査区を8ヶ所設定して実施する予定であった。しかし、掘削途中で上位堆積層の大半が円礫であることを確認し、壁面の崩落が著しい状況であったため調査区壁面に勾配をもたせ掘削する方法を用いた。よって調査面積が223㎡に増加した(第1表)。各調査区の名前は、北東隅にあたるものを第1区と定め順次番号を付して第1区～第8区と呼称した(第2図)。調査対象地は、周辺部の中では微高地状に高くなった休耕地で、過去に畑地として使用されていた土地である(図版43)。重機による掘削は、第4層にあたる礫層まで慎重に行い、検出した遺構とサブトレンチによる下層調査を人力掘削によって行った。

遺構掘削については、確認調査であることから最低限度の情報を得る目的で選択的に掘削を行う予定であったが、検出した遺構が土坑2基であったことからこれらを調査区内において完掘した。

図面による記録は、各調査区ごとに基準ラインを任意に設定し、縮尺1/50で遺構平面図を作成し、周辺部を含めた縮尺1/200の平板測量図と照合して全体図とした。壁面土層断面図については1/20の縮尺を用いた実測を行った。土層の色調及び土質の観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。また遺跡の水準は、国家水準点(T.P.値)を基準とした。

第1表 調査面積一覧表

調査区	規模 (東西×南北m)	面積(㎡)
第1区	2.1×10.9	22.9
第2区	2.2×10.8	23.8
第3区	2.1×11.1	23.3
第4区	2.4×10.8	25.9
第5区	2.6×12.2	31.7
第6区	2.5×11.2	28.0
第7区	2.8×12.5	35.0
第8区	2.7×12.0	32.4
合 計		223.0



第2図 調査地区割図



## (2) 調査の概要

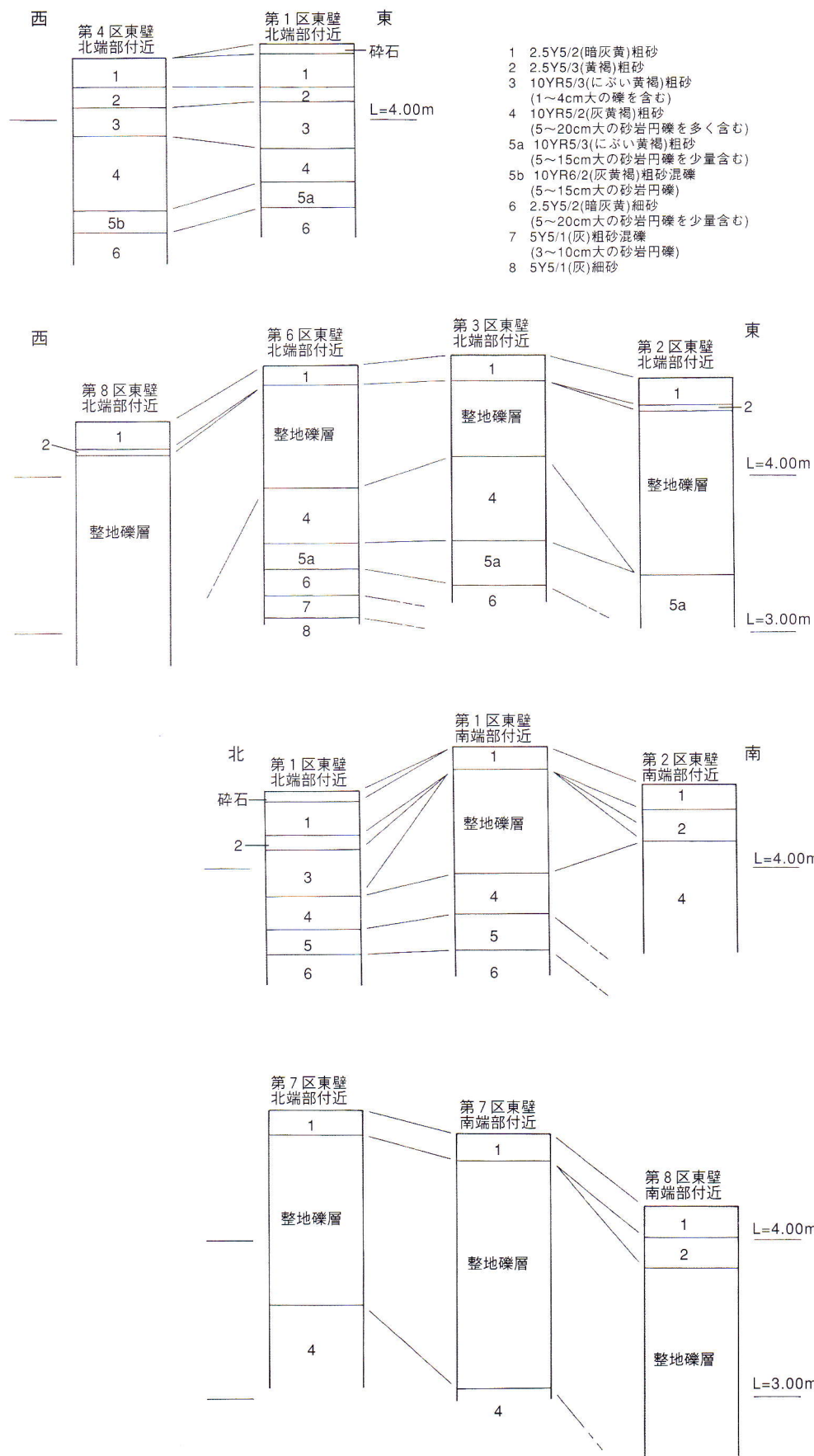
調査地の現状は、調査地の北側において東西方向に構築された石垣がみられ、この石垣と調査地南側の道路に挟まれた部分は周囲より一段高い土壇状を呈する。現地表面の標高は4.2～4.8mを測り、土壇の東西では東端部が最も高く西に向かって低く傾斜し、また南北では北から南に向かって低く傾斜するものである。さらに調査地と周囲の畑地との高低差は、北側では石垣を境として30～40cm、南側では道路面までが45cm、西側では90cm程低くなる。

調査地の基本層序については、第1・4区の調査区中央部やや北寄りを東西に横断する石垣を境としてその様相が大きく異なる。よって、以下では第1・4区における基本層序について説明した後、石垣以南に設定した各調査区の層序について記述することとする（第3図、図版48・49・50上）。

第1・4区の層序は、石垣の構築を境として前後関係を整理することができる。まずこの石垣については、その構造として長さ10～15cm、厚さ6～8cm大の砂岩礫を10段ほど不規則に積み上げたもので、高さは約70cmを測る。石垣の構築された時期については、石積みの最下部に一部コンクリート片が使用されているため近現代と考えられる。したがって、この石垣の基底部下端から上部に堆積する第1・2層は、厚さ25～40cmを測る現代の耕作土と考えられる。次に石垣を境としてその南側には、石垣構築以前に当調査地周辺から採取したとみられる砂岩円礫を用いた整地礫層が堆積している。この整地礫層からは江戸時代後期末の肥前系陶器が出土した。第4区の東壁面では、この整地礫層の上部に厚さ20～30cmを測るにぶい黄褐色の粗砂である第3層が堆積している。したがって第3層の性格及び堆積時期については、整地礫層との前後関係から近代の耕作にかかわる堆積土と考えることができる。この第3層上面では、溝を掘り円礫を充填した東西方向の暗渠排水溝を検出した。

第4層は、整地礫層の下層に堆積する5～20cm大の砂岩円礫を多く含む灰黄褐色の粗砂であり、厚さ20～50cmを測るものである。この第4層上面は、第1・4区において鎌倉時代の土坑などを検出した遺構検出面であり、その上面の標高は3.8～4.0mを測る。この第4層からは、土師器の細片が1点出土したものの、その堆積時期を特定するには至らなかった。ただ、上面において検出した土坑などの形成時期から鎌倉時代以前と考えられる。第5層は、厚さ17cmを測る5～15cm大の砂岩円礫を含む黄褐色系の粗砂であり、円礫の混入量によって2単位（5a・5b層）に細分した。また第6層は厚さ約20cmを測る暗灰黄色の細砂である。これら第5・6層からは、遺物の出土が認められなかったため自然堆積層とみられる。

石垣以南の各調査区における層序については、調査地の全面に現代の耕作土である第1層が堆積している。またその下層にみられる第2層は、南に向かって厚く堆積するもので最大厚20cmを測る。さらに、第2層下については先述した江戸時代後期末以降の整地に伴う厚さ0.5～1.5mを測る整地礫層が堆積している。この整地礫層は、5～10cm大の砂岩円礫や1～4cm大の砂岩円礫が交互に堆積するもので、2～4単位に細分が可能である。整地礫層下の状況については石垣以北の第4層以下の層序とほぼ同様であるが、第6区では第6層下に3～10cm大の砂岩円礫を含む灰色の粗砂混礫である第7層や、さらにその下層に灰色の細砂である第8層が堆積している。これら第7・8層には遺物が認められず、自然堆積層と考えられる。



第3図 調査地土層柱状模式図



## 4. 遺構

今回の調査では、調査地内に合計 8ヶ所のトレンチを設け調査を行った(図版44・45)。その結果、調査地の北側を東西に横断する石垣の南側一帯では遺構を確認することができなかったものの、第1・4区の石垣北側では、第4層上面において鎌倉時代のものとみられる土坑2基(SK-1・2)を検出した。以下、その概要について記述する。

[SK-1](第4図、図版46)

SK-1は、第1区の北東隅部において検出したもので、東西1.2m以上、南北0.6m、深さ約40cmを測る東西に長い楕円状を呈する土坑とみられるものである。覆土は単一で、灰黄褐色の粗砂である。遺構の時期としては、覆土に瓦器(図版50下、5)が含まれることから鎌倉時代のものと考えられる。

[SK-2](第4図、図版47)

SK-2は、第4区の北西隅部において検出したもので、東西1.9m以上、南北1.7m以上、深さ1.2mを測る不整円形の土坑である。覆土は8単位に細分が可能であり、上位層には黄褐色系の粗砂や礫混粗砂、中位層には黄灰色系のシルト混粗砂やシルト、下位層には灰色の粗砂、最下層には灰色の粘土が堆積しており下位層ほど粘性が強くなる。この遺構の性格としては、遺構底面の標高が約2.6mを測りその形状がすり鉢状を呈することや、また最下層では湧水が認められることから素堀りの井戸の可能性もある。遺構の時期としては、覆土に遺物がほとんど含まれていないため不明であるものの、第1区で検出したSK-1と同じ第4層上面において検出したものであることから近似する時期のものと考えられる。

## 5. 遺物

遺物は、遺構覆土や第1～4層の遺物包含層から遺物収納コンテナ1/3箱分が出土した。

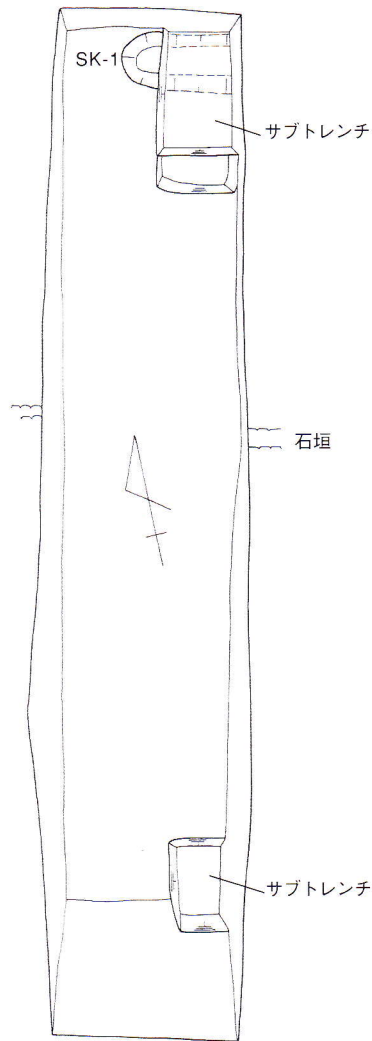
これらの遺物には、土師器・須恵器・瓦器・中世土師器・国産陶磁器などがあり、すべて小破片である。また写真図版に掲載した遺物は、1・2・3・6が第1区第3層、5が第1区SK-1、4が層位不明であるものの第1区から出土した(図版50下)。

## 6. まとめ

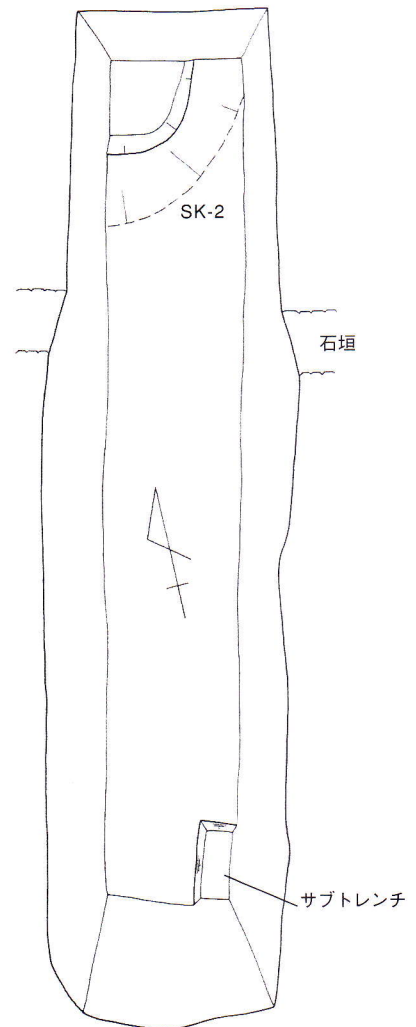
今回の調査では、第1・4区の北端部において鎌倉時代の素堀り井戸と考えられる土坑などの遺構を検出したものの、それ以外の調査区では江戸時代後期末以降の整地に伴う整地礫層が厚く堆積しており、その下面である第4層上面では遺構を確認することができなかった。また遺物の出土量については、各調査区とも極めて少量であり調査区別にみた出土量の違いは認められなかった。

平の下遺跡における第1次調査では、調査地の北端部において鎌倉時代の土坑4基や溝1条など近辺に居住域が存在することを示す遺構が検出されており、東端部では落ち込み状遺構1基とその底面に小溝4条など耕作にかかわる遺構が検出されている。以上のことから、第1次調査地点の北側や今回の調査

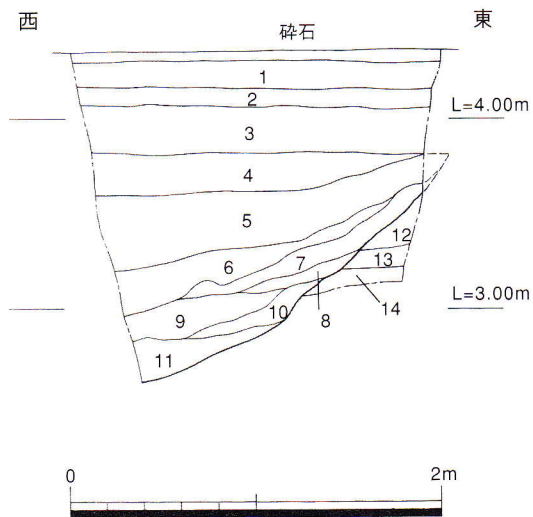
第1区平面図



第4区平面図



第4区北壁土層断面図



第4区北壁

- 1 第1層 2.5Y5/2(暗灰黄)粗砂
- 2 第2層 2.5Y5/3(黄褐)粗砂
- 3 第3層 10YR5/3(にぶい黄褐)粗砂  
(1~4cm大の砂岩円礫を含む)
- 4 SK-2 10YR5/3(にぶい黄褐)粗砂
- 5 SK-2 10YR5/2(灰黄褐)礫混粗砂  
(5~10cm大の砂岩円礫)
- 6 SK-2 2.5Y5/2(暗灰黄)シルト混粗砂  
(5~15cm大の砂岩円礫を少量含む)
- 7 SK-2 2.5Y6/1(黄灰)シルト
- 8 SK-2 2.5Y5/1(黄灰)シルト
- 9 SK-2 5Y5/1(灰)粗砂
- 10 SK-2 N5/0(灰)粗砂
- 11 SK-2 5Y5/1(灰)粘土(植物遺体を含む)
- 12 10YR6/2(灰黄褐)粗砂
- 13 第5b層 10YR6/2(灰黄褐)粗砂混礫  
(5~15cm大の砂岩円礫)
- 14 第6層 2.5Y5/2(暗灰黄)細砂  
(5~20cm大の砂岩円礫を少量含む)

第4図 第1・4区遺構平面図及びSK-2土層断面図



地である第1・4区の北側には鎌倉時代の集落が存在するものと考えられる。また、遺跡範囲の東西端部及び南半部は耕作地であった可能性がある。

当遺跡の東に立地する西庄Ⅱ遺跡では、弥生時代の円形竪穴住居1棟や古墳時代の方形竪穴住居4棟がみられる他、中世段階では掘立柱建物の周囲を溝で区画した屋敷地が3区画以上検出されている。したがって、平の下遺跡の鎌倉時代集落の性格については、西庄Ⅱ遺跡との関連性を今後検討する必要があるだろう。

次に調査地の大部分においてみられた整地礫層については、第1・4区東壁面土層を観察した結果、近現代の構築と考えられる石垣の南側一帯においてのみみられるもので北側では確認できなかった。したがって、調査地南側における江戸時代後期末以降の土地利用の在り方として、第4層上面に円礫による整地が行われた後、居住地として利用されたものと考えられる。また近現代以降はこの整地礫層の北縁辺部に沿って石垣を構築し、この石垣を境として南側を居住地とし、また北側を耕作地として利用したものと考えられる。

最後に出土遺物では、第1次調査においてヘラ描直線文を施した弥生時代前期の土器や緑釉陶器の出土が報告されている。弥生時代前期の土器は、平の下遺跡の形成時期が弥生時代前期まで溯る可能性を示すとともに、周辺に立地する西庄遺跡や西庄Ⅱ遺跡と比較検討することで、遺跡の存続時期や併行関係を知る上で重要なものである。また緑釉陶器については西庄遺跡などでも出土しており、古代南海道沿線に立地する遺跡の性格について今後の検討課題と考えられるものであろう。

#### 【参考文献】

- 『西庄地区遺跡発掘調査概報Ⅰ』 和歌山県教育委員会 1978年
- 『西庄地区遺跡発掘調査概報Ⅱ』 和歌山県教育委員会 1979年
- 『西庄遺跡―都市計画道路西脇山口線道路改良工事に伴う発掘調査報告書―』 (財)和歌山県文化財センター 2002年
- 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報6』 (財)和歌山市文化体育振興事業団 2000年

# 報告書抄録

ふりがな	わかやましないいせきはつくつちょうさがいいほう
書名	和歌山市内遺跡発掘調査概報
副書名	平成17年度
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	北野隆亮・井馬好英・奥村 薫・藤藪勝則
編集機関	1)和歌山市教育委員会 2)財団法人和歌山市都市整備公社
所在地	1)〒640-8511 和歌山県和歌山市七番丁23 TEL 073-432-0001 2)〒641-0024 和歌山県和歌山市和歌浦西2-1-17 TEL 073-444-5906
発行年月日	西暦2007年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおだくろだいせき 太田・黒田遺跡	わかやまけん 和歌山県	3020150	327	34°	135°	20050608	40.8	マンション 建設に伴う 試掘調査
	わかやまし 和歌山市			14′	11′	～		
	くろだ 黒田			10″	43″	20050617		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
太田・黒田遺跡	集落跡	弥生時代	中世以降の低地状 地形	土師器・須恵器		本調査地は遺跡の範囲 外であると考えられる。		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なるかみごいせき 鳴神Ⅴ遺跡	わかやまけん 和歌山県	3020150	318	34°	135°	20050610	68	住宅建設 に伴う発掘 調査
	わかやまし 和歌山市			13′	12′	～		
	あきつき 秋月			56″	17″	20050707		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
鳴神Ⅴ遺跡	散布地	古墳時代	溝、ピット、河道	土師器、須恵器、黒色土器、中世須恵器、中世土師器、瓦器、瓦質土器				

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしのしょういせき 西庄遺跡	わかやまけん 和歌山県	3020150	38	34°	135°	20050912	82.6	造 成 工 事 に伴う確認 調査
	わかやまし 和歌山市			15′	6′	～		
	もとわき 本脇			41″	15″	20050929		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西庄遺跡	散布地	古墳時代	溝、ピット	土師器、須恵器、黒色土器、 中世土師器、瓦器、近世陶 磁器、土製品、石器、石製品		6世紀代の生活域が本 調査地まで及んでいるこ とを確認した。		



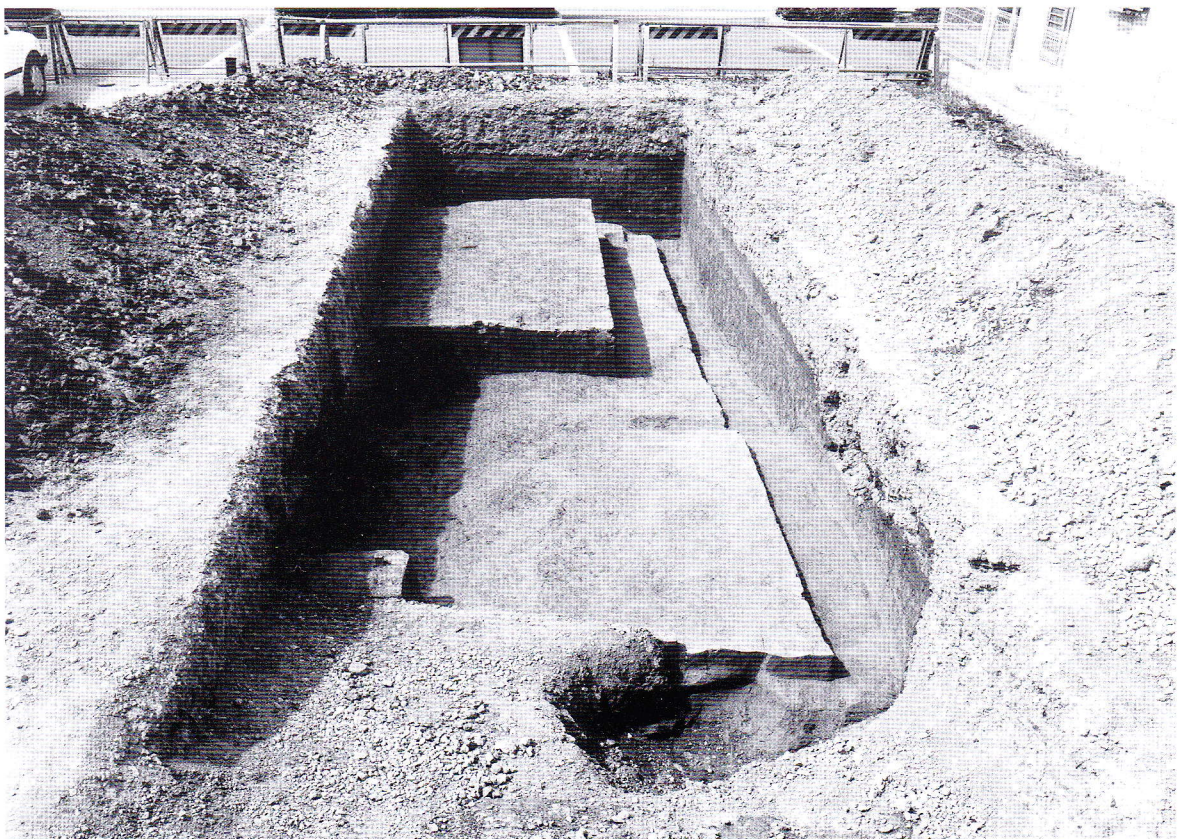
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きのもといちいせき 木ノ本Ⅰ遺跡	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 にししょう 西庄	3020150	40	34° 15′ 53″	135° 7′ 5″	20051006 ～ 20051026	134	造成工事に伴う試掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
木ノ本Ⅰ遺跡	散布地	弥生～ 古墳時代	中世の小溝群、杭跡、 土坑	土師器、須恵器、黒色土器、 中世須恵器、中世土師器、瓦器、 瓦質土器、備前焼、中国製磁器		遺跡範囲の北側にも遺構が展開することを確認した。		
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひらのしたいせき 平の下遺跡	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 にししょう 西庄	3020150	39	34° 15′ 46″	135° 6′ 40″	20051206 ～ 20051220	223	造成工事に伴う確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平の下遺跡	散布地	鎌倉時代	鎌倉時代の土坑	土師器、須恵器、中世土師器、 瓦器、国産陶磁器				

# 版 図





調査前の状況(南から)

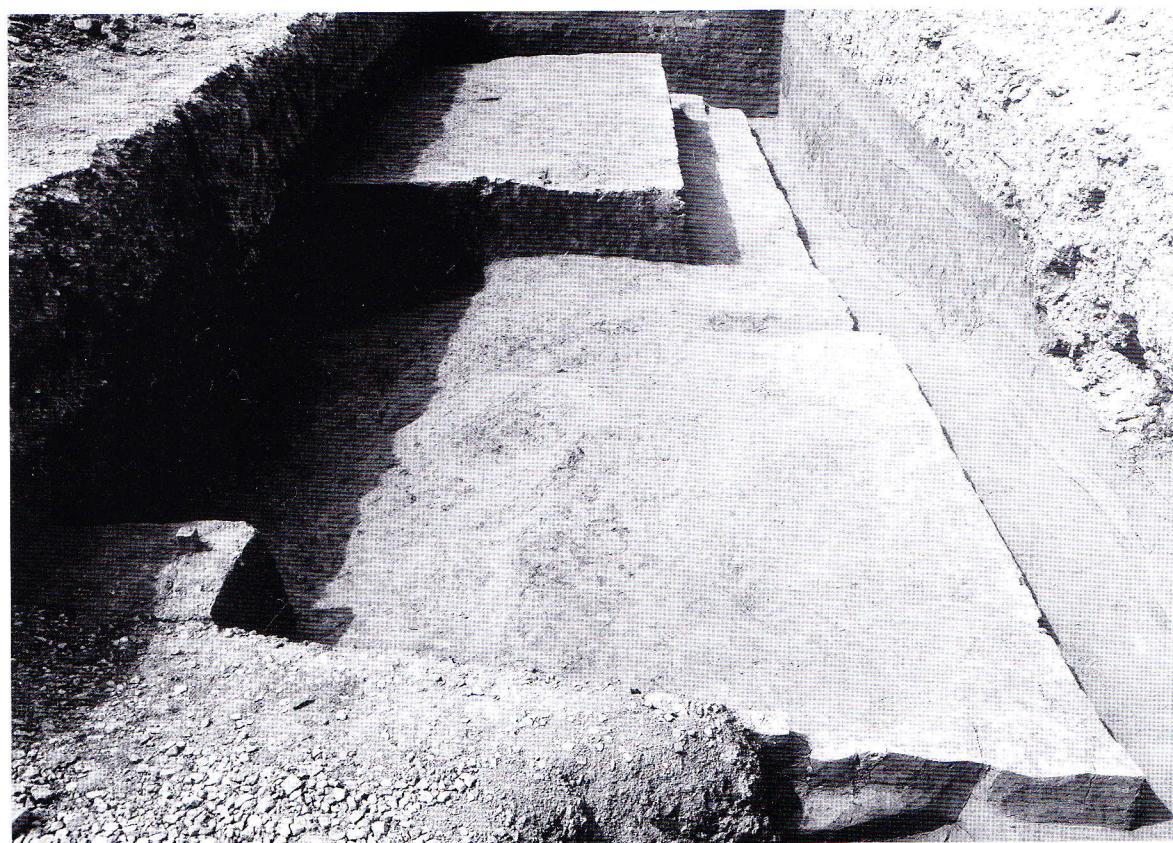


調査区全景(南から)





調査区全景(北から)



サブトレンチ3(南から)



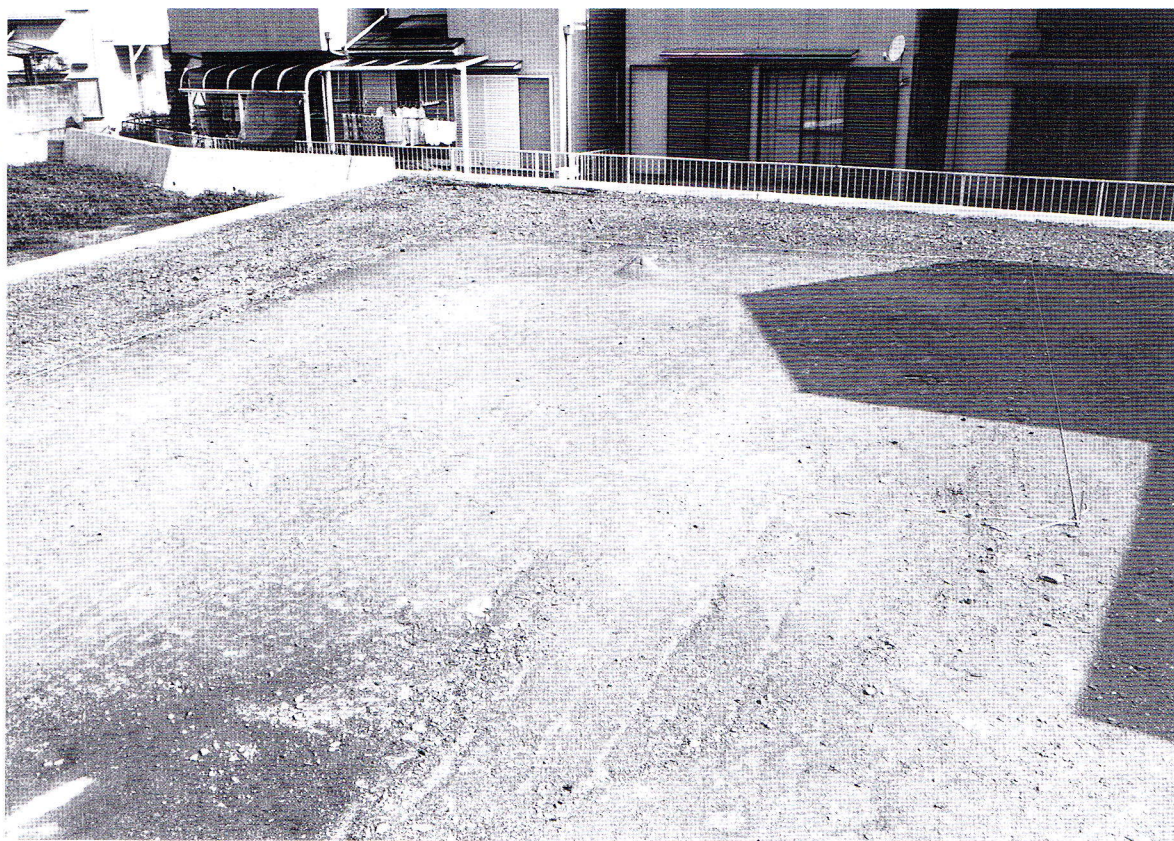


北壁土層堆積状況(南から)



東壁土層堆積状況(西から)



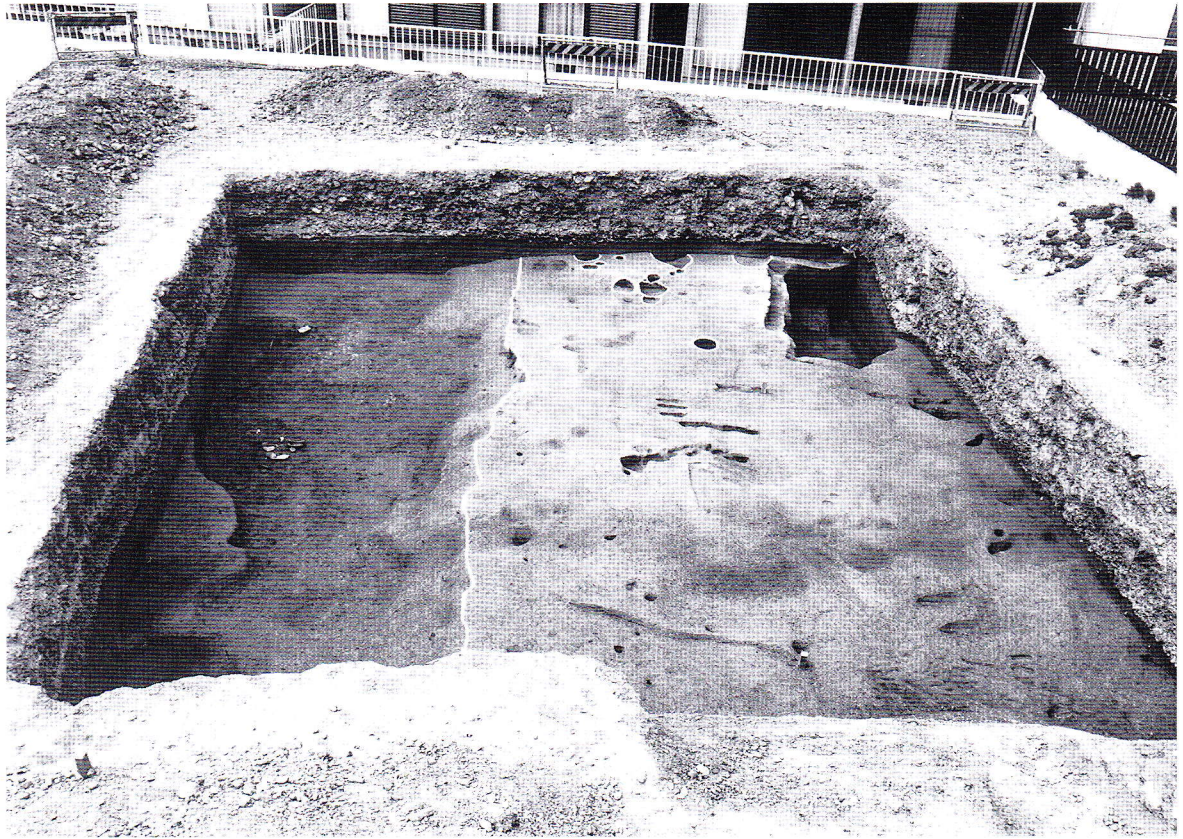


調査前の状況(南東から)

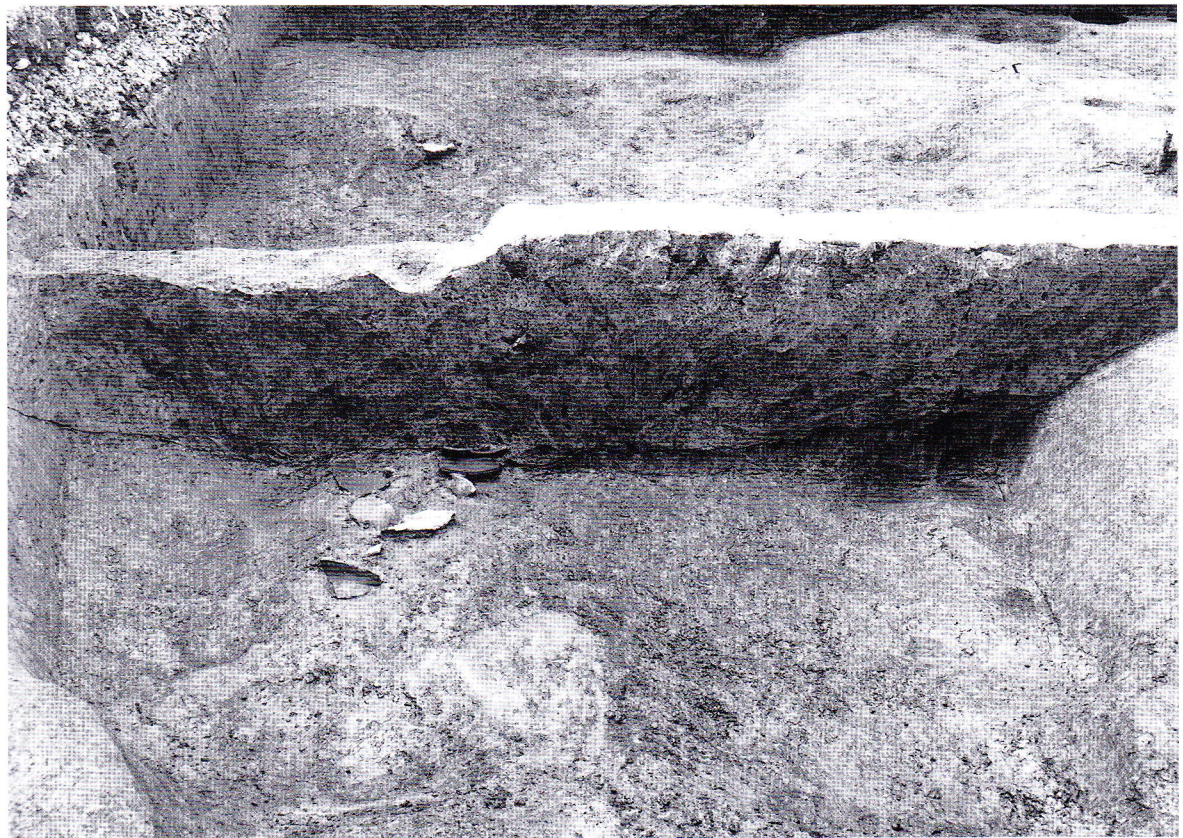


調査区全景(北から)





調査区全景(南から)



S X-1 土層堆積状況(南から)



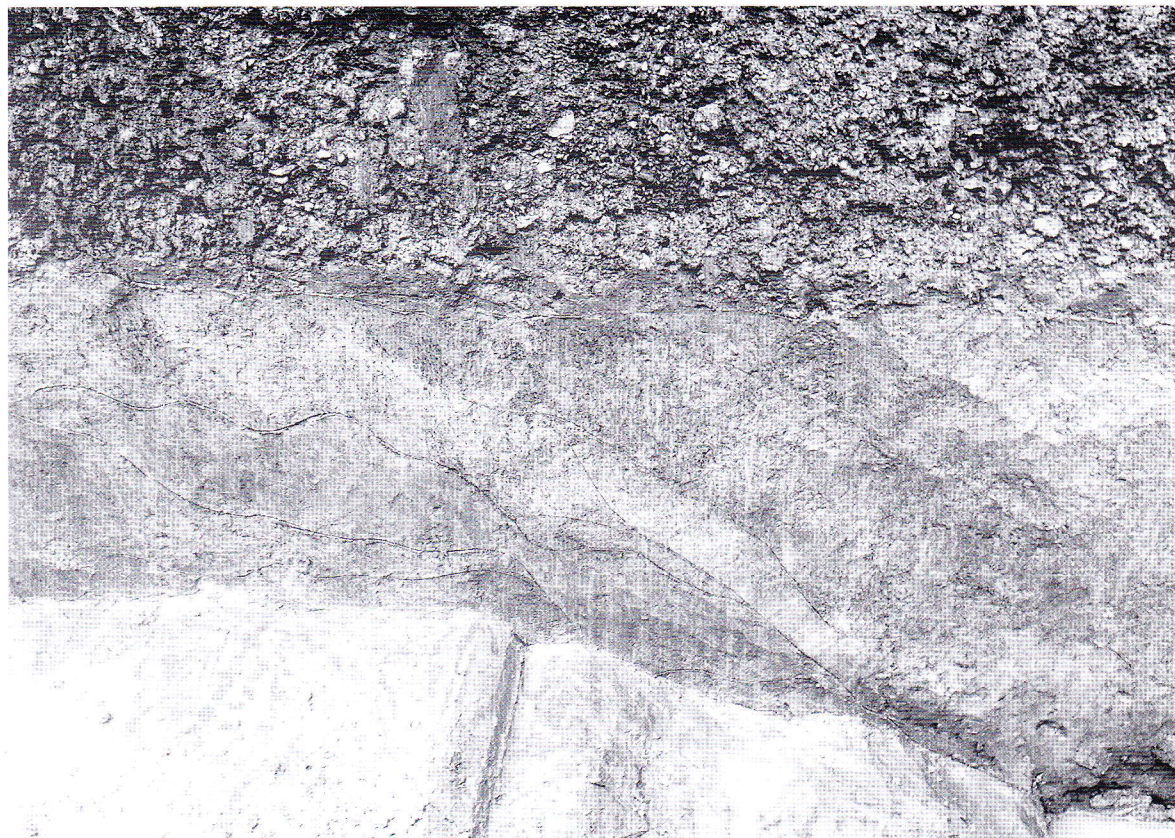


S X-2 検出状況(西から)



S X-2 検出状況(東から)



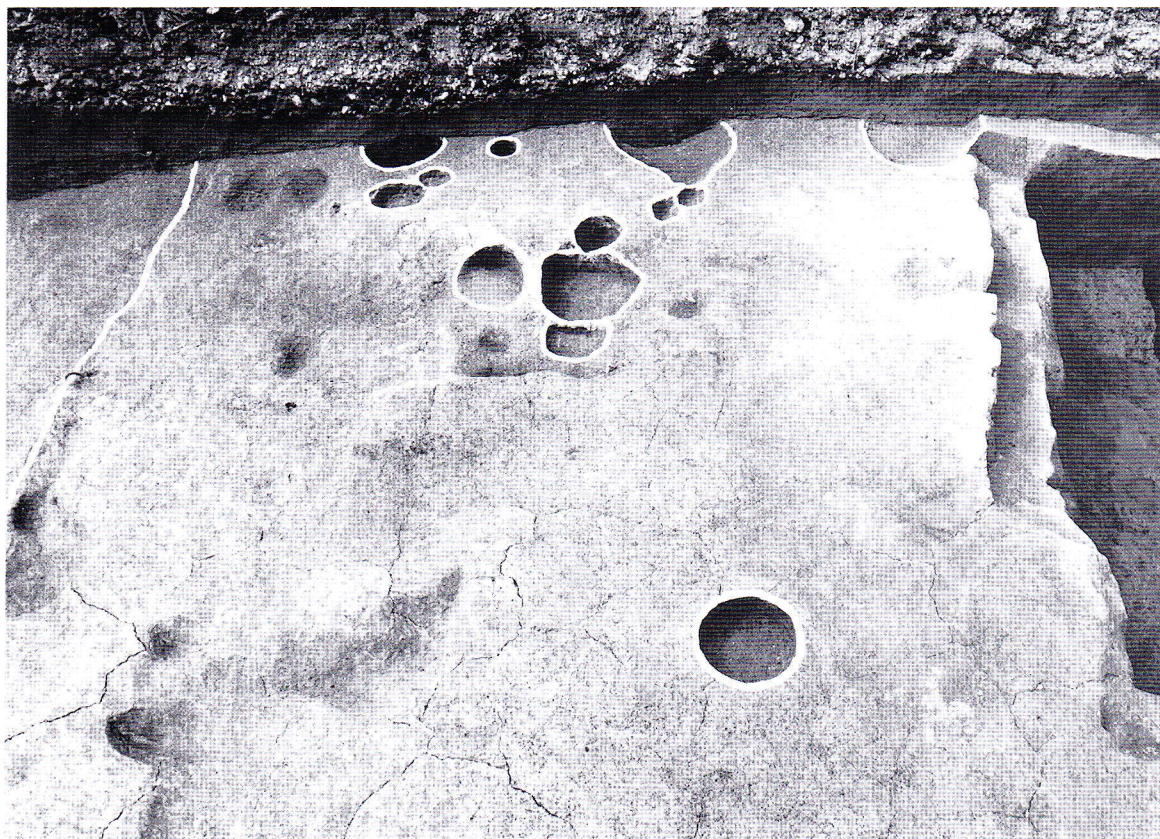


S X-2 土層堆積状況(西から)

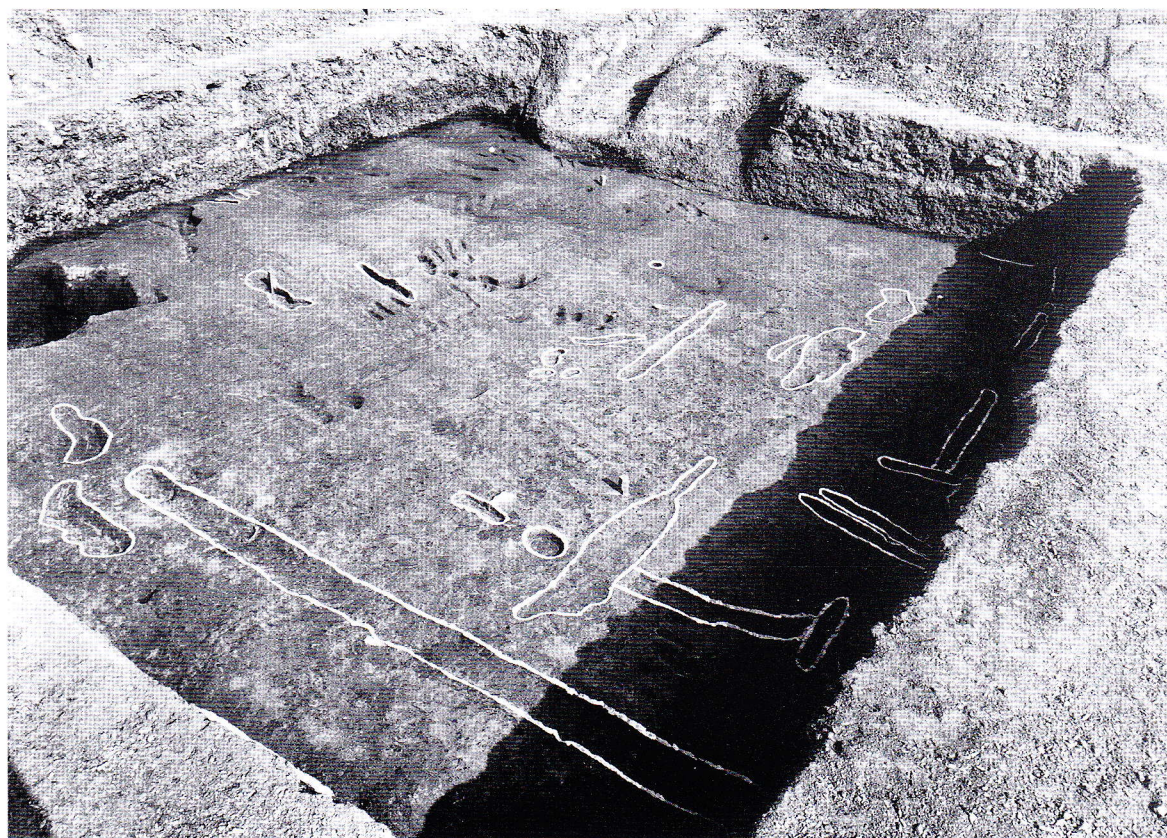


S X-2 土層堆積状況(東から)



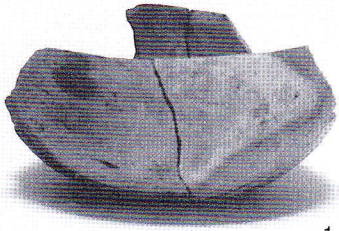


ピット群(南から)



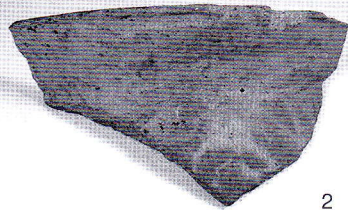
調査地全景(近世末～近代)(北西から)





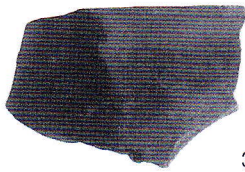
1

土師器 1 杯



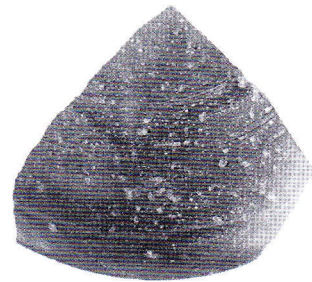
2

土師器 2 甕



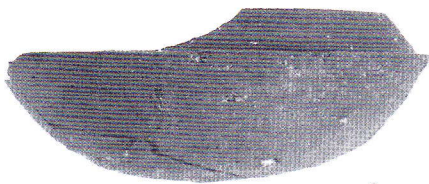
3

土師器 3 甕



5

須恵器 5 杯蓋



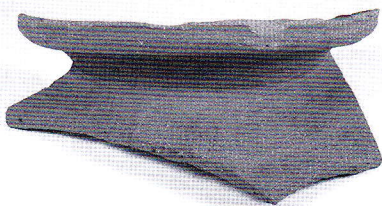
8

須恵器 8 杯身



14

須恵器 14 甕



16

須恵器 16 甕



17

土製器 17 紡錘車



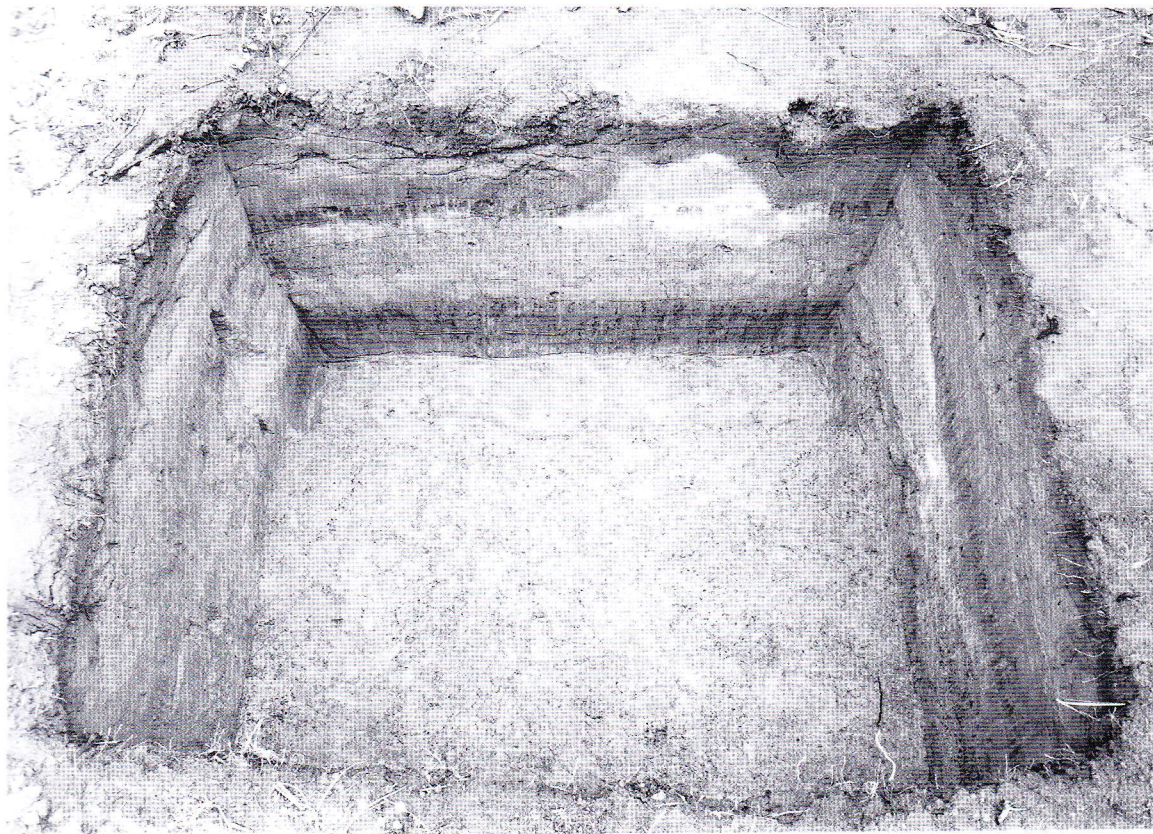


調査前の状況(南西から)



調査区近景(北西から)





1-1区 全景(南から)

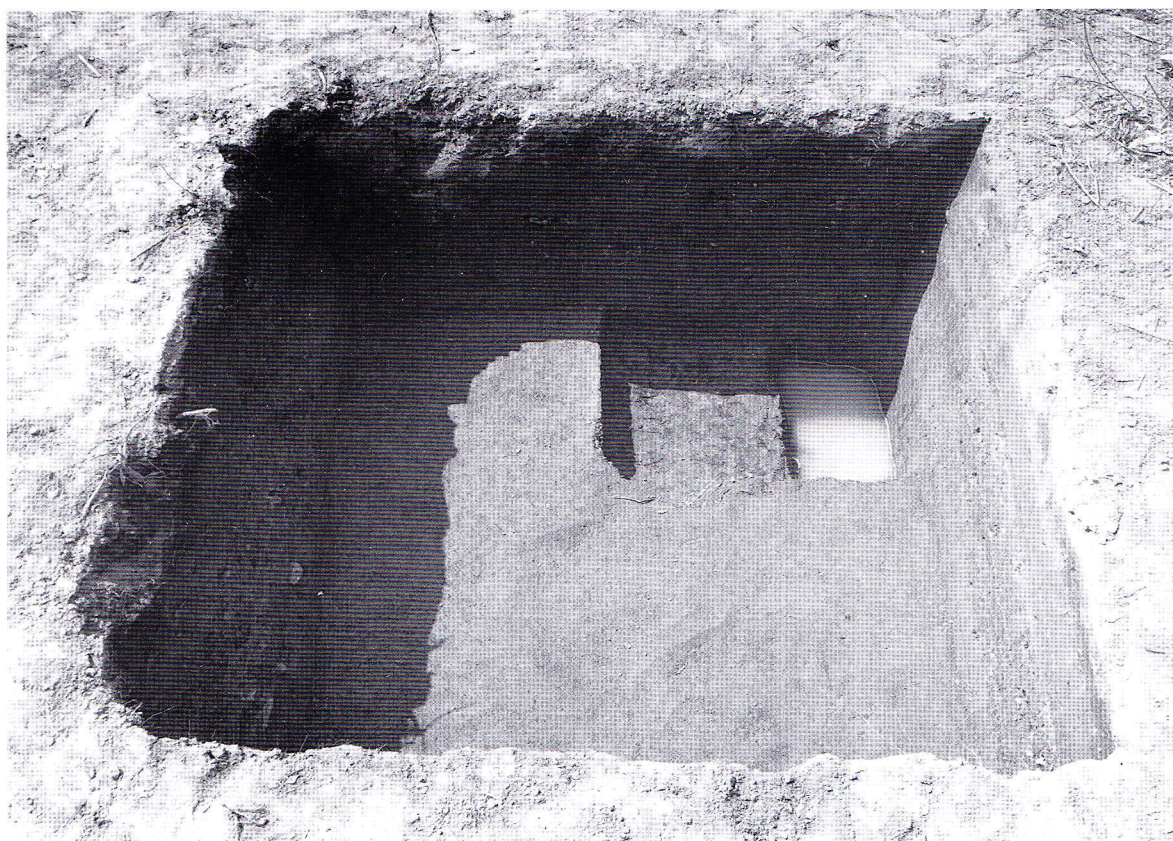


1-2区 全景(南から)



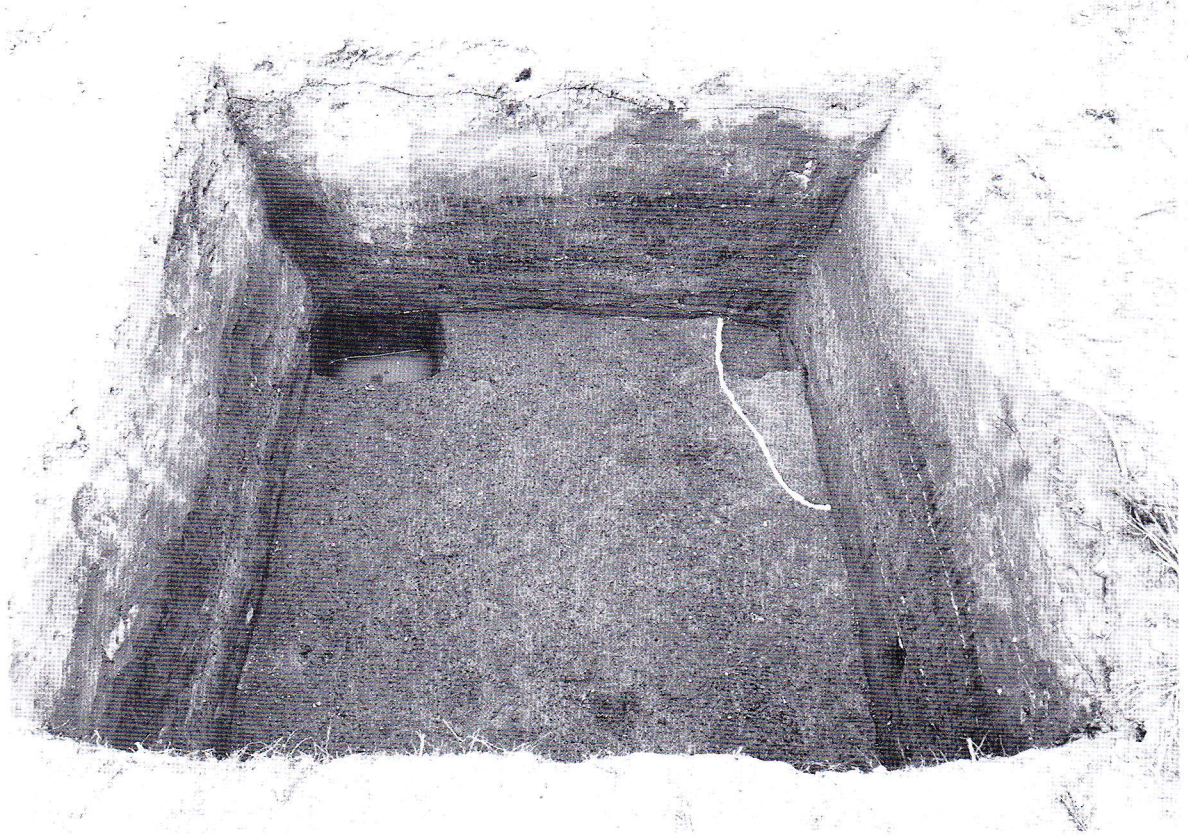


1-3区 全景(南から)

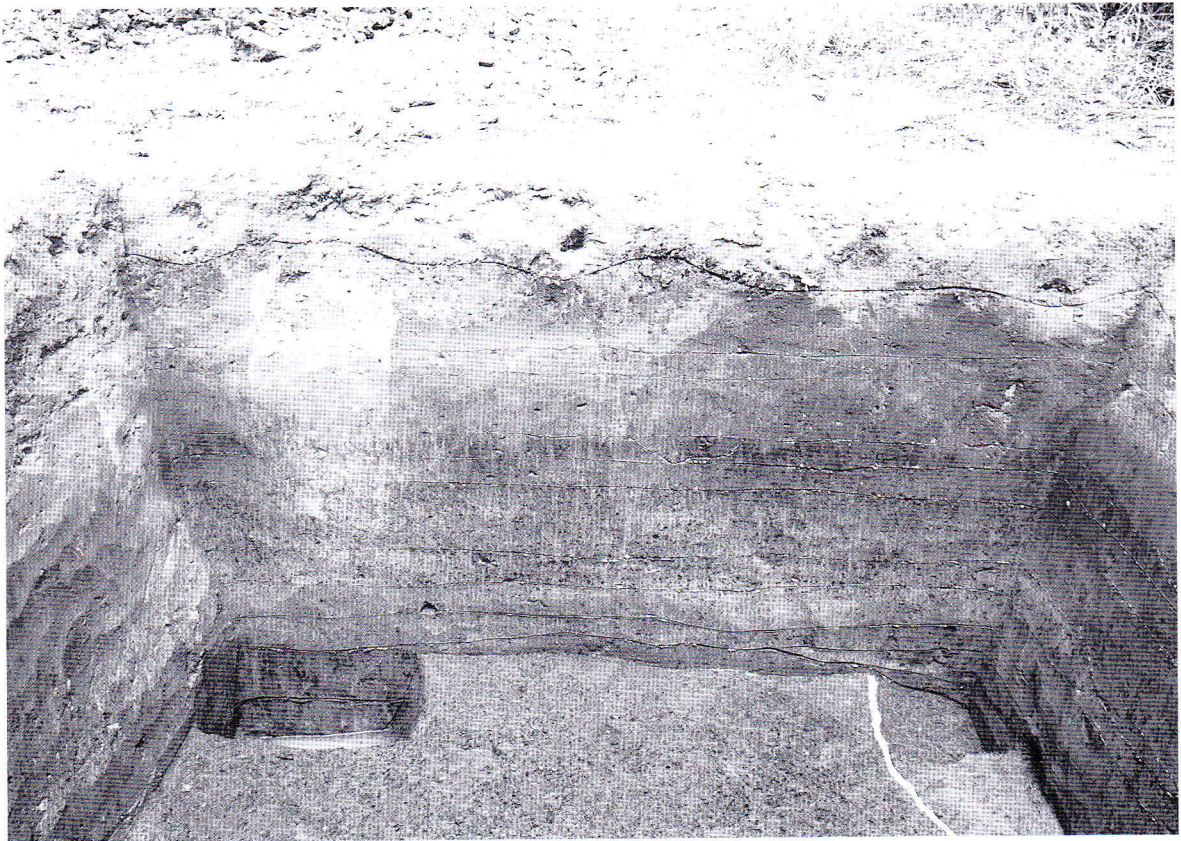


1-4区 全景(東から)





1-5区 全景(南から)

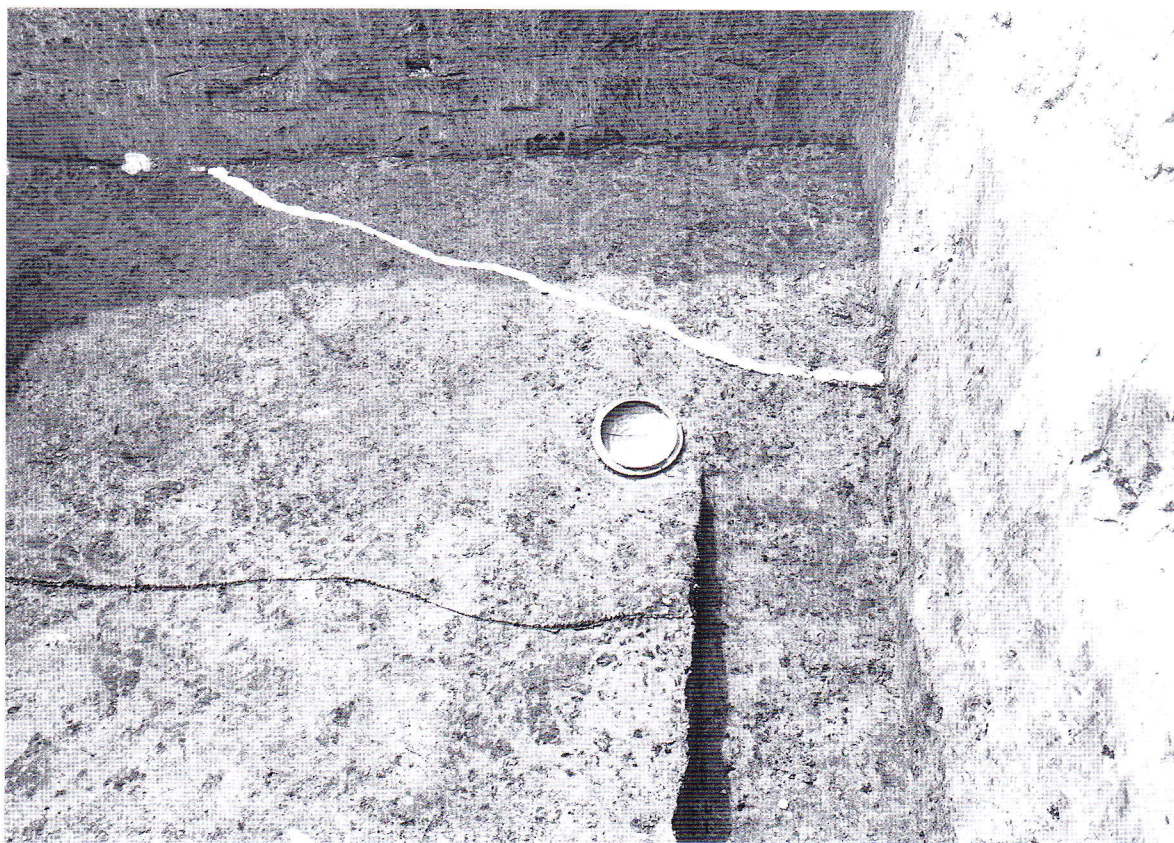


1-5区 北壁及びSK-1土層堆積状況(南から)



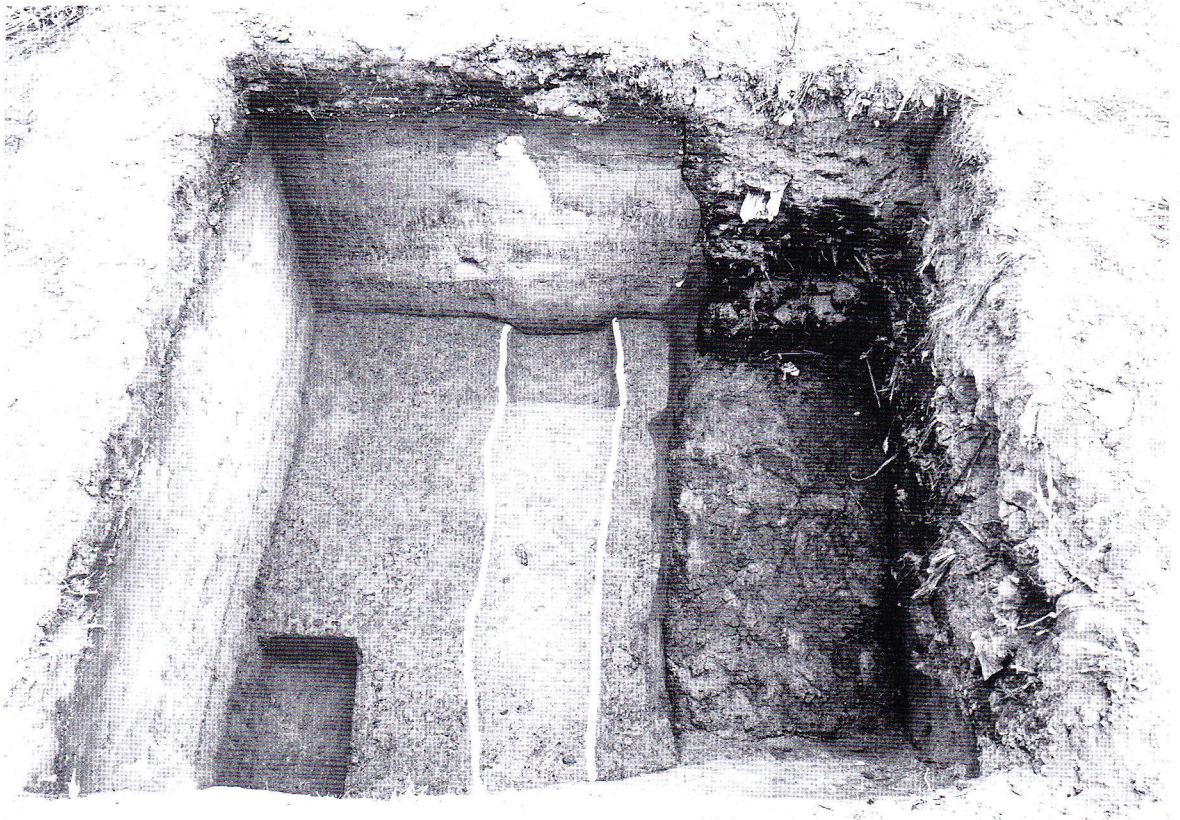


1-6区 全景(西から)



1-6区 SK-3須恵器出土状況(北から)





1-7区 全景(西から)



1-7区 東壁及びSD-1土層堆積状況(西から)



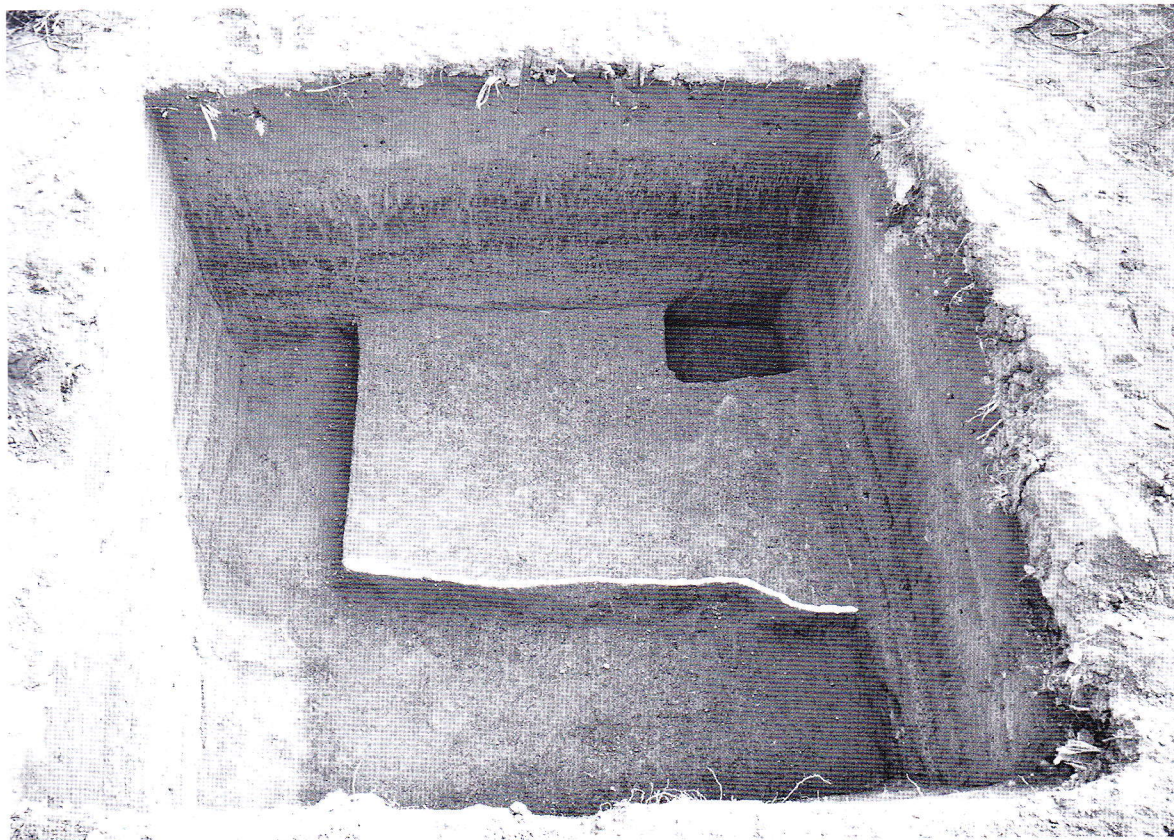


1-8区 全景(北から)

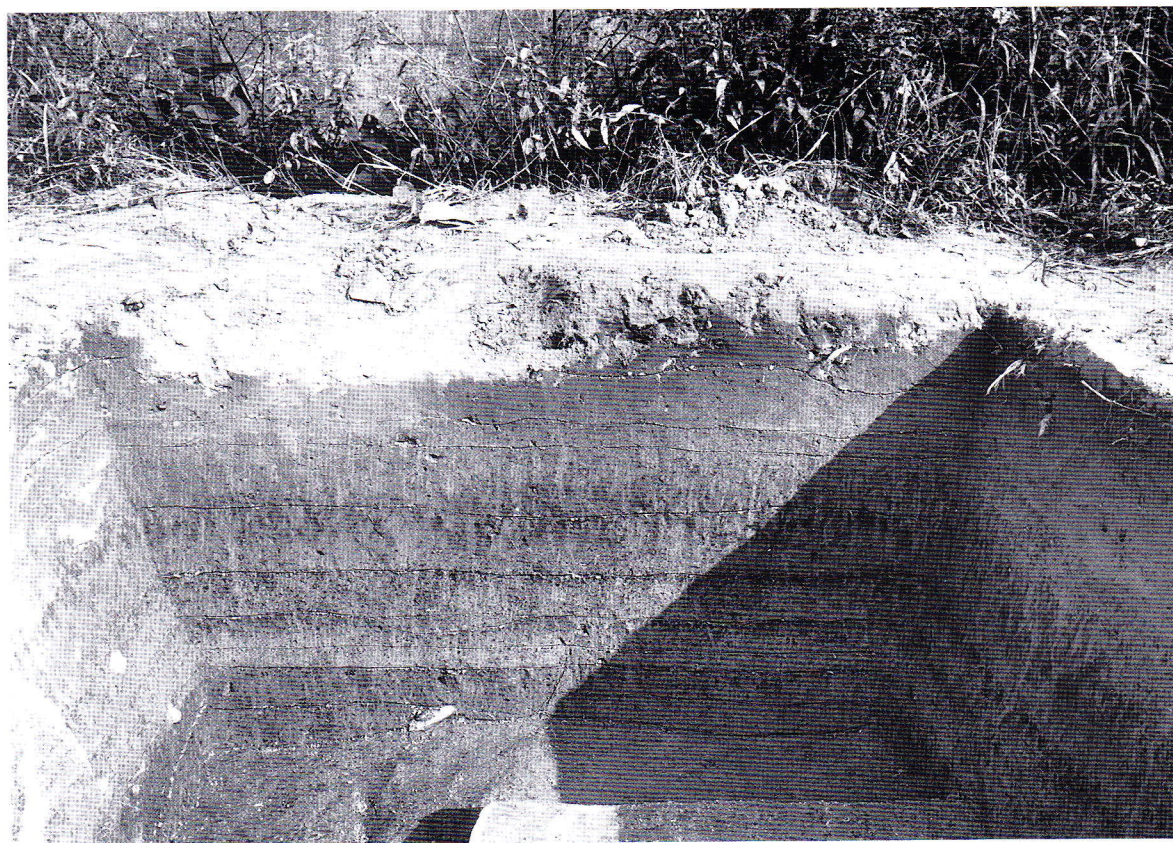


1-8区 東壁及びS X-4土層堆積状況(西から)





1-9区 全景(北から)



1-9区 東壁及びSX-5・6土層堆積状況(西から)



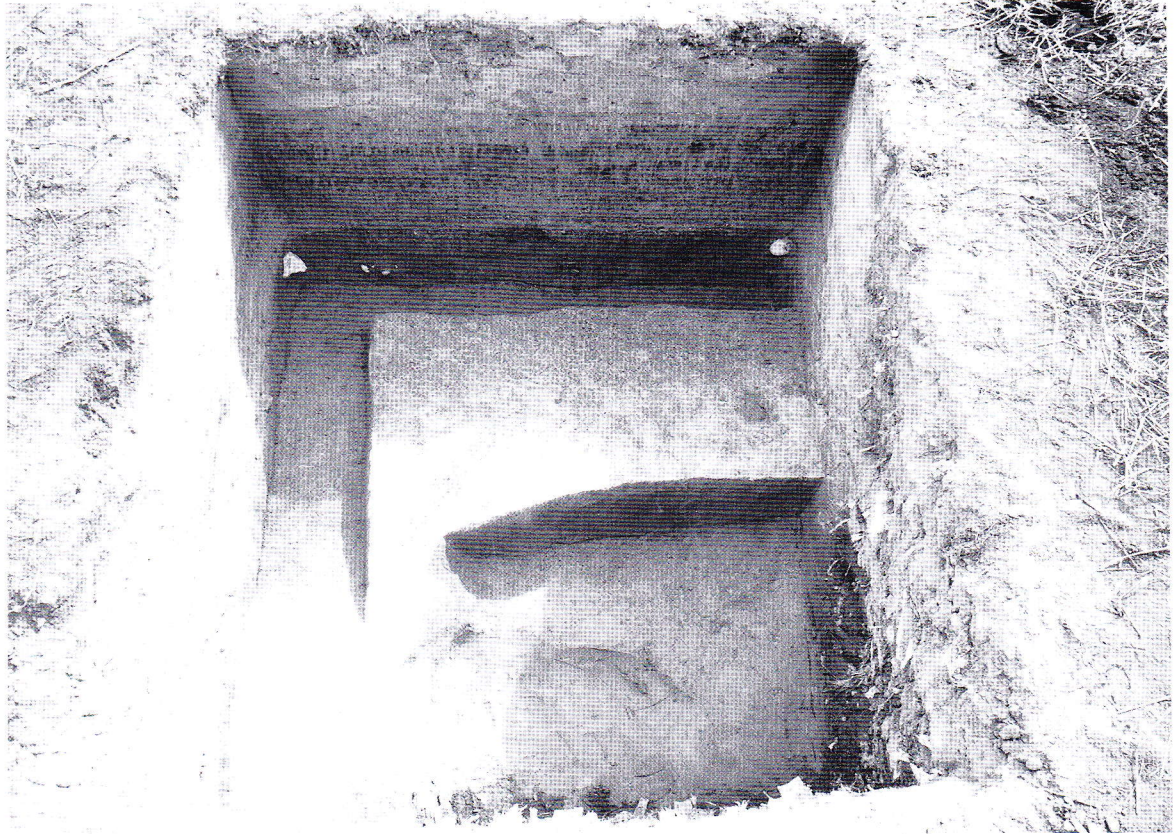


1-10区 全景(西から)



1-10区 東壁及びS X-7・8土層堆積状況(西から)



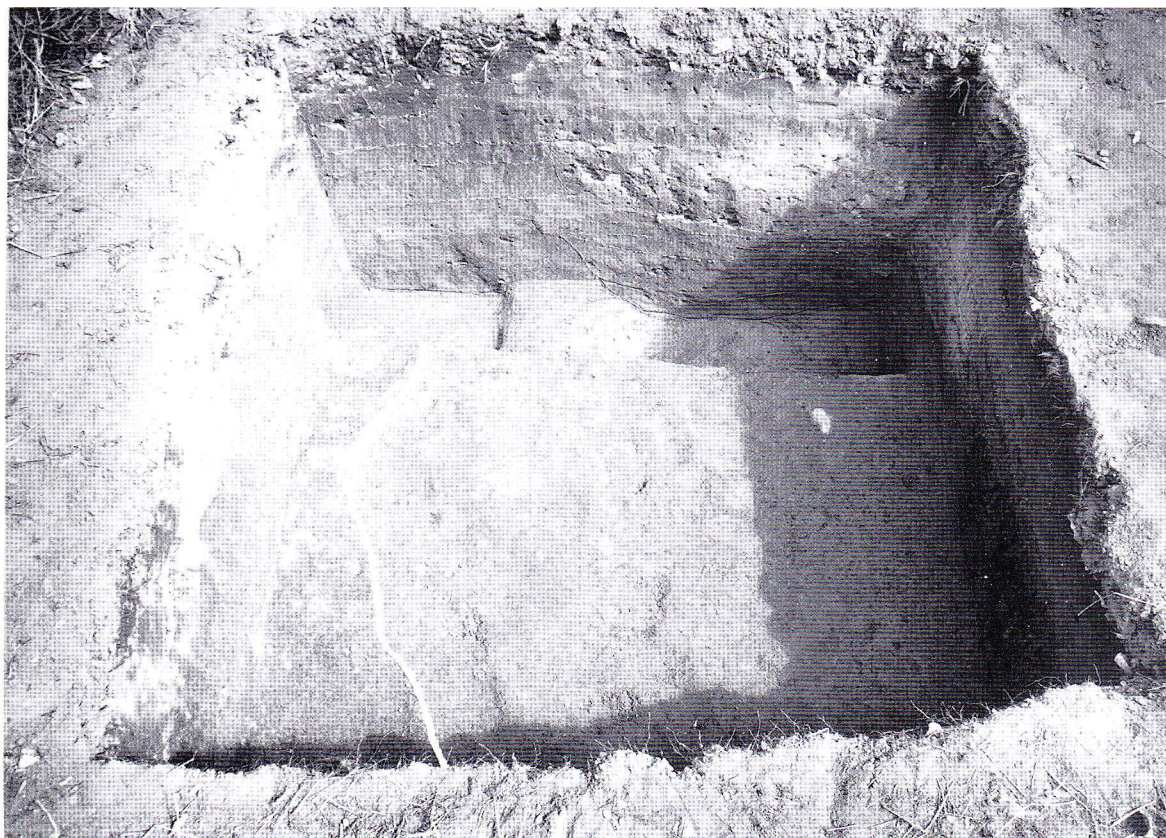


1-11区 全景(北から)



1-11区 東壁及びS X-9土層堆積状況(西から)



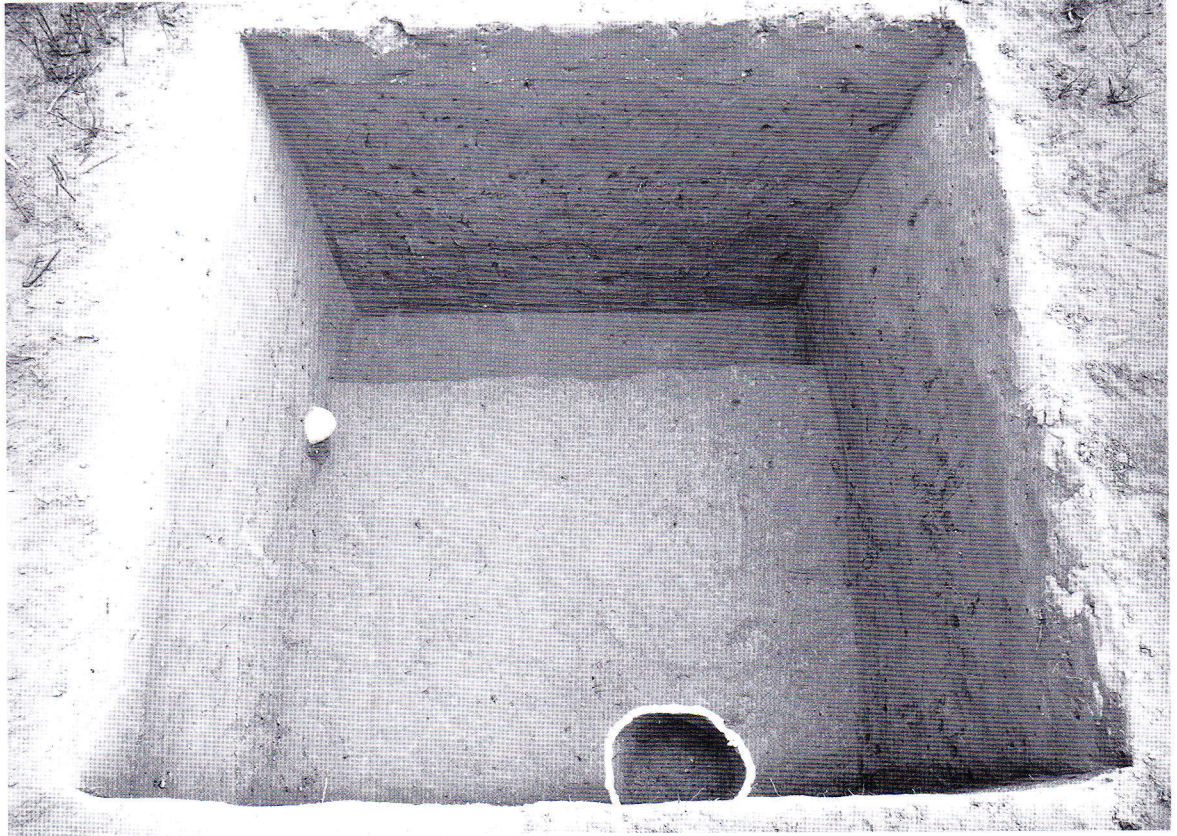


1-12区 全景(南から)



1-12区 北壁及びS X-1・2土層堆積状況(南から)



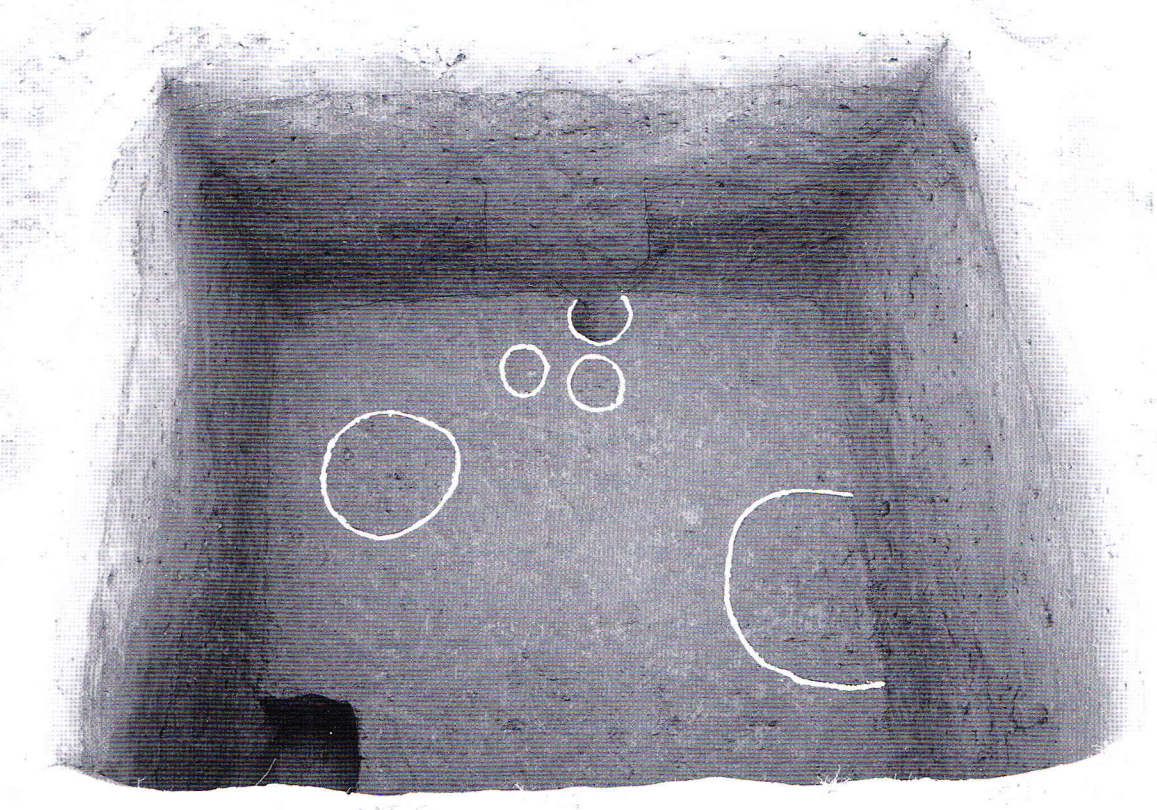


2-1区 全景(西から)

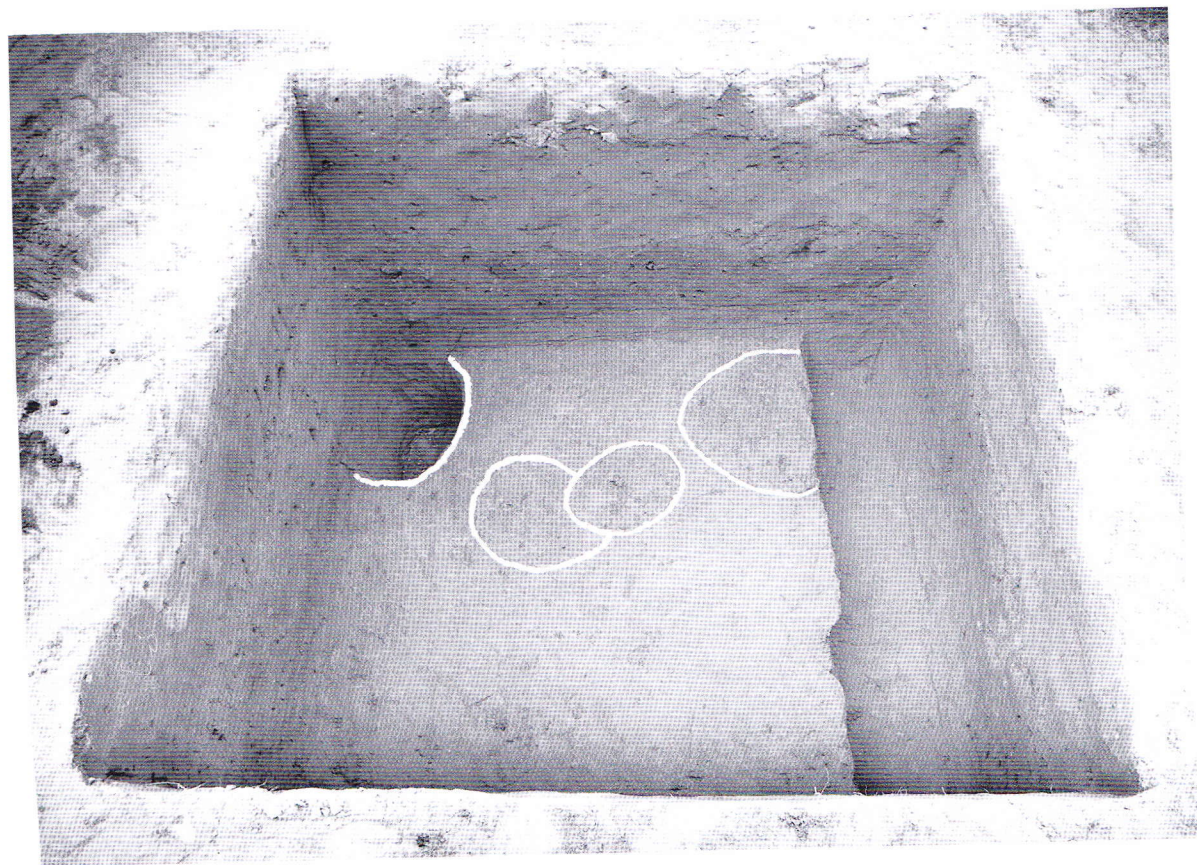


2-2区 全景(西から)





2-3区 全景(西から)



2-4区 全景(南から)





2-5区 全景(西から)

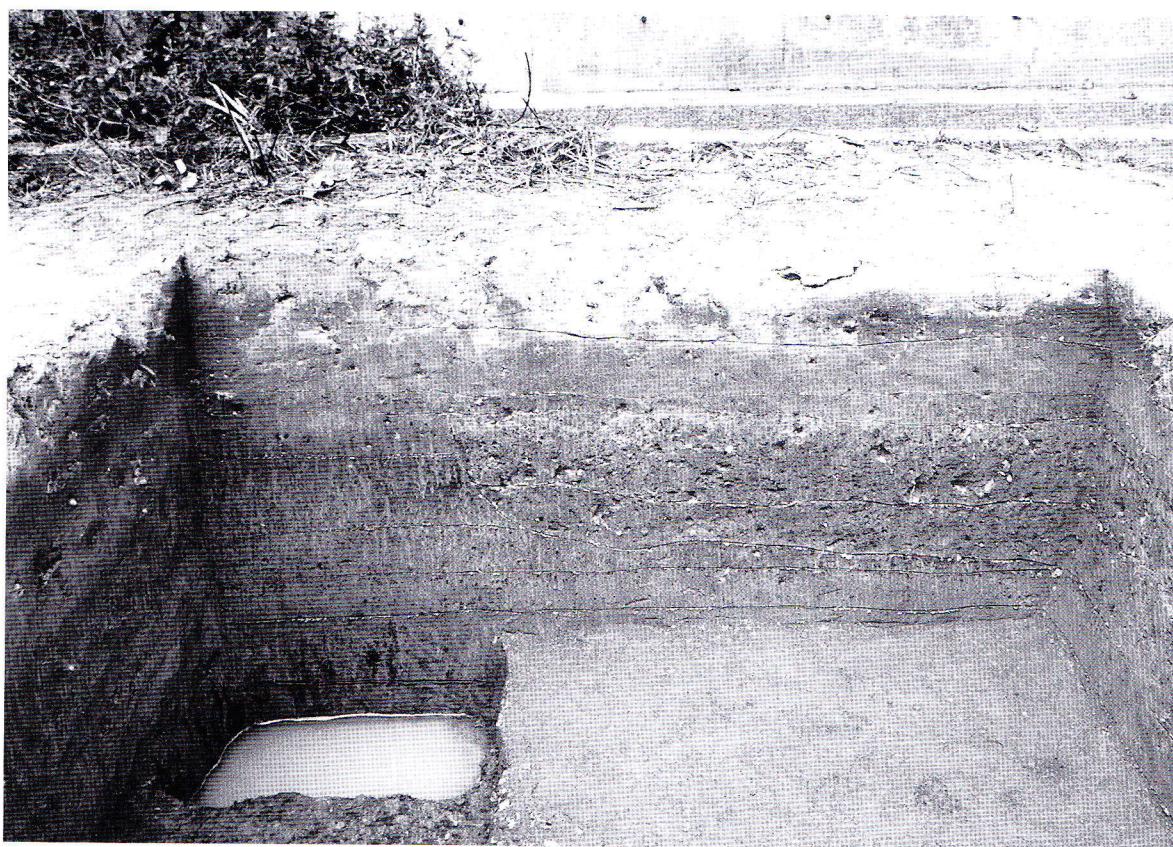


2-6区 全景(北から)



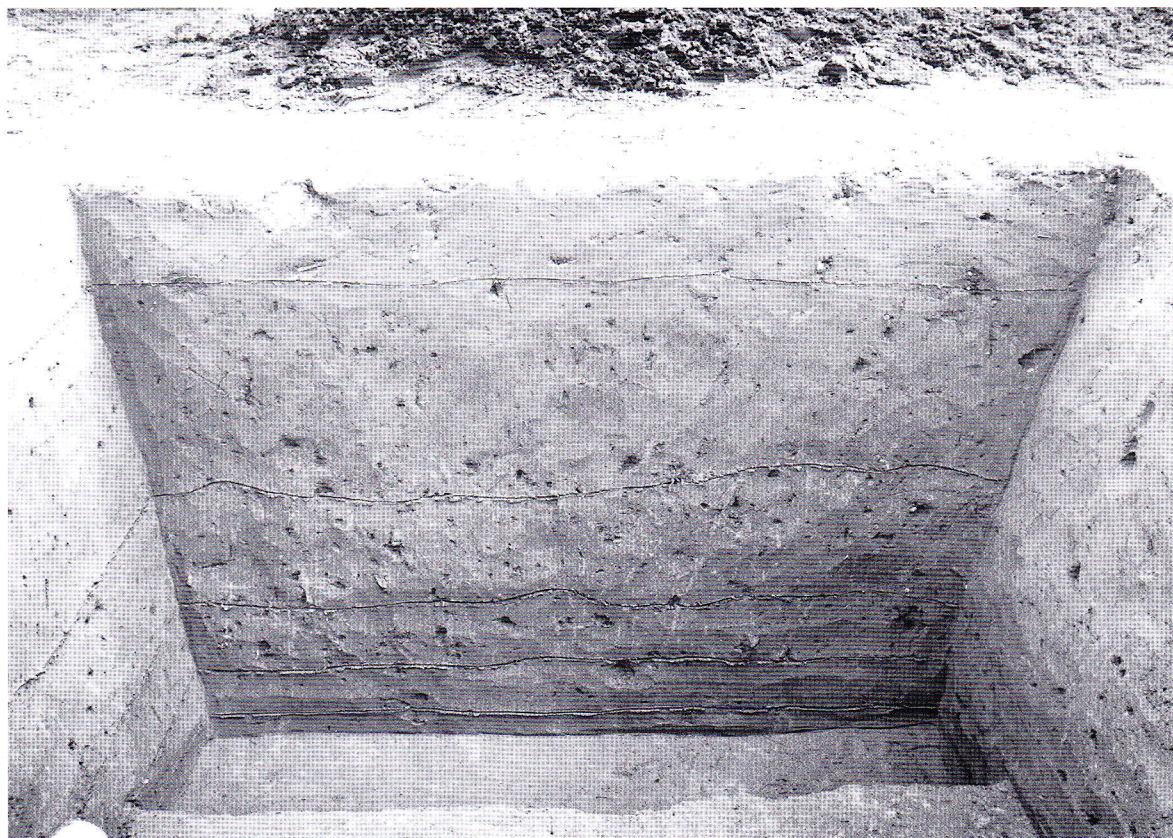


1-1区 東壁土層堆積状況(西から)



1-4区 北壁土層堆積状況(南から)



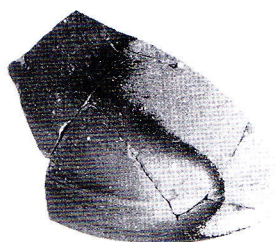


2-1区 東壁土層堆積状況(西から)



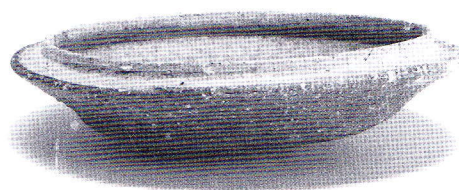
2-5区 北壁土層堆積状況(南から)





1

須恵器 1 杯蓋



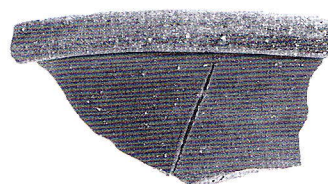
5

須恵器 5 杯身



6

須恵器 6 甕



8

須恵器 8 甕



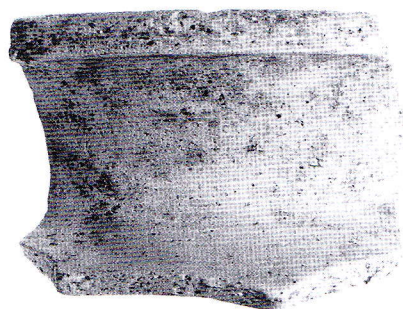
2



3



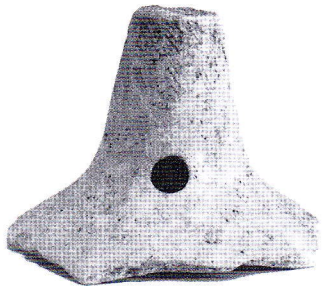
4



7

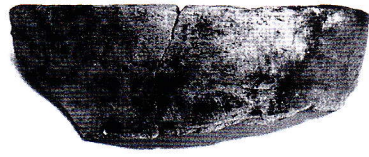
須恵器 2・3 杯蓋、4 杯身、7 甕





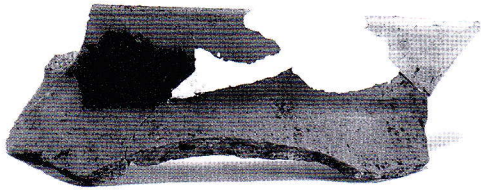
10

土師器 10高杯脚部



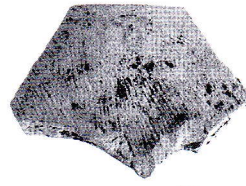
13

土師器 13甕

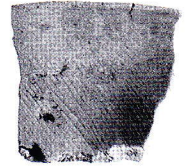


15

土師器 15甕



20



21

土師器 20・21甕



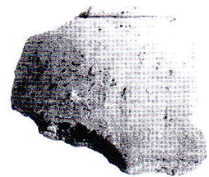
9



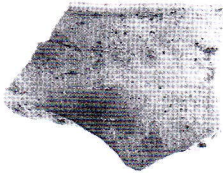
11



12



14



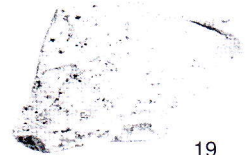
16



17



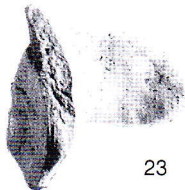
18



19



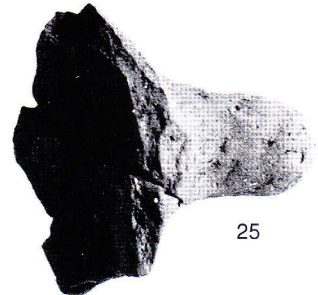
22



23



24



25

土師器 9 高杯、11・12壺、14・16～19甕、22～25把手



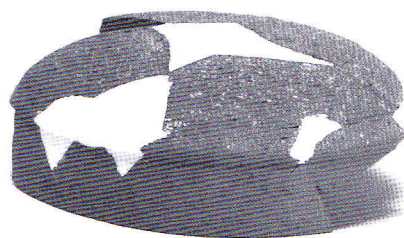


26



27

須恵器 26・27杯蓋



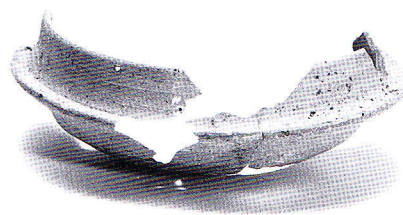
28

須恵器 28杯蓋



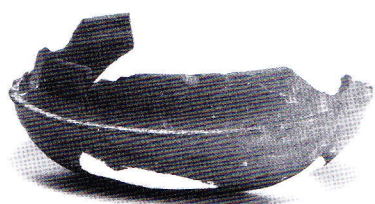
29

須恵器 29杯身



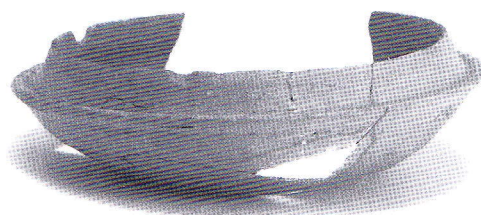
30

須恵器 30杯身



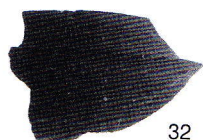
31

須恵器 31杯身



33

須恵器 33杯身



32

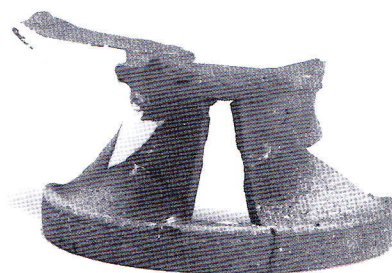


35



34

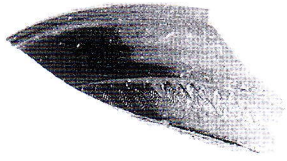
須恵器 32・34杯身、35有蓋高杯蓋



36

須恵器 36高杯脚部





39

須恵器 39甕



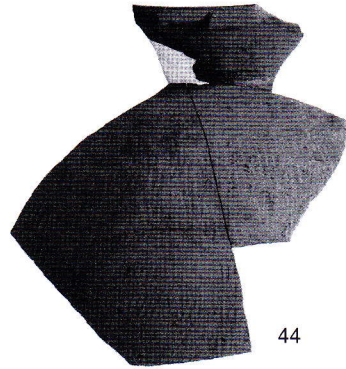
40

須恵器 40甕



43

須恵器 43甕

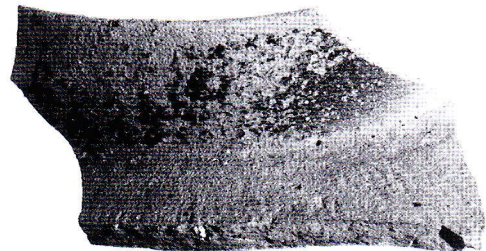


44

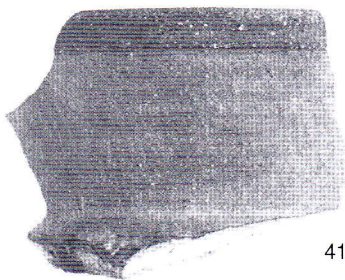
須恵器 44甕



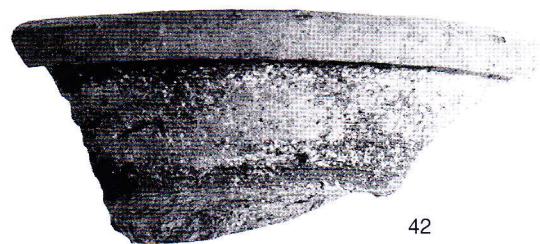
37



38



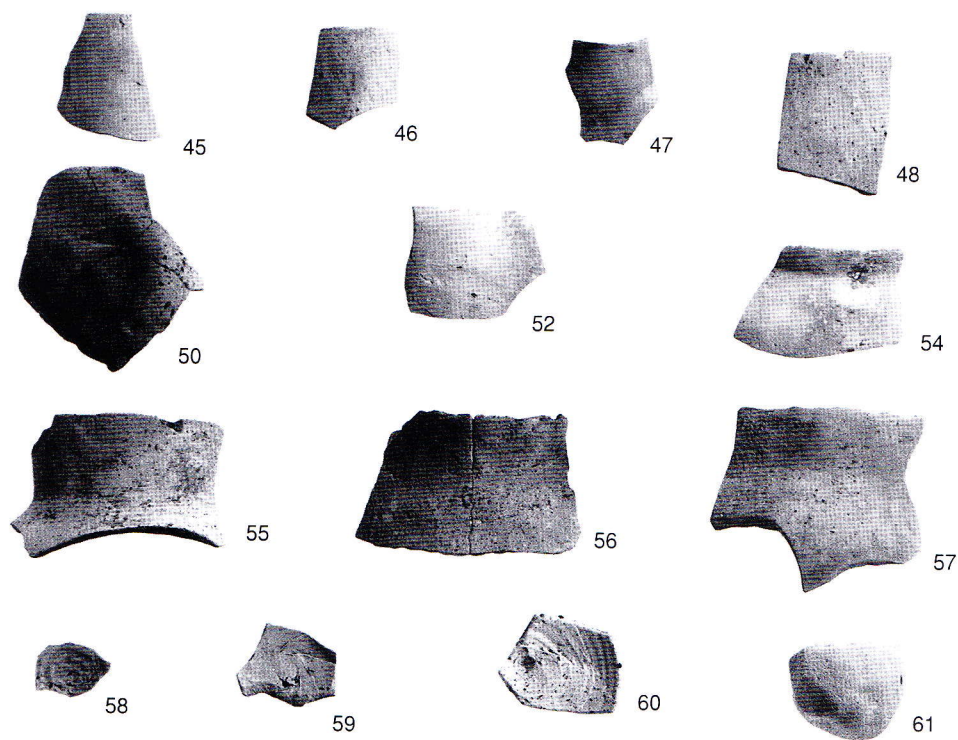
41



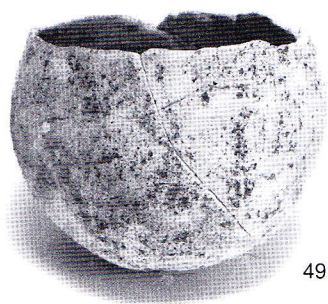
42

須恵器 37・38壺、41・42甕

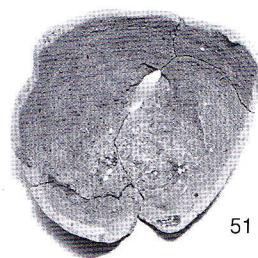




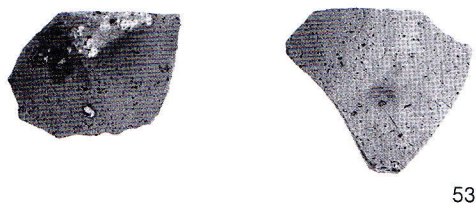
製塩土器 45～48・50・52・54～57口縁部、58～60内底面、61底部



製塩土器 49



製塩土器 51内面

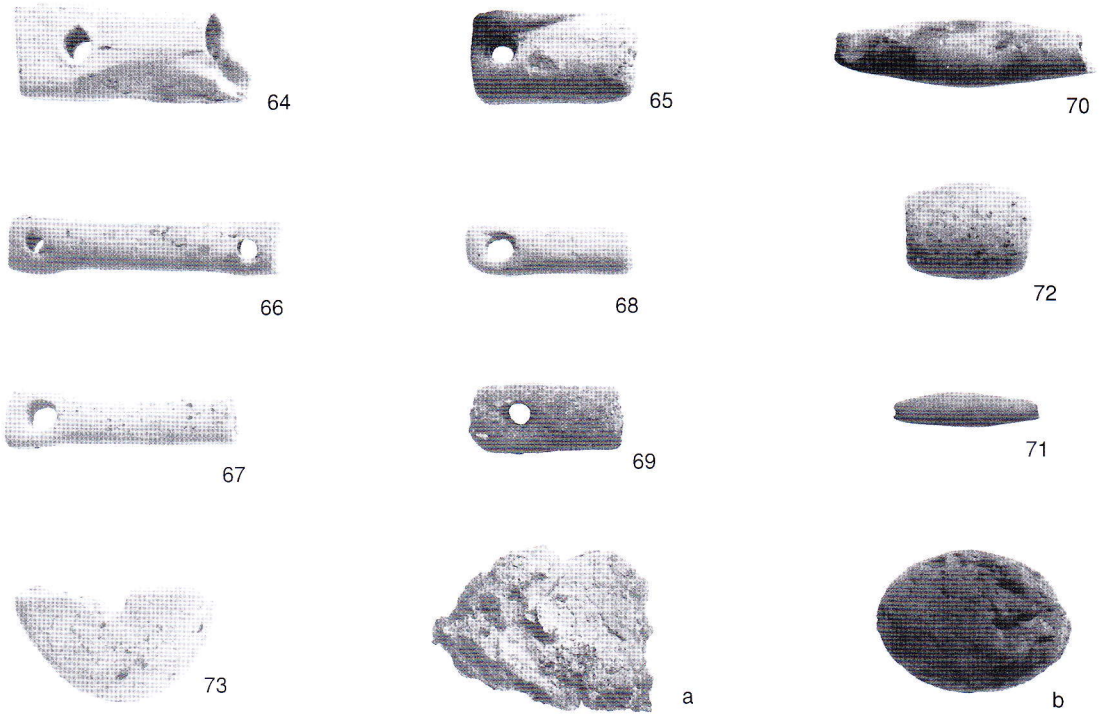


製塩土器 53左口縁部、右底部

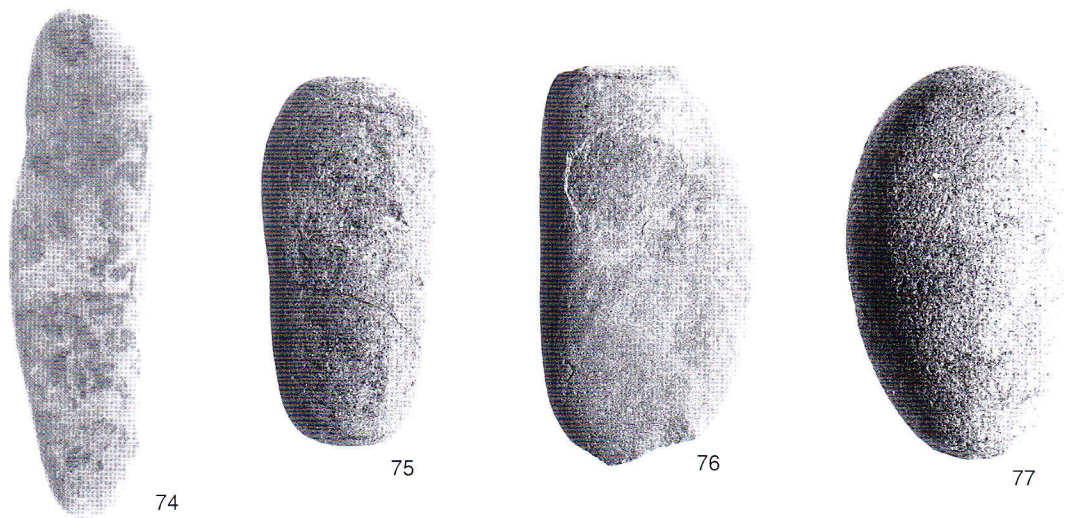


中国製磁器 62白磁碗、63青磁皿





土製品 64～69有孔土錘、70～72管状土錘、73紡錘車、a フイゴ 自然石 b 軽石



石器 74～77叩石





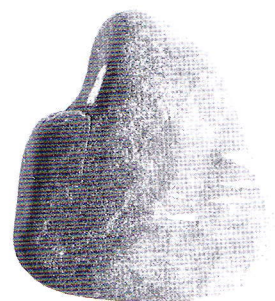
78



79



80



81

石器 78~81叩石



82



83



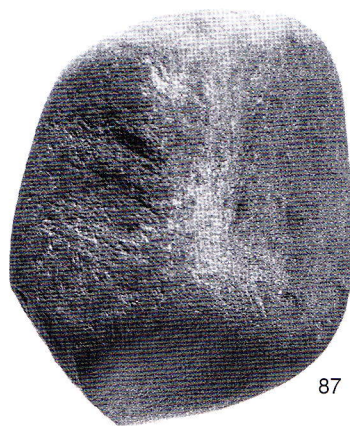
84



85



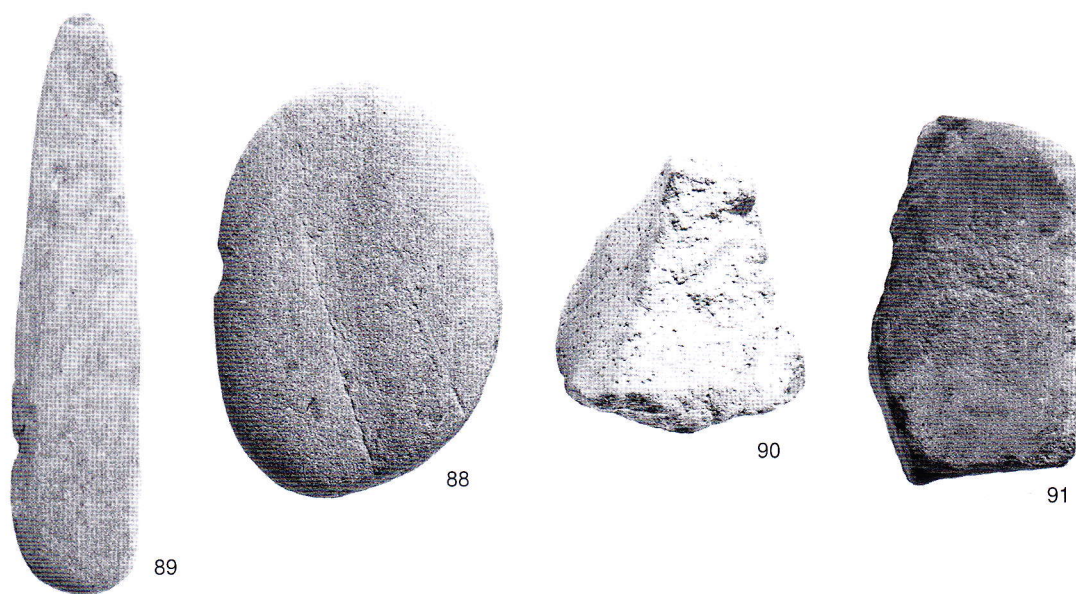
86



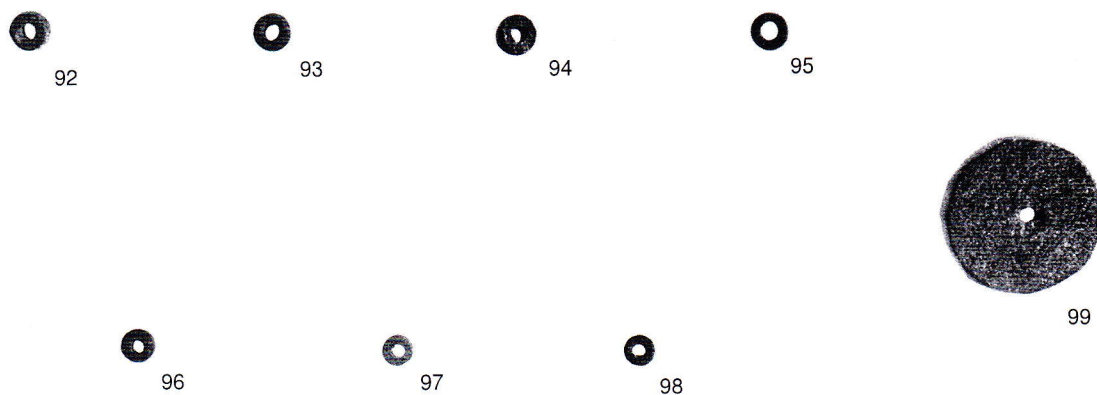
87

石器 82~84叩石、85~87磨石





石器 88石錘、89棒状品、石製品 90・91砥石



石製品 92～98白玉、99有孔円板





調査前の状況(北から)



調査前の状況(南から)





グリッド1全景(南から)



グリッド1土層堆積状況(南から)





グリッド2全景(南から)

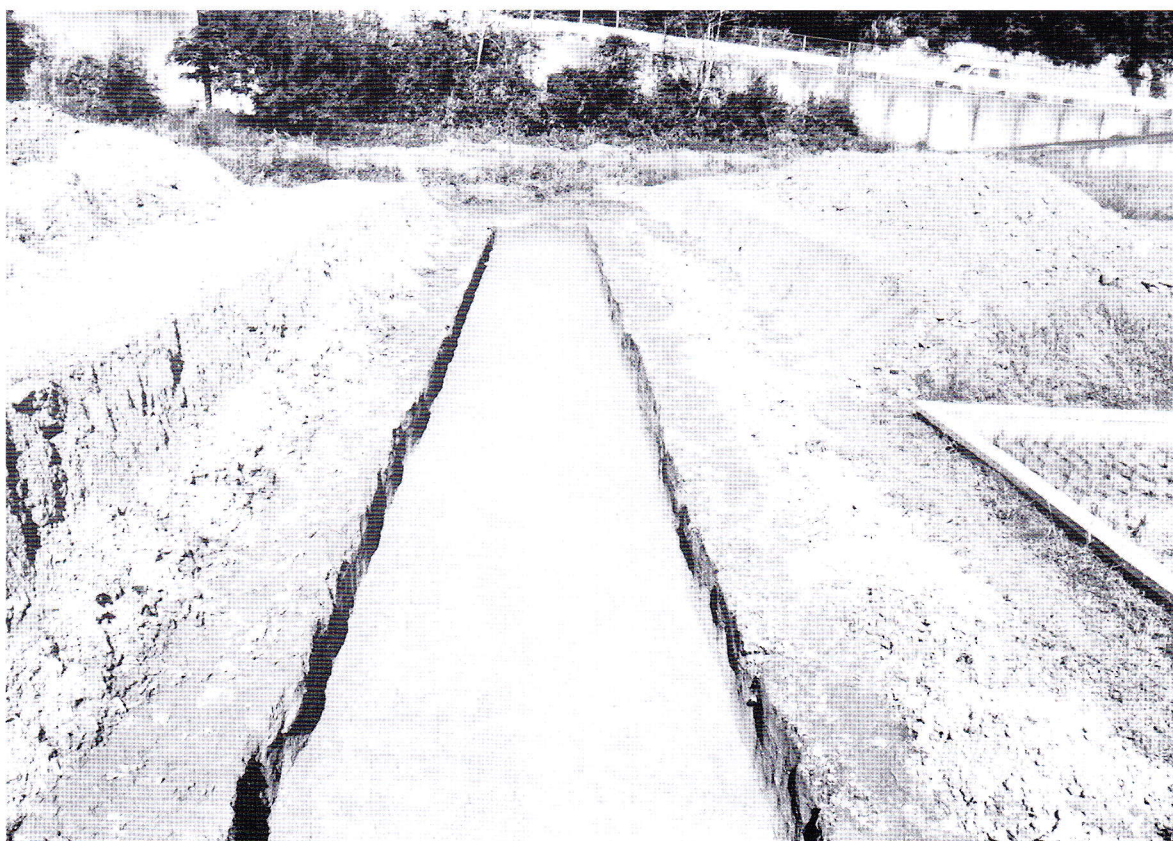


グリッド2土層堆積状況(東から)





トレンチ全景(北から)



トレンチ全景(南から)



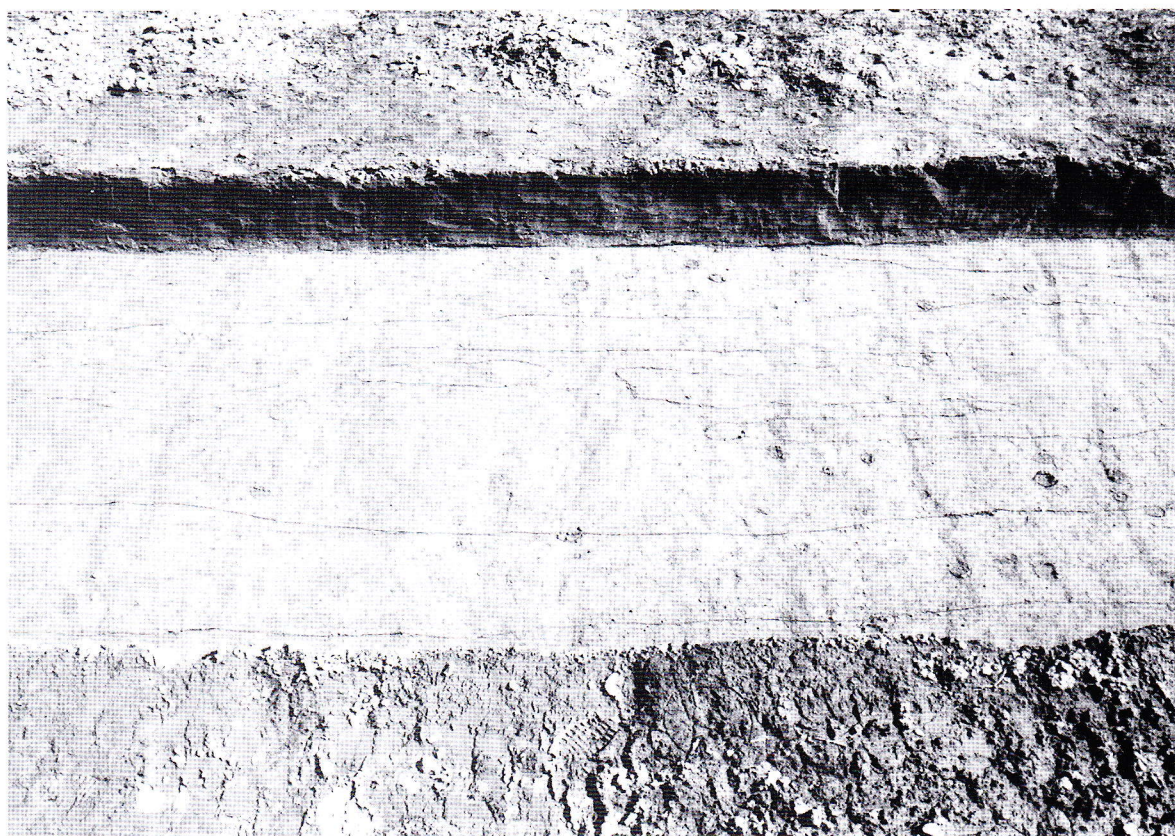


トレンチS 2 m付近 第5層上面検出遺構(西から)



トレンチS 15m付近 第5層上面検出遺構(西から)



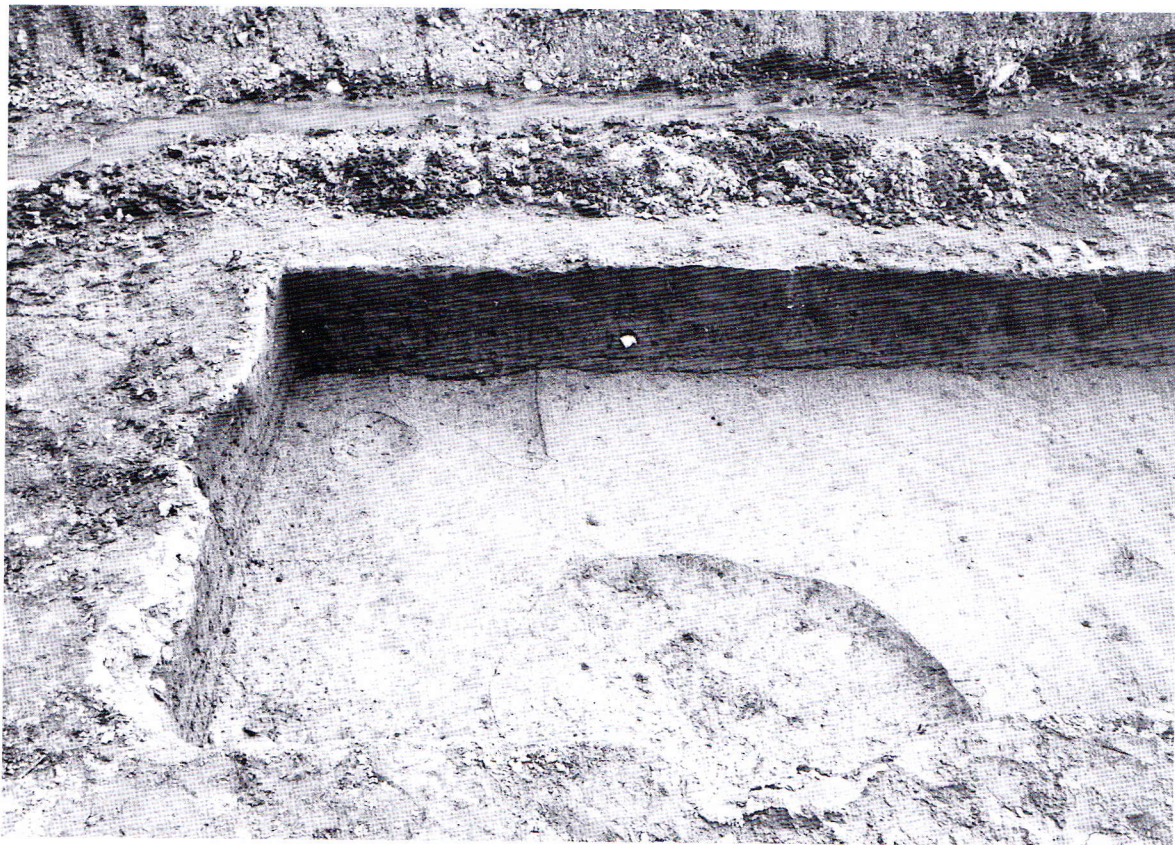


トレンチ S40m付近 第5層上面検出遺構(西から)

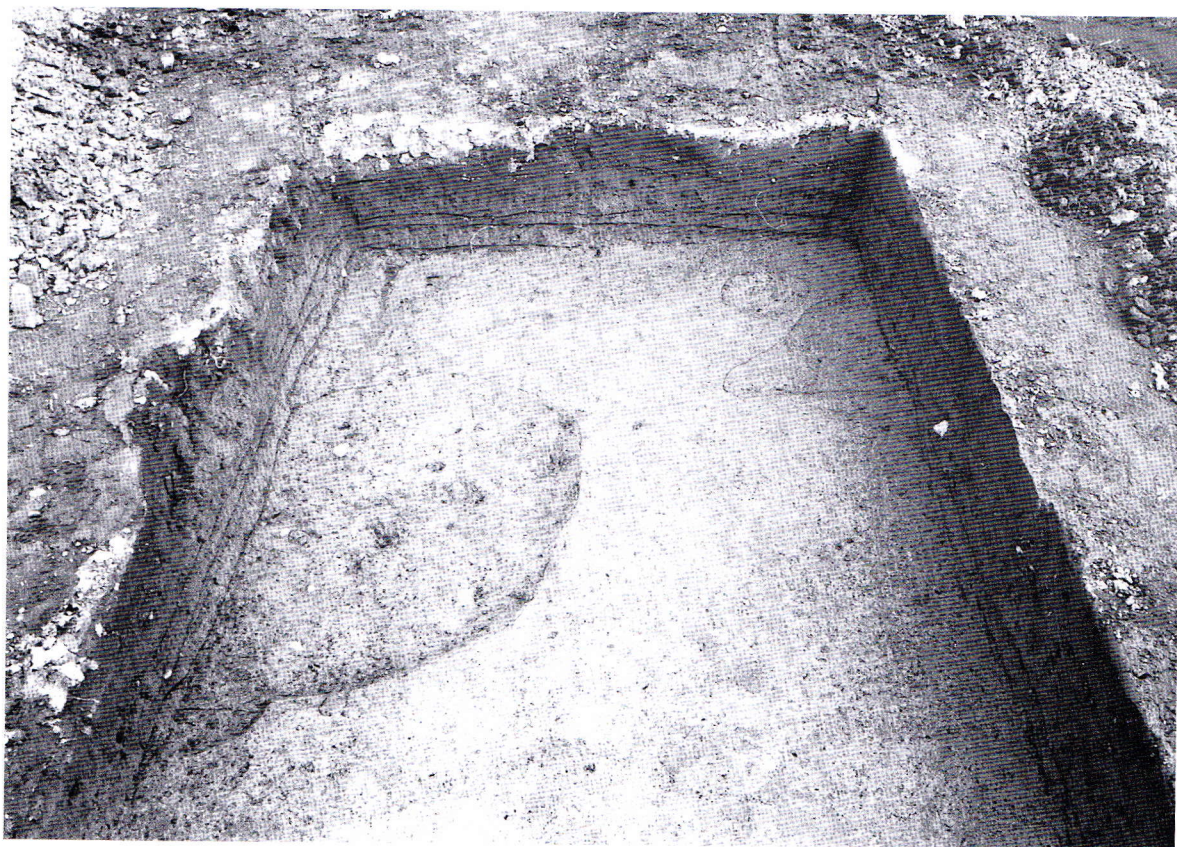


トレンチ S60m付近 第5層上面検出遺構(西から)



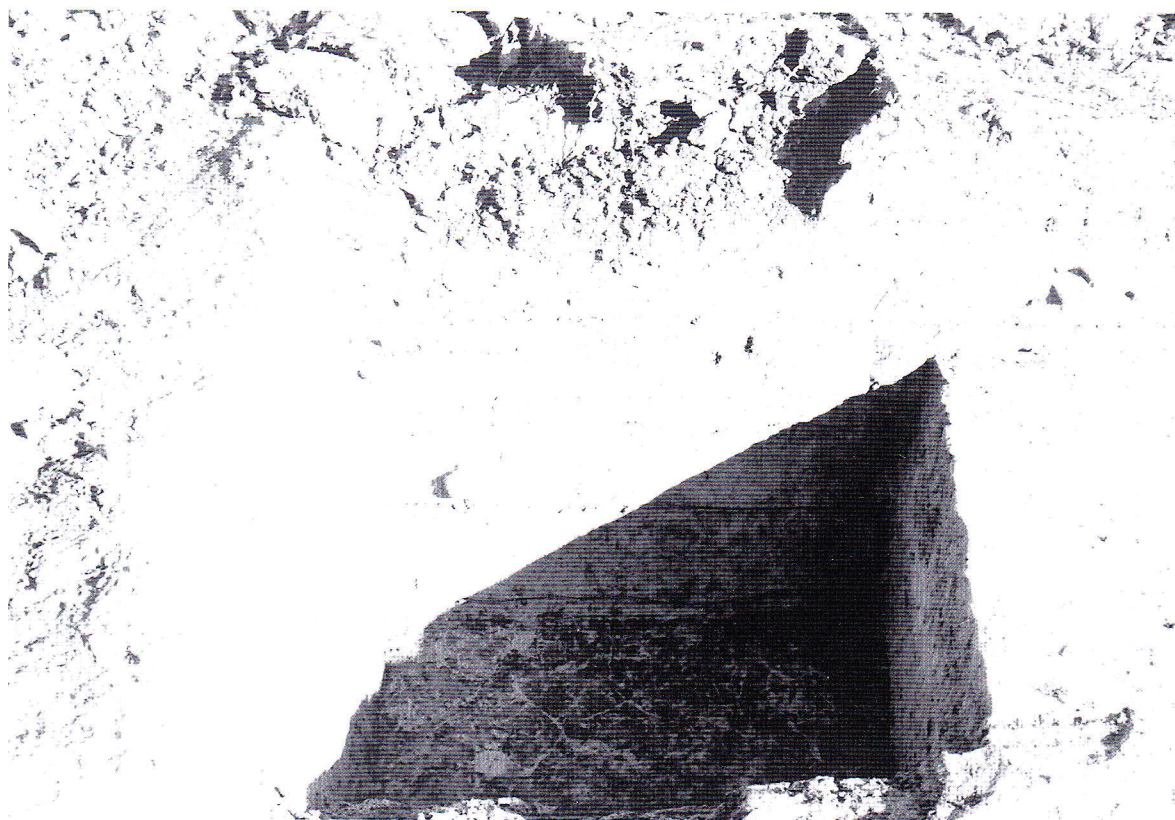


SK-1 (南から)



SK-1 (東から)



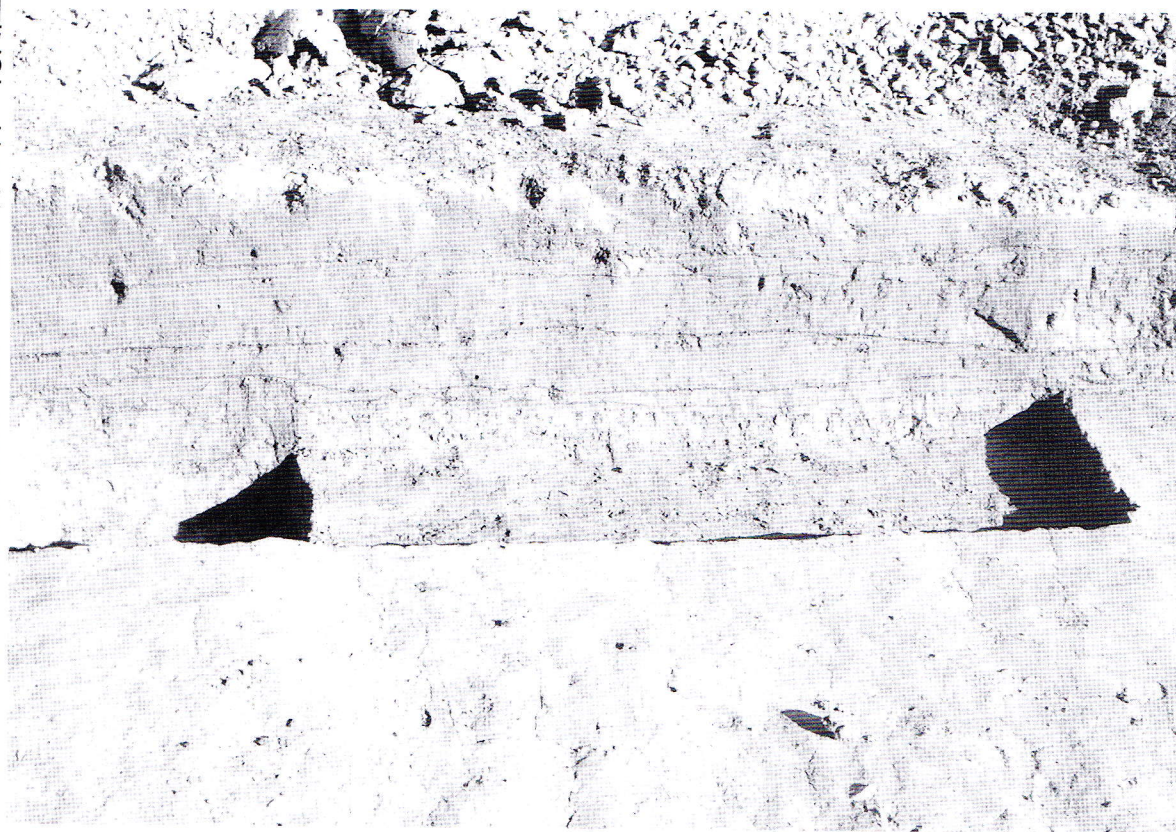


サブトレンチ1 (西から)



サブトレンチ2 (西から)





サブトレンチ 3 (西から)



サブトレンチ 4 (西から)





調査前の状況(北西から)

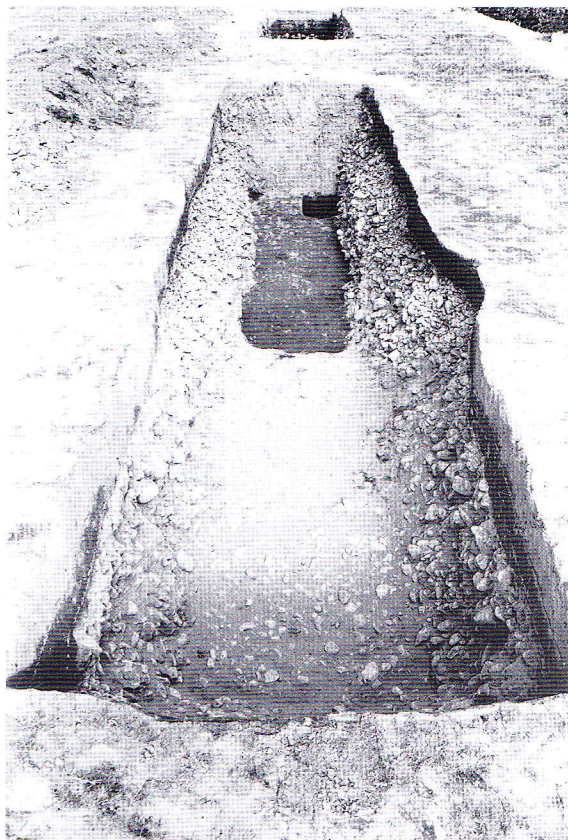


調査前の状況(南東から)





第1区 全景(北から)



第2区 全景(南から)

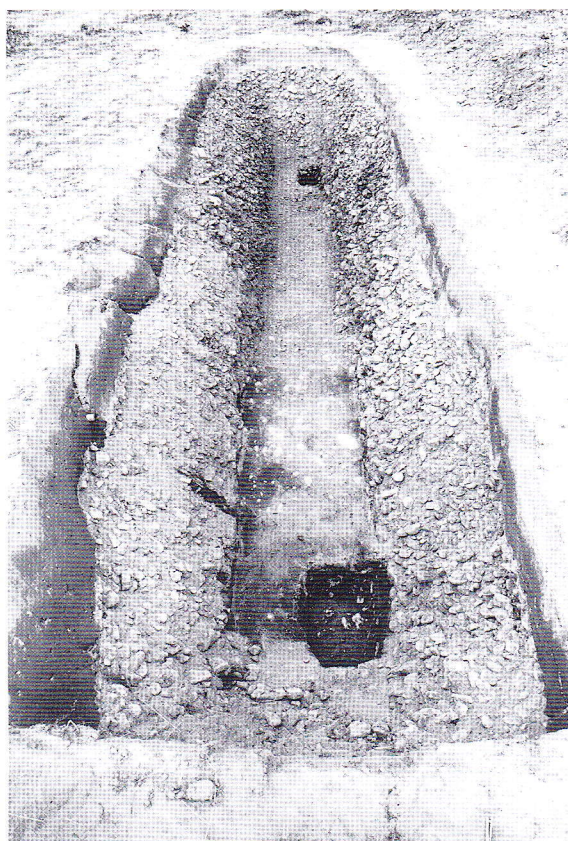


第3区 全景(南から)



第4区 全景(北から)

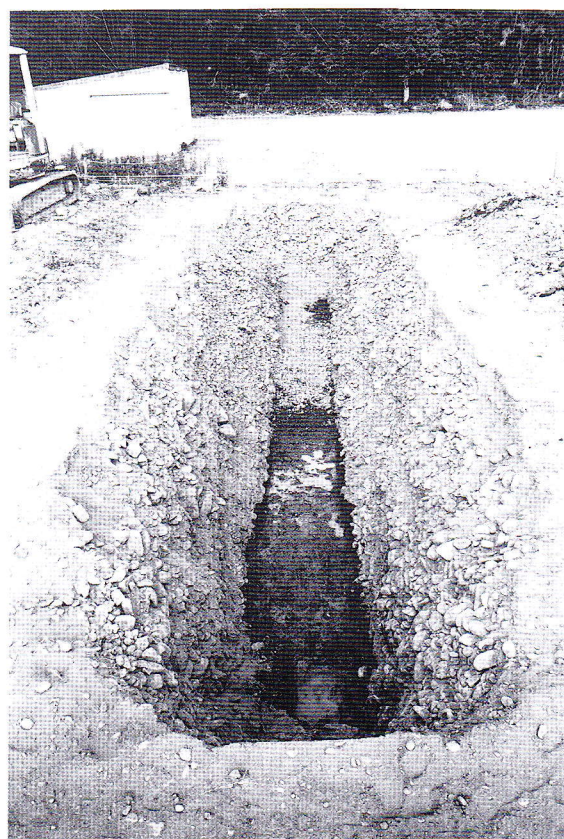




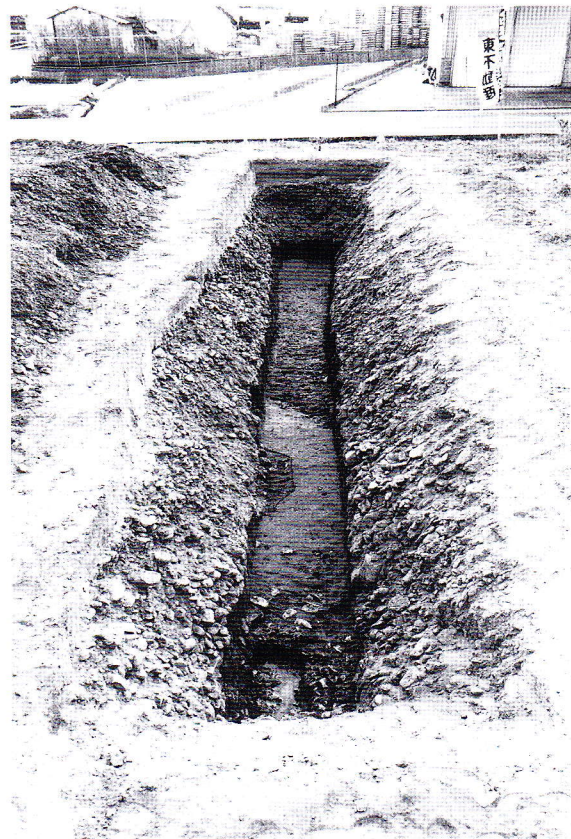
第5区 全景(南から)



第6区 全景(南から)



第7区 全景(南から)



第8区 全景(北から)





第1区 SK-1 (東から)



第1区 東端部東壁SK-1土層堆積状況(西から)





第4区 SK-2(東から)



第4区 北壁SK-2土層堆積状況(南から)





第1区 石垣付近東壁土層堆積状況(西から)



第2区 南端部東壁土層堆積状況(西から)





第4区 石垣付近東壁土層堆積状況(西から)

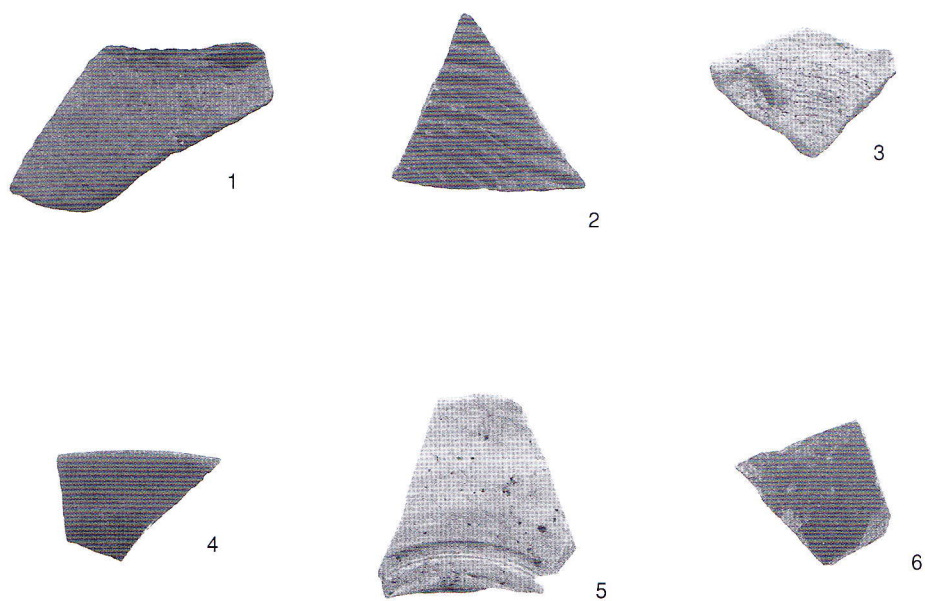


第6区 北端部東壁土層堆積状況(西から)





第7区 南端部東壁土層堆積状況(西から)



土師器 1 甕、須恵器 2 甕、中世土師器 3 皿、瓦器 4・5 椀、国産陶器 6 甕



平成19年3月31日発行

## 和歌山市内遺跡発掘調査概報告

— 平成17年度 —

編 集 財団法人和歌山市都市整備公社  
和歌山市西汀丁36

発 行 和歌山市教育委員会  
和歌山市七番丁23

印 刷 株式会社 高木プリント

© 和歌山市教育委員会 2007